

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X V - 1

——長浜市森前遺跡・国友遺跡・小沢城跡・
坂田郡近江町正恩寺遺跡——

1988

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

表紙表

P - L	紙	頁
P33-L15	2頁紙文	2頁紙文
P33-L32	紙文	紙文
P34-L21	和九九の角型印の3頁紙文	和九九の角型印の3頁紙文
P34-L33	3頁紙文	3頁紙文
P34-L35	3頁紙文	3頁紙文
P34-L36	3頁紙文	3頁紙文
P35-L04	紙文	【附】
P35-L04	表の増設分	表の増設分
P35-L16	紙型等、(大紙)	【附】 紙型等、(大紙)
附録13 (附2)	T、大紙通称 (山梨町)	T、大紙通称 (山梨町大紙)
附録13 (附3) 右	又1の原稿	又1の原稿

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X V - 1

——長浜市森前遺跡・国友遺跡・小沢城跡・
坂田郡近江町正恩寺遺跡——

1988

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、ほ場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加しているところであります。こうした状況のもと、調査が工事と並行して円滑に実施できるように鋭意努力しているところです。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和62年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

昭和 63 年 3 月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志 農 夫

例 言

1. 本書は昭和62年度県営ほ場整備事業に伴う長浜市森前遺跡・国友遺跡、同市小沢城跡、坂田郡近江町正恩寺遺跡の発掘調査報告書で、昭和62年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、長浜市教育委員会、坂田郡近江町教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
〃 課長補佐	田口字一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
〃 技師	木戸 雅寿
管理係主任主事	山出 隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理 事 長	吉崎 貞一
事 務 局 長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査三係長	兼康 保明
〃 技師	稲垣 正宏
〃 技師	浜崎 悟司
総 務 課 長	山下 弘
主任主事	立入 裕子
主任主事	東浦 良子

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者浜崎悟司(第I・II章)、稲垣正宏(第三章)が行い、第三章一五については北村圭弘が執筆した。
7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

I 長浜市森前遺跡・国友遺跡	
1. はじめに	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 調査の結果	1
(1) 森前遺跡の調査	1
(2) 国友遺跡の調査	9
4. まとめ	16
II 長浜市小沢城跡	
1. はじめに	21
2. 調査の方法と経過	21
3. 調査の結果	21
4. おわりに	26
III 坂田郡近江町正恩寺遺跡	
1. はじめに	27
2. 位置と環境	27
3. 調査	27
(1) 発掘調査	27
(2) 試掘調査	29
4. おわりに	29
5. 付論 正恩寺遺跡出土の瓦について	33
(1) 出土、採集瓦について	33
(2) 瓦からみた正恩寺遺跡の位置づけ	34

図版目次

I 長浜市森前遺跡・国友遺跡

- 図版 一 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 二 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 三 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 四 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 五 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 六 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 七 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 八 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版 九 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版一〇 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版一一 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版一二 森前遺跡 遺跡 (写真)
図版一三 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版一四 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版一五 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版一六 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版一七 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版一八 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版一九 国友遺跡 遺跡 (写真)
図版二〇 森前遺跡 遺物 (写真)
図版二一 森前遺跡 遺物 (写真)
図版二二 森前遺跡 遺物 (写真)
図版二三 森前遺跡 遺物 (写真)
図版二四 国友遺跡 遺物 (写真)
図版二五 国友遺跡 遺物 (写真)
図版二六 国友遺跡 遺物 (写真)
図版二七 国友遺跡 遺物 (写真)
図版二八 国友遺跡 遺物 (写真)
図版二九 森前遺跡・国友遺跡 遺物 (写真)
図版三〇 森前遺跡・国友遺跡 調査区
図版三一 森前遺跡 遺構
図版三二 森前遺跡 遺構
図版三三 森前遺跡 遺構

- 図版三四 森前遺跡 遺構
- 図版三五 森前遺跡 遺構
- 図版三六 森前遺跡 遺構
- 図版三七 国友遺跡 遺構
- 図版三八 国友遺跡 遺構
- 図版三九 国友遺跡 遺構
- 図版四〇 森前遺跡 遺物
- 図版四一 森前遺跡 遺物
- 図版四二 森前遺跡 遺物
- 図版四三 森前遺跡 遺物
- 図版四四 森前遺跡 遺物
- 図版四五 森前遺跡 遺物
- 図版四六 国友遺跡 遺物
- 図版四七 国友遺跡 遺物
- 図版四八 国友遺跡 遺物
- 図版四九 国友遺跡 遺物
- 図版五〇 国友遺跡 遺物
- 図版五一 国友遺跡 遺物
- 図版五二 国友遺跡 遺物
- 図版五三 森前遺跡 遺物

II 長浜市小沢城跡

- 図版 一 遺跡 (写真)
- 図版 二 遺跡 (写真)
- 図版 三 遺跡 (写真)
- 図版 四 遺跡 (写真)
- 図版 五 遺跡 (写真)
- 図版 六 遺跡 (写真)
- 図版 七 遺跡 (写真)
- 図版 八 遺跡 (写真)
- 図版 九 遺跡 (写真)
- 図版一〇 遺跡 (写真)
- 図版一一 遺物 (写真)
- 図版一二 遺物 (写真)
- 図版一三 遺物 (写真)
- 図版一四 調査区
- 図版一五 遺構

図版一六 遺構

図版一七 遺物

III 坂田郡近江町正恩寺遺跡

図版 一 正恩寺遺跡 (写真)

図版 二 正恩寺遺跡 (写真)

図版 三 正恩寺遺跡 (写真)

図版 四 正恩寺遺跡 (写真)

図版 五 正恩寺遺跡 (写真)

図版 六 正恩寺遺跡 遺物 (写真)

図版 七 正恩寺遺跡 遺物 (写真)

図版 八 正恩寺遺跡 遺物 (出土遺物)

図版 九 正恩寺遺跡 遺物 (出土遺物)

図版一〇 正恩寺遺跡 遺物 (出土遺物)

図版一一 正恩寺遺跡 遺物 (出土遺物)

図版一二 正恩寺遺跡 遺物 (出土遺物)

図版一三 正恩寺遺跡 天野川流域における古代瓦出土遺跡・正恩寺遺跡の創建から廃絶に至る様相

図版一四 正恩寺遺跡 三大寺廃寺・法泉寺廃寺・正恩寺遺跡出土平瓦の同一原体による凸面叩き

図版一五 正恩寺遺跡 瓦法量図・正恩寺遺跡試掘トレンチ土層柱状図

挿 図 目 次

I 長浜市森前遺跡・国友遺跡

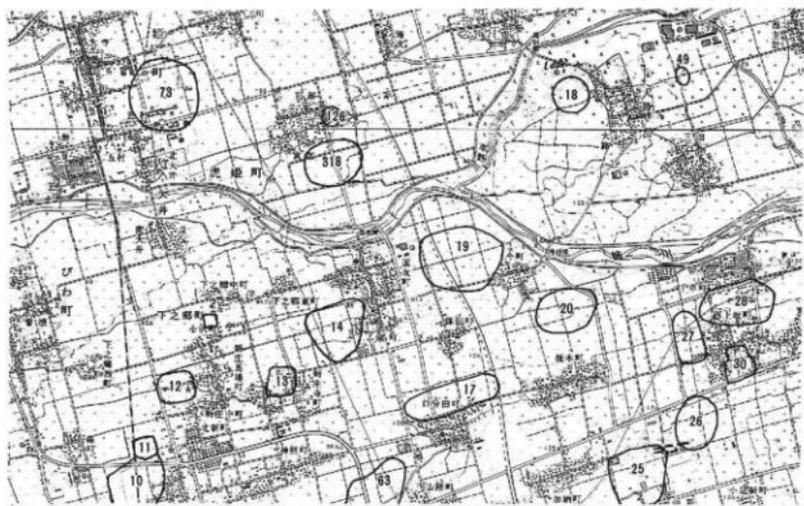
第1図	D地区SD-1遺物出土状況	4
第2図	D地区SH-3遺物出土状況	4
第3図	D地区SH-4遺物出土状況	4
第4図	H地区SH-1遺物出土状況	10
第5図	G地区SK-11遺物出土状況	10
第6図	国友遺跡古墳時代遺構分布概略図	14
第7図	試掘坑出土遺物	15
第8図	森前遺跡弥生～古墳時代遺構分布概略図	15
第9図	森前・国友遺跡出土土器編年試案	18

II 長浜市小沢城跡

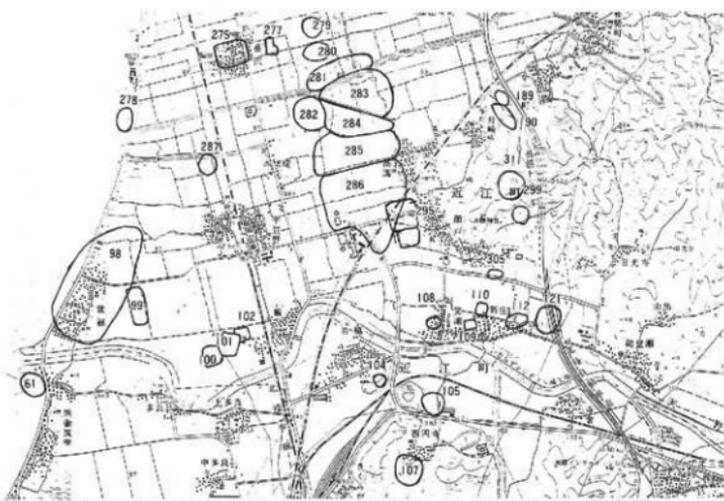
第1図	館跡内部遺構平面図	23
第2図	石列1実測図	23
第3図	南辺出入口部検出状況図	25
第4図	堀内欄状遺構検出状況図	25

III 坂田郡近江町正恩寺遺跡

第1図	遺跡位置図	28
第2図	出土遺物	29
第3図	遺構全体図(その1)	30
第4図	遺構全体図(その2)	31



2. 小沢城跡, 10. 十里町遺跡(綱文~平安), 12. 新庄馬場遺跡(白風), 13. 神照寺坊遺跡(奈良~), 14. 泉町西遺跡(奈良~平安), 17. 口分田北遺跡(弥生~平安), 19. 国友遺跡, 20. 森前遺跡, 25. 越前塚遺跡(弥生~古墳~平安), 26. 大塚遺跡(弥生~古墳~平安), 27. 神戸遺跡(古墳~平安), 28. 大月遺跡(古墳~奈良), 33. 川崎遺跡(弥生~古墳~奈良), 318. 宮部遺跡, 73. 五村遺跡(弥生~平安), 126. 宮部城遺跡(室町), 48. 祇園寺遺跡(古墳), 49. 路久呂坊遺跡(平安)



98. 世継遺跡(弥生~平安), 99. 世継寺遺跡, 100. 普明庵遺跡, 101. 正惠寺遺跡, 102. 地蔵堂遺跡, 104. 感翠寺遺跡, 105. 西門寺遺跡(弥生), 107. 西門寺館遺跡, 108. 當願寺遺跡, 109. 箕浦(新庄)城跡, 110. 淨蓮寺遺跡, 112. 新庄遺跡(鎌倉~江戸), 121. 塚の越館遺跡, 189. 鶴頭山古墳群, 190. 舟崎山古墳群, 275. 長興城跡, 277. 長興城跡, 278. 土川湖底遺跡(綱文~鎌倉), 279. 長沢遺跡(弥生~平安), 280. 西火打遺跡(平安), 281. 奥松戸遺跡, 282. 輪遺跡(古墳~平安), 283. 法勝寺遺跡(綱文~鎌倉), 284. 狐塚遺跡(古墳~白地~平安), 285. 高溝遺跡(綱文~平安), 286. 願門遺跡(綱文~古墳), 287. 五反田遺跡(弥生), 295. 長門寺遺跡, 299. 弘光寺遺跡

第 I 章 長浜市森前遺跡・国友遺跡

1. はじめに

森前遺跡・国友遺跡は、長浜市今町地先に所在し、従来奈良～平安時代・古墳時代の集落跡としてそれぞれ周知されてきたところである。昭和62年度の県営ほ場整備事業はこの両遺跡にかかるため、工事に先立つ発掘調査が行われることとなった。当報告は、その調査成果をまとめたものである。

森前遺跡は長浜市域でも北東端に近い今町の集落の東～南東方向にあり、地元の人々が「カジヤ街道」と呼ぶかすみ堤の南方の畑地及び水田で遺物の散布が認められていた。現地の標高は108～109m前後で、湖北第一の河川である姉川は北方200mの近きを流れる。森前遺跡自体の発掘調査は今回が最初のものであるが、当地の東に隣接する松塚遺跡1区・2区（昭和61年度調査）では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての方形周溝墓・溝等が検出されている。

国友遺跡は今町集落の西方の水田中にあり、古くからその存在が知られている。1980年度に北陸自動車道の建設に伴う発掘調査が行われ、古墳時代初頭～同中期にかけての遺物を多量に含む河川跡・溝・土壇等が検出されている。当地は標高104～106mをはかる。

なお、現地の調査にあたっては、地元今町の方々をはじめ関係各方面から多大なる協力を得ることができた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

2. 調査の方法と経過

まず、遺跡の範囲とその地下深度について知る資料を得る目的で、工事による切土及び排水路計画箇所⁽¹⁾に2×3mを基本とする試掘坑を設定した。その結果、今町東方～南方の小字森前・若森・池田・堀町・杉ノ木・柳町・六反田、及び町北西～西方の小字三七町・杉町・丁堀町・三ノ橋・六ノ町等において遺跡の存在が確認されるに至った。関係部局との協議により、工事による遺跡への影響が避けられないと考えられた地区について、図版三〇に示すような調査区（森前遺跡：A～E地区、国友遺跡：F～J地区）を設定して発掘調査を行い、記録の収集と保存をはかることとなった。

現地調査は、森前遺跡については試掘調査を昭和62年5月、発掘調査は同年6～8月に、国友遺跡については試掘調査を昭和62年9月、発掘調査は同年10月に行った。

3. 調査の結果

調査の結果、森前遺跡調査区において弥生時代後期～中世初頭の遺構・遺物を、国友遺跡調査区においても古墳時代初頭～同中期、中世初頭とみられる遺構・遺物をそれぞれ検出した。ここでは、森前遺跡・国友遺跡で項を分け、検出された遺構・遺物を紹介する。

(1) 森前遺跡の調査

調査区と遺構

A地区（図版二・三）「カジヤ街道」の北に、水路をはさんで設けた南北20m×東西15mの調査区である。同地における層序は、耕作土・濁灰色粘質土であり、その下の黄灰色粘質シルト層上面が遺構検出面となる。遺構検

出面の高さは調査地南部で106.5m、北部で106.4mを測る。A地区で検出された遺構には、掘立柱建物1・柱列1・井戸2・土坑・溝等がある。

SB-1 調査地中部で検出した南北2間(5.8m)×東西2間(4.3m)の総柱の掘立柱建物である。方位はN1°Eを指す。柱穴は径30cm前後の円形の掘方をもち、柱痕跡は15cm前後を測る。

SA-1 調査地東部で検出した2間(5.05m)の柱列である。方位はN1°Eを指す。柱穴は径25cm前後。東へのびて掘立柱建物となる可能性がある。

SE-1 調査地北東部で検出した95cm×70cmの平面長方形の土坑で壁は垂直に近く、掘込みの過程で明確に肌分かれた。深さ50cmまで掘込んだが完掘はしていない。井戸とみられる。

SE-2 SB-1の南西1.5mに位置する径約180cmの平面円形の土坑で側壁は垂直に近い。深さ50cmまで掘込んだが完掘はしていない。井戸とみられる。

B地区 (図版三・三二)「カジャ街道」南方の水田に設けた南北25m×東西7.5mの調査区である。遺構検出面は地表下30cmの灰色砂礫土層上面であり、調査区南部では黄灰色粘質シルト層上面がこれにあたる。検出面の高さは108.3mを測る。検出された遺構には掘立柱建物1・井戸1・土坑等がある。

SB-1 調査地北部で検出した南北2間(3.3m)×東西2間(3.5m)以上の掘立柱建物で方位はN4°Eを指す。北の柱穴には、東西方向の浅い溝に切られるものがある。柱穴は一辺60cm程度の方形を呈し、柱痕跡は径約20cmを測る。

SE-1 調査地中部で検出した土坑で、平面形は1.4m×1mの卵形を呈する。側壁は垂直に近く、深さ60cm以上ある。井戸とみられる。埋土中に須恵器杯(72)等を含んでいた。

C地区 (図版四・三三) B地区の東方20m、小字池田の西端に設けた45m×5mの南北に細長い調査区である。遺構検出面は地表下40cmの淡黄灰色粘質シルト層上面であるが、調査区中部のSD-5付近より南では暗褐色土上面がこれにかわる。遺構検出面の標高は北部で108.5m、南部で108.2mを測り、南に向かって緩やかに低くなる。検出された遺構には、掘立柱建物1・土坑5・溝9等がある。

SB-1 調査区南部で検出した南北2間(4.2m)の柱列で、西側に1間(0.95m)の廂をもつ。方位はN5°Wを指す。柱穴は径25cmの円形を呈し、柱痕跡は径10cm程度、廂の柱穴は径20cm、柱痕跡は8cm程度である。

SK-3・4 調査区北部で検出した土坑である。共に東西方向の溝(SD-3)を切る。SK-3は上面で南北200cm以上を測るもので、深さ20cm以上ある。埋土上位に主節器・灰釉陶器等多量の土器を含んでいた。SK-4は南北120cm、東西110cmの不整形を呈するもので深さは40cmを測る。

SD-7~9 調査区南部で検出した溝でいずれも「形に屈曲し東及び南へのびる。いずれも幅約20cm、深さ5~10cmの狭小なものである。

D地区 (図版五・一・三四~三六) 小字杉ノ木に設定された東西方向の排水路敷、3m×160mの調査区である。同地においては耕作土・床土下に東部では弥生時代後期の、中~西部では古墳時代の遺物包含層がそれぞれ20cm内外の層厚をもって堆積し、その下に黄色粘質シルト・灰褐色礫土層が堆積する。東部で検出した弥生時代後期の包含層は特に多量の遺物を含んでいた。遺構は、これらの堆積土層のうち、黄色粘質シルト層及び弥生時代後期の遺物包含層である暗褐色土層のそれぞれ上面で検出したものである。検出した遺構には弥生時代後期の堅穴住居4・溝1・古墳時代初期の溝3、古墳時代中期の溝・土坑、中世初期の柱列2等がある。

SD-1 調査区中東部寄りの黄色粘質シルト上面で検出した溝で、北西~南東方向にのびるが南東端でやや東方に屈曲するようである。検出面で幅1.2m~1.8m、深さは北西で15cm、南東部は30cmを測る。断面は血状を

呈する。屈曲部で土師器壺・高杯、須恵器蓋杯・甕・壺、鉄刀等が集め置かれた状態で検出された（第1図）。

SD-2 SD-1の西で検出した溝で調査区内で屈曲し、南東・南西方向へのびる。埋土を柱列（SA-1・2）の柱穴によって切られる。断面U字形を呈し、幅2.2m、深さ40cmをはかる。埋土中から鉄釘（265）が出土している。

SA-1 SD-2と重複して検出された柱列で東西4間（8.0m）を数える。方位はN4°Wを指す。柱穴は径30cmの円形で柱痕跡は15cm程度。東端の柱穴より土器（80・81）が出土している。

SA-2 SA-1に一部重複する柱列で東西2間（5.0m）を数える。方位はN5°Wを指す。柱穴は径30cmの掘方をもち、柱痕は15cm程度である。東端の柱穴より土器（82）が出土している。

SX-1 SD-2の西で検出した上面幅3mを測る大規模な溝である。調査区を南北に横切る。深さ90cmを測り、溝底は堅固な灰褐色礫土層を30cm程度掘り込んでいる。断面U字形を呈する。埋土上位～中位にかけて弥生時代後期の土器を多量に含んでいた。

SD-3 SX-1の西で検出された溝で北西-南東方向へのびる。幅3.9mを測る断面U字形の溝である。

SD-4 SD-3の西で検出した溝で北東-南西方向へのびる。幅2.5mを測る断面U字形の溝である。溝底から土師器壺（69）が出土している。

SD-6 SD-4の西で検出した北西-南東方向へのびる溝で幅1m、深さ30cmを測る。断面はV字形を呈する。溝底は南東部の方が低い。

SD-7 SD-6の西2mを南北に走る溝で、幅1.8m、深さ50cmを測る。断面V字形を呈する。検出区間の北部で壺（48）が倒位つぶれた状態で出土した。

SD-8 SD-7の西12mで検出した溝で、検出区間で「く」の字形に屈曲して北西及び北東へのびる。方形周溝墓の周溝の一部であるものとみられる。幅は1.9m、深さ23cmを測る。東溝部では外方へ肩が広がる部分があり、同所では溝底が15cm下がる。元来土坑状の施設があったものとみられるが周溝埋土との先後関係は明らかでない。遺物としては周溝内から鉄製品（266）、落ちこみの肩にあたる部分より壺（49）が出土している。

SD-9 SD-8の西8mを南北に走る溝で、幅1.2m、深さ25cmを測る。

SD-10 SD-9の西を北西-南東方向に走る溝で、幅1.5m、深さ30cmを測る。他の溝がすべて粘質系の埋土をもつのに対し、唯一粗砂を埋土にもつ。遺物は出土しなかった。

なお、SD-10以西においては、15mまでの範囲において遺構の検出はなかった。

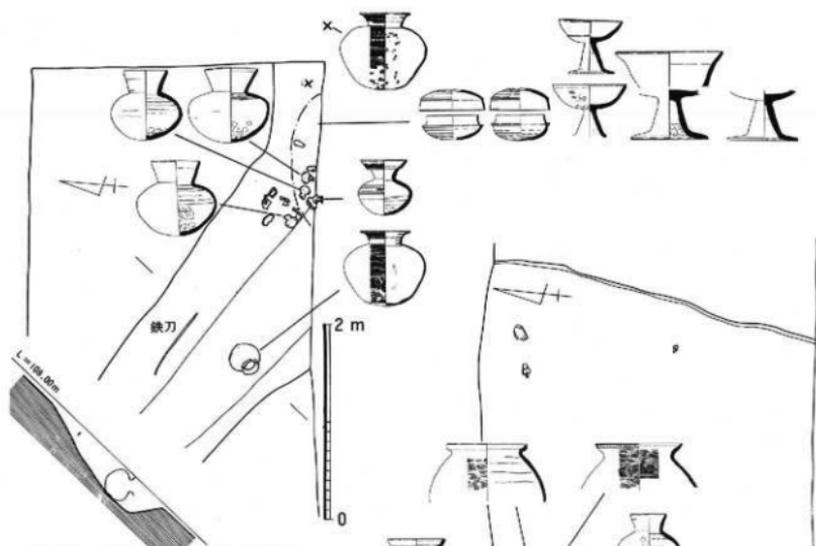
SD-11以東においては既述のように上下2面において遺構を検出した（図版二四）。以下では上層検出遺構を先に、下層検出遺構を後に述べる。

SD-11 弥生時代後期の遺物包含層である暗茶褐色土層上面で検出した溝で、北東-南西方向へのびて、SD-1の東南の屈曲部に続くものとみられる。幅1.4m、深さ30cmを測る。

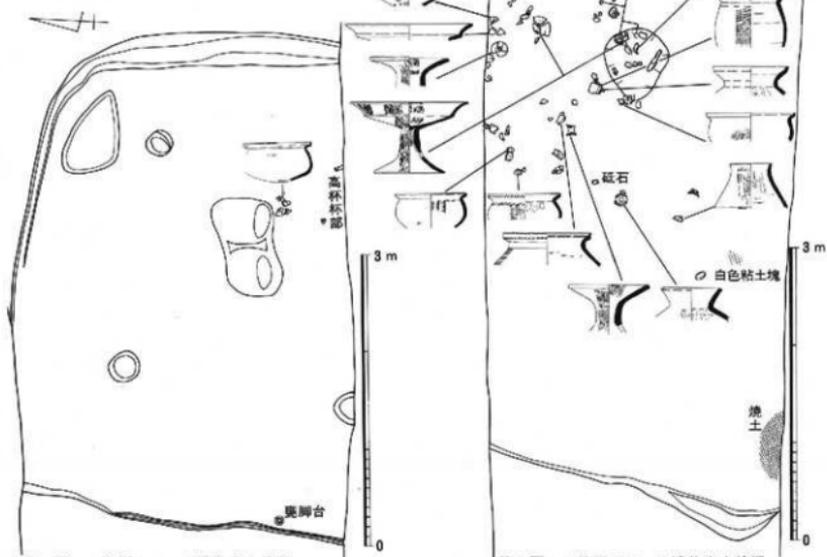
SK-1 SD-11の東12mで検出した東西に軸をもつ長方形の土壌である。長軸2.8m×短軸0.9mを測る。側壁は垂直に近く、検出面からの深さは12cmを測る。

SD-12 SK-1の東6mで検出した溝で、調査区内で屈曲し、北東及び南西へのびる。SD-13と共に方形周溝墓の周溝を構成するものとみられる。幅1.6m、深さ20cmを測る。屈曲部付近より高杯（65・66）が出土している。

SD-13 SD-12の東で検出した溝で、北東-南西方向に直線的へのびる。幅1.0m、深さ18cmを測る断面U字形の溝である。



第1图 D地区 S D-1 遗物出土状况



第2图 D地区 S H-3 遗物出土状况

第3图 D地区 S H-4 遗物出土状况

SH-1 SD-11の下位の、黄色粘質シルト上面で検出した方形の落ちこみで、北辺にあたる部分を検出した。一辺5.2m以上、深さ20cmを測る。壁溝・柱穴等の検出はないが、その形状から堅穴住居の可能性はある。遺物は埋土中に少量の土器片を含むが、図化できるものはない。

SH-2 SH-1の東で検出した堅穴住居で、北辺で3.2m、西辺で3.1mを測る略方形の堅穴住居である。深さ20cmで床面に至る。床面上には1ケの小ピット(径10cm)がある他は特に所作は認められなかった。埋土中に弥生時代後期の土器の小片を含んでいたが、図化できなかった。

SH-3 SH-4の東1mに位置する隅丸方形の堅穴住居で、東西約5.1mを測る。深さ10cmで床面に至る。床面には、壁溝・柱穴・焼土を含む土坑等がある。壁溝は北壁・東壁及び西壁の北部を除く箇所の直下で認められる。北壁下～東壁下に続くものは、幅10～35cm、深さ10cmを測る。西壁につくものは幅5cm、深さ4cmを測るもので北西コーナーには達せず壁がわずかに西に張り出した部分で途切れている。柱穴は3ケを検出した。住居の対角線上に配された、径35cmを測るものである。柱穴を結んだラインの内側は、床面の踏み固めが顕著である。その中心部及びそれに東接した箇所には、焼土・炭化物を多量に含む浅い長円形の落ちこみが2カ所認められた。床面上から弥生時代後期の鉢(47)・高杯片が、西壁溝の際から甕の脚台部とみられる破片が出土している(第2図)。

SH-4 SH-2・3間で検出された東西幅で8.1mを測る大形の堅穴住居である。深さ25cmで床面に至る。検出区間のほぼ中央で焼土・炭化物を含む落ち込み(75cm×65cm、深さ10cm)を検出した。その周辺で弥生時代後期の土器等を検出した(第3図)他、床面に至るまでの埋土中にコンテナ4箱の土器が含まれていた。

E地区 「カジャ街道」をはさんで小字杉ノ木と柳町のそれぞれ西端に南北に設定した調査区である。E地区では「カジャ街道」北部の地表下30cmの灰色礫層上面で溝を1条検出した他は遺構の検出はなく、遺物のみの検出にとどまる。北部で検出された溝は、北西～南東にのびるもので上面幅2.6m、深さ80cmを測る断面V字形のもので、土師器(83～90)を含んでいた。

遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代後期・古墳時代初頭・同前期・同中期・平安時代後期～末のものを中心に土器類でコンテナ35箱に達した。また、若干の鉄製品・石製品も出土している。中でも、D地区東部の遺物包含層を中心に出土した弥生時代後期の土器が、量的には半ば以上を占める。ここでは遺構に伴って出土したものを中心に述べる。

D地区SH-3出土土器(47) 口径2.6cmを測る鉢で、受口状を呈する口縁部外面と体部上位に刺突文を施す。D地区SH-4出土土器(21～46) 図化できたものには壺5・甕5・鉢7・高杯5・器台2等がある。壺(21～25)には南口のもの(21)、口頸部が外反して開くもの(22)、直線的に外傾して開くもの(23)、受口状を呈するもの(24・25)がある。25の体部上位には3条の同心円状の陰刻が認められる。甕(26～30)には口縁部が「く」の字形に屈曲して開くもの(26・27)、受口状を呈するもの(28～30)がある。29を除くものの体部外面には煤が付着している。鉢(33～39)は口縁部を受口状に作るもので占められている。器面の荒れが著しい39を除くれば、すべてのものの外面に煤が付着する。高杯(40～44)には杯部が外反するもの(40～42)、浅・深のワイングラス状のもの(43・44)がある。完形に復元できる42は口径24cm・器高14.5cmを測る。器面にはヘラミガキを施すが、口縁部外面では部分的な省略がある。杯部中央は粘土板を充填して成形している。器台(45・46)は短い筒状部から外反して開く直線的な受部をもつもので口径は16cm前後を測る。

D地区SX-1出土土器(1～20) 図化できたものには壺3・甕6・鉢2・高杯2・器台4等がある。壺には

球形に近い体部に外反して開く口縁部を付加するもの(1)、受口状の口頸部を付加するもの(4)、ややしまった頸部に受口状の口縁部を付加するもの(3)がある。なお、1の体部外面には赤彩痕をわずかに認めることができる。甕(5~10)には、口縁部が単純に外反するもの(5・6)と受口状を呈するもの(7~10)がある。10のみ外面に煤の付着が認められる。鉢には底部から軽く内彎気味に開く器形の11と、口縁部が受口状を呈する12がある。12の体部外面には煤が付着する。高杯(13・14)は杯口縁部が外反する形態をもつが、やや小振りの14では杯口縁部の屈曲・外反はさほど強くない。器台(17~20)には長い筒状部をもつもの(18)、短い筒状部から屈曲して直線的に開く受部をもつもの(17)、外反して開くもの(20)、筒状部が短くX字形を呈するもの(19)がある。いずれも裾部上位に3方向の円孔を施す。

D地区SD-7出土土器 48は球形の体部をもつ甕である。短く直立する頸部から強く外反する口縁部は水平に開き、端部を下卑させ、端面に櫛描波状文を施す。

D地区SD-8出土土器 49は球形に近い体部から屈曲して直線的に開く口縁部をもつ。口縁部は端部を上方向に捻み上げ、頸部にヘラ状具による刻目を施す。体部外面に粗いハケメをとどめ、煤の付着は認められない。

D地区SD-12出土土器 口径30cm前後を測る大型の高杯が2点ある(65・66)。いずれも内彎して立ち上がる深い杯部をもつもので、66は口縁部内面に櫛描直線文の施された幅5cm余りの肥厚帯をもつ。

D地区SD-13出土土器 壺(67)はよくしまった頸部から直線的に外傾して開く口縁部の破片で、端部外面に櫛描直線文を施す。高杯(68)は低平な脚部の破片で、裾部との境で3方から円孔を穿つ。

E地区北部溝出土土器(83~90) 壺2・鉢1・高杯3・器台1がある。壺には、球形の体部に直線的に開く口頸部のつくもの(83)と、内面に屈曲部をもつ二重口縁の壺(84、85は体部下半)がある。86は口径9.2cm、器高7.2cmを測る小形の鉢である。底部はわずかに上げ底気味で、最大径は体部中位にある。口縁部は受口状につくり端部をわずかに外方に引き出す。高杯には口径が20cmを越すもの(87・88)とより小形のもの(89)がある。脚部は屈曲して開き、3方から円孔を穿つ。器台(90)は「ハ」の字形に直線的に開く脚部と浅い受部からなり、受部の口縁は上方に立ち上がり端部はわずかに外反する。脚部には4方から円孔を穿つ。外面にはわずかに赤彩痕を認めることができる。以上のE地区北部溝出土土器のうち、83・87・88・90には精緻なヨコヘラミガキと精良な胎土という点において、作風に強い共通性を認めることができる。

D地区SD-1出土土器(50~64) 須恵器と土師器が出土している。図示できたものの内訳は、須恵器壺1・甕2・杯蓋身各2・土師器壺3・高杯4である。須恵器壺(50)は玉ねぎ形の体部にややしまった短い頸部を持ち、口縁部は外傾して開き端部は内傾して凹んだ面をもつ。体部中位に施された2条の沈線間及び口縁部外面に櫛描波状文が施される。52は口径20cm、器高30cm強を測る甕である。肩の強く張った体部と外反して開く口縁部からなる。体部外面は平行タクキメで整形後回転クシメを施し、内面は青海波の当具痕をナゲ消す。口縁部はロクロナデで、端部は面を取り内面は凹む。頸部外面には突線を3条巡らせ、上と中の突線間に櫛描波状文を施す。51は、中の突線にもう一帯の全周しない櫛描波状文を施す他は、細部の特徴に至るまで52に一致する。杯蓋(53・55)は低平な天井部から屈折してやや外開き気味に下る口縁部をもつ。端部は凹む。天井部に回転ヘラクズリを施す。杯身(54・56)は口縁端部を面取るか丸く収めるもので底部に回転ヘラクズリを施す。以上の須恵器は焼成堅緻で器表面は暗青灰色を呈し、割口は淡いセピア色を呈する。土師器壺(57~59)はいずれも丸底の体部と外傾して直線的にのびる口頸部をもつものである。器壁がやや厚く、口縁部を上方にのぼすもの(57)と器壁が薄く、肩が強く張る形態のもの(58・59)がある。いずれも粉っぽい密な胎土を用い、橙灰色系の色調を呈する点で共通する。高杯(60~64)には屈曲して立ち上がる杯部をもつ中形品(60~63)と碗形の杯部をもつやや小

形のもの(64・65)がある。中形品は黄茶色系の色調を呈するのに対し、椀形の杯部をもつものは橙褐色に近い焼き上りを示し、胎土も壺類のそれに類似する。

D地区SD-4出土土器 69は球形の体部をもつ壺で口頸部は軽く外反して開き、端部を丸く収めるものである。小形丸底壺の範疇にはいるものであろう。

C地区SK-3出土土器(91~96) 図示できたものの内訳は土師器杯5・灰釉陶器皿1である。土師器杯には3つの形態のものがある。91~93は口径11.7~12.4cm・器高3.0~3.8cmを測るもので口縁部内外をクロコナデし、底部外面に回転ヘラ切痕を残す。器壁は薄く、橙色系の色調を呈する。94は角形の高台の付くもので器壁は前者より厚い。95は底部外周に断面三角形の高台の付くもので、腰の張りのない直線的な体部から外反して開く口縁部をもつ。胎土は精良なものを用い、淡灰茶色を呈する点において前2者と異なる。灰釉陶器皿(96)は角形に近い高台とわずかに外反する口縁部を有し、施釉は底面を除く外全面と見込みを除く内面にハケ塗りによって行われる。

A地区出土土器(70・71・97) 70はSA-1、71はSB-1の柱穴からそれぞれ出土した土師器皿である。口径は8.3・7.9cmを測る。97は遺構検出時に採集した山茶碗で腰の張りの少ない体部に断面三角形の低い高台が付く。接地区に朽痕が残る。

B地区出土土器(72・98) 72はSE-1の埋土中に含まれた須恵器杯身で、立ち上りの短いものである。口径10.8cmを測る。

C地区出土土器(73~79・99~103) 73・74はSD-3出土の灰釉陶器である。73は椀形のもの底部で三日月高台をもつ。74は皿で腰部に張りがなく、口縁部も外反しない直線的な器形をもつ。高台は低く丸味をもった三日月高台で、外底面には回転糸切り痕を残している。75~78はSD-4出土の灰釉陶器で、75が皿、76・77は椀、78は壺形のものである。高台は75が小さな角形、76・77はわずかに外開きの三角形、78は外へ踏ん張る台形の断面形をそれぞれ有する。SD-9出土の土師器皿(79)は略完形品で口径10.4cm、器高1.7cmを測る。口縁部は「て」の字状で端部は上方に丸く肥厚する。99~103は遺構検出時に採集したものである。99は土師器皿で、底部から屈曲してのびる口縁部をもち、端部に面取りのナデを施す。101・102は灰釉陶器椀で深形の体部と外開きの高い三角高台がつく。軸はツケガケで施される。103は壺形のもので体部外面をへら削りで整形する。高台は小さな角形を呈する。

D地区出土土器(80~82・104・252) SA-1の柱穴から土師器皿(80)、山茶碗(81)が出土している。土師器皿は口縁部を2段にナデでつくるもの、山茶碗は低平な三角高台をもつもので外底面に粗いナデを施す。SA-2の柱穴から出土した山茶碗(82)は直線的な形状を示す体部からわずかに外反する口縁部をもつもので、低い角形の高台がつく。外底面に糸切痕を残す。252はD地区東部の遺物包含層から出土した弥生土器高杯の脚部で内彎して開く。中に2ヶ1組の円孔を穿ち、櫛歯状具による点刻の施文を行う。

石製品(260・261) 260はD地区SX-1から出土した石斧状の石製品で、両長側辺を擦り切っている。端部は打撃によるとみられる剥落が顕著に認められる。261はD地区東部の包含層から出土した砥石で、各長側縁を使用している。砂岩質の石材を利用している。

鉄製品(263~267) 263は刀子で基部以下を欠す。265は鉄釘で一辺4mm程度の断面方形を呈する。D地区SD-2から出土した。267はD地区SD-1から出土した鉄刀で残存長71.1cmを測る。基部の日釘孔付近に木質が遺存する。264は断面長方形の棒状のもので残存長8.6cmを測る。D地区SH-4出土の鉢(35)の体部内に落ちこんだ状態で検出されたものである。

遺物小結

森前遺跡の調査で出土した遺物について、出土状況から一括性の高いとみられるものを中心にその年代を考えおきたい。

D地区SX-1、同SH-4出土資料は弥生時代後期に位置付けられる。両者の土器群を比較すると、組成は別にして、差異は大きいものでなく、両者が近接した時期のものであることが知られる。湖北地方において当該期におけるまとまった資料が報告された遺跡には、近江町狐塚遺跡⁽⁶⁾SX-6、長浜市松塚遺跡⁽⁵⁾2区SD-1B、湖北町伊部遺跡⁽⁹⁾溝などがある。これらのうちでも、両土器群は狐塚遺跡のものよりは新しく、後期末と考えられている伊部遺跡のものよりは若干古い時代のもともみられる。SH-1～3出土土器もまた近接した時期のものと考えて大過なからう。

D地区SD-12から出土した2点の高杯は共に深い杯部をもつものである。これは弥生時代後期として挙げた各遺跡の出土品にその例をみず、国友遺跡⁽⁷⁾(1次)M3出土品に類例を認めることができる。M3は庄内式併行期と考えられており、ここでは古墳時代初頭のもともみおきたい。他にこの時代のものとしては、SD-7・8出土のもの等があげられよう。

E地区北部の溝から出土した資料は、精緻なヘラミガキを施した供献土器群としての性格を認められるものである。これらの資料は大坂府萱振遺跡⁽⁸⁾SE-03・SK-03等に類例が求められ、古墳時代前期、布留式古相に位置付けられるものとみられる。

D地区SD-1出土土器群は、須恵器類が陶色TK-23～47型⁽¹⁰⁾式に比定できる特徴をもつことから、古墳時代中期末(5世紀末)頃のもと考えられよう。

C地区SK-3出土資料については灰釉陶器が猿投窯黒笹90号窯⁽¹¹⁾式の特徴をもつ点から平安時代中期のものともみられる。

その他、良好な出土状況ではないが、A地区出土のものについては平安時代後期、B地区のSE-1出土のものについては飛鳥時代、他は平安時代後期、C地区のものについては平安時代中期～後期、D地区SA-1・2出土のものは平安時代末期、E地区南部出土のものについては古墳時代後期～平安時代にそれぞれの所属年代を求めて大過ないものと考えられる。

森前遺跡小結

今回の調査で検出されたのは、平安時代後期を中心とする時期の集落跡(A～D地区)、古墳時代の溝群(D地区)、弥生時代の居住区(D地区東部)の3時期の性格の異なる遺跡として捉えられる。このうち、D地区で検出された古墳時代の溝群については、SD-6・7・9・10を除けば、低墳丘墓の区画溝と考えられるものである。時間的には、SD-8、SD-12・13で区画されるものが古墳時代初頭、SD-2、SD-3・4、SD-1・11で区画されるものが古墳時代前期から中期にかけてのもともみられ、SK-1についてもその規模・形状から同時期の土墳墓である可能性が高いと考えられよう。ここでは、当地が古墳時代の墓域の一面を占めていたことを指摘し、その現在知られる形成と終焉がそれぞれ古墳時代初頭と中期末であることに留意しておきたい。個別の遺構としては、SD-1における供献土器等のあり方(位置・組成)に、ほぼ同時期とみられる市内越前塚遺跡⁽¹⁾1号墓の場合といくらかの共通項を見出せる点に注目し、今後の資料の増加を待ちたい。弥生時代後期の居住区としての遺跡は、D地区の北及び東南へ広がりをもつことが試掘調査の結果から予想される。注目されるのはSX-1とした上面幅3mを測る溝跡である。SX-1以西には弥生時代に属する確実な居住跡はなく、SX-1以東では4棟の堅穴住居が検出された。中でも大形の堅穴住居SH-4は、その出土遺物からSX-1とほぼ

時を同じくして廃絶したものとみられる。これらの弥生時代後期の遺構群の中には、松塚遺⁽¹¹³⁾ 2区の周溝墓と時期的に併行関係にあるものが含まれることが予想される。今後の調査の進展次第では、あるいは環濠集落とその墓域として捉えることができるかもしれない。

(2) 国友遺跡の調査

調査区と遺構

F地区 (図版二九・三八) 字六ノ町南西隅に設けた南北14m×東西10mの調査区である。耕作土下50cmの淡灰色粘質シルト層上面が遺構検出面で、標高は102.9m前後を測る。F地区では溝3・土坑等を検出した。

SD-1 調査区の北東を南東から北西に走る溝で、検出面での規模は幅1.1m、深さ10cmを測る。断面逆台形で埋土は灰色粗砂、出土遺物はない。

SD-2 調査区の北東から続く溝で調査区中程で終わる。幅0.5m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色の腐植土で出土遺物はない。

SD-3 調査区の南辺に沿うようにして検出された溝で、わずかに北へふくらみながら東から西へのびる。幅0.7m、深さ25cmを測る。断面V字形で灰色粗砂により埋没する。出土遺物はない。

その他、調査区南部には0.8×0.5m程度の不整形円形の土坑6基がある。これらはいずれも灰色の粗砂を埋土にもち、SD-1・3と同時期に埋没したものとみられる。

G地区 (図版一六・一七・三七) 小字三ノ橋北東隅から南へ45mにわたって設定した幅3mの調査区である。遺構検出面は耕作土下40～60cmの灰色砂礫層上面で、調査区北部では黄灰色粘質シルト層上面がこれにかわる。検出面の標高は北部で104.3mを測る。以下、検出された主な遺構について述べる。

SD-2 調査区北端で検出した溝で東西にのびるものである。検出面で幅2.5m以上、深さ40cmを測る。段掘りの形状を示し、下部の埋土に砂を多量に混えることから元米流水があつたものとみられる。埋土中から古式土師器(127～129)の他、灰釉陶器片が若干ではあるが出土している。

SD-1 SD-2の南で検出した溝で、東西にのび、検出区間の西端で土坑を切る。幅0.5m、深さ5cmを測る断面皿状の溝で、褐色の粗砂によって埋没する。

SK-1 調査区中部で検出した落ちこみで、南北3.2m×東西1.9m以上の方形プランを有する。深さ5cmを測り底面には調査区東壁にかかって炭化物を多量に含む深さ15cmの長円形の落ちこみがみられた。底面に直立して甕(113)が出土した他、埋土中から古式土師器(111～114)が出土している。

SK-2 SK-1の南1mで検出した1辺2.4m以上を測る方形の落ちこみで、深さ5cmを測る。落ちこみ内南部の底面で炭化物の集中をみている。遺物は埋土中から古式土師器の細片がわずかに出土した。

SK-5 調査区中央部で検出した土坑で西側は調査区外にのびる。1.2m×1.5m以上のプランを有し、灰色粘質土で埋没する。高杯(118)を検出している。

SK-9 SK-5の南方で検出した不整形円形の土坑で、長軸1.6m、短軸0.9mを測る。灰色粘質土で埋没し、埋土中に古式土師器(115～117)を含んでいた。

SK-11 SK-9の南に接して検出した径0.9mの円形の上坑である。灰色粘質土で埋没し、坑底から119～124等が一括出土している(第5図)。

SK-12 G地区で検出した遺構群中南端に位置するもので、長軸2.0m、短軸1.1mの略長円形を呈し、深さ50cmを測る。遺物の出土はない。

SB-1 SK-5、SK-9等を切りこんで検出された掘立柱建物で、南北3間(5.05m)、東西1間(1.7m)

を検出した。柱穴は径25cm程度の円形で一辺14cm程度の角柱を残すものがある。

沼沢地 G地区の南端は腐植質の堆積となる。これは深さ100cmを測るもので、同様の堆積を試掘坑4～7・9及びI地区で検出していることからかなり広範囲にわたって当地周辺が湿地帯の様相を呈していたことが知られる。沼沢地は、最下層に細砂の堆積をみた後、茶灰色・黒褐色の腐植土が堆積し、茶褐色の腐植土により埋没する。本来流水のあった河川が流れを失った後、沼沢地化していったものとみられる。遺物は、これら沼沢地内部の安定した堆積土中にはほとんど含まれず、主に沼沢地の肩にのる黒褐色腐植土層、粗砂層、暗灰色細砂層等を中心にコンテナ10箱程度の土器・木製品・石製品が出土している。

H地区 (図版一三～一五・三八・三九) 小字三七町の南部に幅3m、東西100m余りにわたって設定した調査区である。H地区の層序は上から、耕作土・床土・灰色砂礫であり、灰色砂礫上で遺構が検出されるが、地区中央部では黄灰色粘質シルト層が床上下に広がりその上面で掘立柱建物が検出された為、この部分については、上下2面にわたる調査を行っている(図版三八)。遺構検出面の高さは上層が104.9m、下層が104.7m前後である。H地区で検出された遺構には掘立柱建物2・堅穴住居4・溝1等がある。

SB-1 上層において検出した掘立柱建物で、東西3間(4.5m)、南北1間(1.6m)以上を数える。方位はN9°Eを指す。柱穴は径20cm程度の円形の掘方をもつ。柱根が遺存するものがあり、一辺12cm前後の角柱を使用していたことが知られた。

SB-2 上層において検出した掘立柱建物で、SB-1の北で一部平面的に重複する。東西2間(3.5m)のみ検出した。方位はN1°Eを指す。

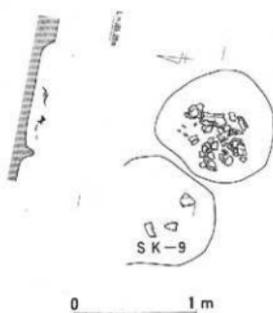
SH-1 調査区中部の下層で検出した堅穴住居で、一辺4.6m程度の隅丸方形プランを有する。北と西のコーナーを検出している。北東の壁際で二重口縁壺(130)及び拳大の礫の集積を検出している(第5図)。床面は平坦で柱穴・壁溝・竈等の所作は認められなかった。

SH-2・3 SH-1の西方で重複して検出した方形の落ち込みで、南のコーナーを検出した。それぞれ一辺2.5m以上を測る。底面に特に所作は認められないが、平面形より推して堅穴住居の可能性のあるものとする。

SH-4 SH-3の西方で検出した一辺5.3mを測る方形の堅穴住居である。北及び東のコーナーを検出して



第4図 H地区SH-1遺物出土状況



第5図 G地区SH-K-9遺物出土状況

いる。検出できた部分では、幅25cm、深き5cmの壁溝が途切れることなく巡っている。北のコーナーから1m内側で径50cm、深き35cmを測るピットを、東のコーナーから1.5m内側で径22cm、深き15cmの柱穴をそれぞれ検出している。遺物は北のピット内より壺底部(132)が正置された状態で出土している。

S D-1 上器群5のD位にあたる部分で検出された溝で、検出面で幅2.5m、深き60cmを測る。断面はV字形を呈し、西側の勾配が急である。埋土は、最下層に砂混りの灰色シルトが堆積した後、粘質土系の堆積土があり、上層は中央の凹み部分に堆積した灰黄色土である。遺物は、最下層を除く各層に多量に含まれていた(164~188)。

なお、S D-1以東では40mの範囲において、遺構の存在は認められなかった。

その他、遺構との関連で確認することができなかったが、上層検出時に多量の土器の堆積が認められた箇所がある。これらについては土器群1~5として取り上げを行った。

I・J地区 G地区の東方に東西に設定したI地区、G地区の北に設定したJ地区では明瞭な遺構の検出はなかった。I地区では、G水路から続く沼沢地状の堆積が東へ25m以上続くことが判明した。

遺物

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代初頭・同中期末~後期初めのものを中心に土器でコンテナ35箱に達した。土器以外には若干の木製品・石製品も出土している。ここでは遺構に伴って出土したものを中心に記述する。

H地区S D-1出土土器(164~188) 図示できたものの内訳は壺5・壺8・高杯5・鉢1・手焙1等である。

壺(164~168)には口頸部が、体部から屈曲して直線的に短く開くもの(164)、強く外反して短く開くもの(165)、外反して開く頸部に外開きの直線的な短い口縁部がつき、端部を上方にもち上げるもの(166)、内彎した短い直口のもの(167)などがある。いずれも淡灰茶~橙灰色系の色調を呈し、167は胎土が密で精良なものを用いるが、他は3mmまでの砂粒を含む。壺(169~176)には口縁部が「く」の字形に屈曲して外傾するもの(169~174)と受口状を呈するもの(175~176)がある。「く」の字形のものは口縁部内外面をハケメ調整したもので、端部を連続的に軽く押圧するものや、体部内面をヘラケズリする例がある。受口状のものは口縁端部を外方へ引き出し体部が大きく張るものが一般的であるが、略完形の176は口縁部のたち上りが高く、端部は内外に肥厚して丸く取めている。体部外面はタタキメを残し、内面のD位から中位をケズリ上げる。以上の壺のうち、173・175を除くものの外面には煤が付着している。高杯(181~186)は受部がせまく口縁部が大きく内彎して立ち上るもので、脚部には中位で屈曲して内彎気味に開くもの(182・185)、「ハ」の字形に開くもの(184)、裾部が水平近くまで広がる低脚のもの(186)などがある。186は内面をヘラケズリし、裾部外面に沈線9条を、端面に刺突文を羽状に配している。鉢(187)は受口状の口縁部をもつもので端部を外方へ丸く肥厚させ、外面に縄描直線文を施す。煤の付着は認められない。略完形の手焙形土器(188)は口径16.5cm、器高8.5cmの鉢形土器の口縁部の約分に蔽いを被せたもので、総高は16cmを測る。体部は最大径を中位にもち、その下位にヘラ具による刻目を施した貼付突帯を有する。蔽部は球面に近く、縁部を内外に肥厚させる。中位と鉢部口縁との接合部には突帯が施され、鉢部口縁のものにはハケ具による刻目が施される。三本の突帯の上位には寛描の斜格子文で文様帯を構成する。蔽部をはずれる体部文様帯では、斜格子文は斜線のみを簡略化されている。鉢部の口縁は頸のしっかりした受口状のもので端部をわずかに外方に引き出す。体部下位から底部にかけて外面の器表が薄く剥落しているのが目立つ。

G地区S K-9出土土器(115~117) 壺(115)はしまった頸部から内彎気味に立ち上る直口のものである。壺(116)は「く」の字形に屈曲して短く開く口縁部をもつもので、口縁部内面と体部外面にヨコ方向のハケメをと

どめる。外面に煤が付着する。高杯(117)は直線的な口縁部と、水平に近い受部からなる浅手の杯部で、内外面にヘラミガキを施す。口縁端部は面取りを施すため外傾した面をもつ。

H地区SK-11出土土器(119~124) 甕と高杯がある。甕は最大径が中位にあり、口縁部は「く」の字形に屈曲して開き外面の中段で肥厚するやや長めのものである。体部外面にタタキメ(のちハケメ)、内面にヘラケズリ、口縁部には外面にハケメあるいはナデ、内面にヨコハケメ(のちなデ)を施す(119・120)。脚台(121・122)は短く直線的に開くもので、接地部がつぶれて平坦になる傾向がある。高杯は受部のせまいもので、口縁部は受部との間に段をもってわずかに内彎気味に外方へ立ち上る。端部にクシ状具による面取りを施し水平な面をつくる。内面にヨコ方向のヘラケズリを施すもの(123)や、端部がつぶれて平坦面をなす場合(124)がある。

H地区土器群5出土土器(150~163) 図示できたものの内訳は、壺1・甕3・鉢1・高杯3・器台1等である。壺(150)は頸部が細く内彎した直口のもので、口縁部外面に細くシャープな線刻により直線文及び羽状文を施す。壺には、口縁部が「く」の字形に屈曲して開き、外面がその中段で肥厚するもの(152)と、受口状のもの(153・154)がある。受口状のものには、頸部がシャープに屈曲し立ち上りの短いもの(153)と頸部の屈曲が甘く上方への立ち上りが長いもの(154)がある。鉢(151)は口径12cmを測る半球状のもので内外面にオサエ痕を多数残す。胎土に砂粒を多く含み、焼成は甘い。高杯(155~157)には、受部がせまく浅い杯部と、杯部から直接外反して開く脚部を備えたもの(155)と碗形の口頸部をもちその内面に幅広い直線文帯をもつもの(156)がある。ともに、端部を面取るものである。155には2段3方、脚部のみの157には4方にそれぞれ円孔が施される。158は中空の小形器台の受部で、口径9.0cmを測る。わずかに内彎気味にひろく受部で端部はヨコナデにより甘い面を取る。他に手捏ねのミニチュア土器(163)が数点出土している。

H地区SH-1出土土器(130・131) 小さな平底(131)で球形の体部をもつ二重口縁で、肩部以上の外面にヘラミガキを施す。頸部は直立し、受部は屈折してとりつく。口縁部は受部からさらに屈折して上方にのび、水平近くまで外反させ端部は丸く収める。器高27cm前後に復元されよう。

G地区SH-1出土土器(111~114) 甕(111~113)と高杯裾部(114)がある。甕には口縁部が外傾し端部を内側へ丸く肥厚させるもの(111)と受口状につくり端部を外方へ肥厚させるもの(112・113)がある。111・113の外面に煤が付着する。114は屈曲して上方へ続くともみられるもので、精良な胎土を用い、外面に残るヨコヘラミガキは非常に細やかである。

G地区沼沢地出土土器(189~248) 図示できたものの内、図版三七に示した断面図の層序との関係が判明するものは次の通りである。

暗青灰色砂質土層 : 207・222・227・247

暗灰色細砂(同礫混を含む)層 : 193・212・214・223・224・225・226・229・234

黒褐色腐植土層 : 197・201・219・220

粗砂層(粗砂層直上) : 191・192・194・198・199・200・208・209・218・(221)・228・231・(232)・241・244・(247)

灰褐色腐植土砂混層 : 190・236

なお、以下の文中では暗青灰色砂質土層及び暗灰色細砂層出土土器を下層出土土器、その他各層出土のものを上層出土土器と呼ぶ。

沼沢地出土土器の図示できたものの内訳は、須恵器では杯身1・高杯及び蓋各1、土師器では壺18・甕16・鉢4・高杯15等に他にミニチュア土器、底部等がある。須恵器杯身(190)は丸味をもった底部とやや内傾して直線的にのびる立ち上り部をもち、口縁部は端部で外方に肥厚し内傾する面をもつ。底部に回転ヘラケズリを施す。

高杯蓋(189)は平坦な天井部と直に下る口縁部からなり、天井部と口縁部の境には稜が巡る。天井部のつまみは中心部が高いものである。口縁部は端部内側に段をもち、天井部に回転ヘラケズリを施す。高杯(191)は短脚1段透かしの脚部で、透しは長方形のものが3方から施される。土師器壺(192~210)には二重口縁をもつもの(192)、広口壺(193)などの口径20cm弱の大形品の他に、中・小形の真口のもの多数ある。下層出土の207が平底で中央が少しく他は、丸底あるいは丸底がつぶれた平底を呈する。粗砂層出土の208は口径8.3cm、器高11.8cmを測る完形品で、外面に赤彩痕をとどめる。体部上位の対向する位置に動物を表すかとみられる意匠が陰刻で描かれている(図版二九)。199・228及び管玉(262)等を近辺に伴って出土したものである(図版一八)。壺には213を典型とする口縁部が内彎する傾向のあるもの(211~216)、「く」の字形に外反するもの(217~221)、受口状を呈するもの(222~226)がある。略完形の225は完全に丸底化した受口状口縁壺であり、体部の側面観は正円に近い。層序との関係では、「く」の字形に外反するものは上層から、内彎及び受口状のものは下層から出土する傾向が認められ、図示できた燧燭層序の明らかな資料中ではこれを外れるものはない。高杯(229~243)は、杯部でみれば、水平に近い受部をもち口縁部が外面に小さな段をもって立ち上る傾向のあるものと、受部が中心に向って下るため口径に比して深い形態をとるものとに大別される。前者は上層出土のものに多く、後者は下層出土のものの特徴といえる。脚部では、上層出土例が裾部と筒状部の境が内面で明瞭な稜をもつものに対し、下層出土のものは外反して広がり、裾部に円孔をもつもの(229)もみられる。鉢(245~248)には平底のもの(246)と丸底の椀状のものがある。後者には口縁部が単純におおむねの(245)と短い外開きの口縁部を付加するものがある。いずれも内面をミガキあるいははいねいなナデによって平滑に仕上げるのに対し、外面はケズリあるいは粗いナデによる簡略な調整を施すにとどまる。244は体部のよく張った器形になるとみられ、頸部は広く、屈曲して短く開く口縁部が付く。体部外面にタテハケメ、内面にナデ、口縁部にヨコナデを施す。頸部外面にオサエ痕を多数残す。

包含層出土土器 G地区で出土した須恵器壺(250)は残高6.8cmを測る小形のもので頸部に2条の鋭い突線がめぐる。体部下半に静止ヘラケズリを施す。器面は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

木製品(257~259) 257は両端を柄状に削り出した円棒状のもので残存長34.4cmを測る。258は一辺2cm前後の角材で残存部中程に突起をつくる。柄として機能したものであろうか。259は直径16.5cm前後・厚さ0.8cm内外の円盤を半裁したもので、直線をなす割縁に大小2カ所の抉りをいれている。疋目板を使用する。

石製品 262は長さ3.0cm、直径0.4cmを測る管玉である。淡緑灰色を呈するやや軟質の石材を使用する。

遺物小結

国友遺跡の今回の調査で出土した遺物について、出土状況から一括性の高いとみられるものを中心にその年代等に関して考えておきたい。

G地区SK-9・11、H地区SD-1・土器群5出土土器は、口縁部が内面に稜をもって「く」の字形に屈曲して開く壺の盛行を特徴とするもので、各資料群間の共通性は各器形の類似のみならず、高杯及び脚部の平坦な接地面、高杯口縁部の面取ったシャープな仕上げなどといった土器製作上の細部に至るまで認めることができる。やや一括性に問題をもつもののH地区土器群1~4出土資料も全体の傾向は上記の資料に一致する。これらの資料のうち土器群5出土の小型器台(158)は畿内地方土器編⁽¹⁴⁾年の庄内式に特徴的なものであり、土器群4出土の壺(146)の口縁部の形状も庄内形染の影響を受けたものと理解される。従ってこれらの資料は庄内式併行期のものとみることが出来る。さらに、SD-1と土器群5がH地区内の同位質で上下関係にあり、「く」の字形の壺の口縁部の形状に両者の間で若干の変化がある点を考慮するなら、これらの相似通った資料について、

H地区SD-1・G地区SK-9が示す古相とH地区土器群5及びG地区SK-11出土資料が示す新相に分けて考えることができるかもしれない。

これに続く時期の資料としては、G地区SK-1及び沼沢地下層のものがあげられよう。これは口縁端部が内側に肥厚する布留形甕を含むもので、古墳時代前期に位置付けられる。この時期の資料は図化できたものでは甕が豊富である。当地における該期の器種構成の一端を窺い知ることができるばかりでなく、湖北地方における受口状口縁甕と布留形甕の共存関係を知る資料となろう。

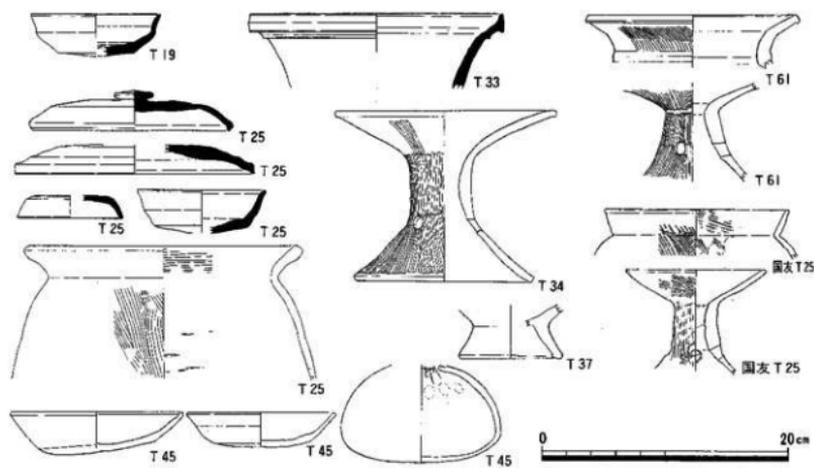
G地区沼沢地上層出土土器は須恵器が陶器⁽¹⁸⁾ 窯 1期末に位置付けられることから6世紀初頭にその年代の一端を求めることができる。ただし、須恵器は量的にみて土師器の1/10にはるかに満たない程度しか出土しておらず、沼沢地上層出土資料全体の年代幅については今後の検討課題である。

国友遺跡小結

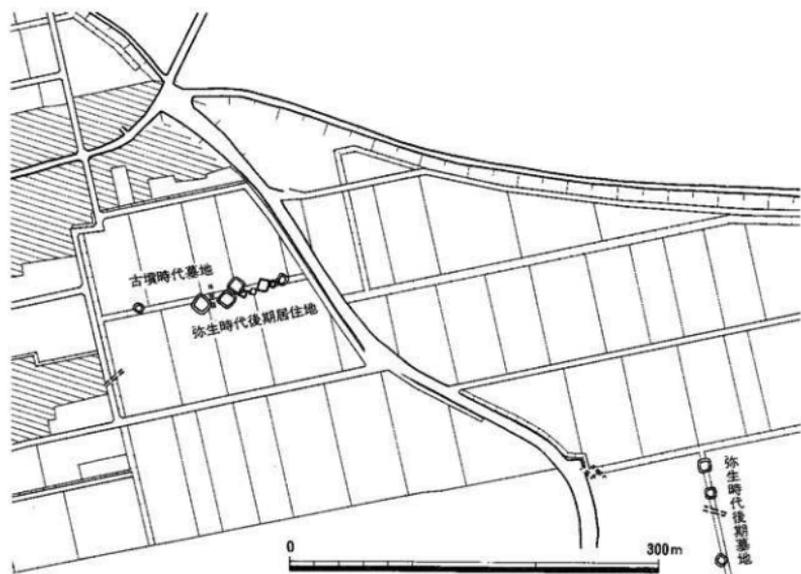
今回の調査で検出されたのは、古墳時代初頭～前期にかけての当地での居住を示す数々の遺構群、及びその上層で検出された掘立柱建物、そして遺物では沼沢地から検出された多量の古墳時代中期の土器がこれに加わる。掘立柱建物については時期を決定できる資料を得ることができなかったが、柱穴の大きさやG地区SD-2から微量ながら出土している灰釉陶器から平安時代後期～末頃に大まかな時期を求めておきたい。その他の遺構は古墳時代初頭から前期のものともみられ、今回の調査地（G・H地区）が当時の居住地の一角にあたることが判明した。また、沼沢地から出土した多量の古墳時代中期の土器は、当地近辺に該期の居住地があったことを窺わせる



第6図 国友遺跡 古墳時代遺構分布概略図



第7圖 試掘坑出土遺物



第8圖 森前遺跡弥生-古墳時代遺構分布概略圖

ものといえる。

これら今回の国友遺跡の調査で判明した古墳時代の遺跡の内容は、北陸自動車道の建設に先立って行われた発掘調査での流路M1出土土器群⁽¹⁹⁾の示す年代幅及び組成に酷似するものであり、国友遺跡の実態を明らかにする上で、貴重な資料を追加したといえるものである。

4. ま と め

森前・国友の両遺跡の調査成果をまとめるにあたって、特に多量の資料が得られた弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器の編年案を呈示しておきたい⁽²⁷⁾（第9図）。案の作成にあたっては、一括性の高いとみられる土器群を主対象に同時性を考え、組列の構成に耐える形式が少ないなかで比較的安定した資料のある高杯の変化を基準に時間の推移をとらえようとしている。この編年案が大過ないものと認められるならば、これら各期の資料を出土する遺構の位置・性格についてふり返ってみると、第1期の資料がD地区東部の居住地区から、第4期の資料がG・H地区の居住地及びD地区の墓域から出土していることなどがわかる。また、古墳時代中期の墓であるD地区SD-1は出土した須恵器によって、G地区沼沢地上層出土土器群とある一時期を共有するものと考えられる。以上の点から森前・国友の両遺跡は、互いに密接な関係をもちながら展開していったものとみることができよう。ここでは、現在までの調査結果を基に、松塚遺跡1・2区までを含めて当地域における遺跡の移り変りを叙述してまとめにかえたい。

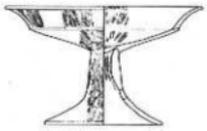
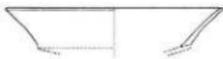
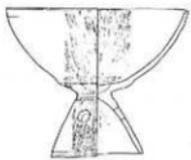
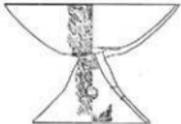
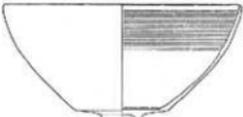
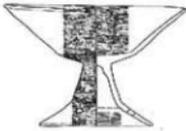
- I期以前 弥生時代後期以前の段階。A地区などで弥生時代前期～中期の遺物の出土がみられたが、詳細については不明。
- I期 弥生時代後期中頃～後半。小字杉ノ木東部に堅穴住居が作られ人々が居住する。榎木Ⅲ小字下日ウラに方形周溝墓が作られ死者が葬られる。
- II期 弥生時代後期末頃。このころ、集落は移動する。この時期に埋没したとみられる遺構には、洪水の影響を受けたとみられるものもある。
- III期 古墳時代初頭。小字三橋・三七町村付近に人々が居住する。I期に人々が居住していた小字杉ノ木付近には小さな盛土をもった墓がつくられる。
- IV期 古墳時代前期。この頃の明瞭な遺構は少ないが、G地区沼沢地下層とE地区北部溝にまとまった土器がある。G地区のものが日常的な様相を示すのに対し、E地区のものが一括供献的な内容をもつことから、やはり現集落の北西に居住地があり、東南は墳墓を含めた祭祀地区となっていたものとみられる。
- V期 古墳時代中期。集落と墓地はほぼ前代から引き続いて行われる。墓には鉄刀や、新しいやきものである須恵器を供献するものがあるが、居住地における須恵器はまだ普及率が低い。
- VI期 6世紀後半以降。現集落の北西部や東部では遺物はみられなくなる。この時期以降の遺構・遺物は旧カジャ街道以南を主にみられるようになり、奈良時代の集落が現集落南方に成立する。平容時代後期に至っては今回の各調査区における柱穴列の検出にみるように、散村的な景観を一時的に呈することがあったものと考えられる。

もとより、極めて限られた調査区内から得られた知見に基づいたものであるが、当地周辺が一連の遺跡群としてとらえられるべきことが理解されよう。今後の調査の進展によって、当地域の弥生時代～古墳時代の集落の動

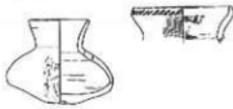
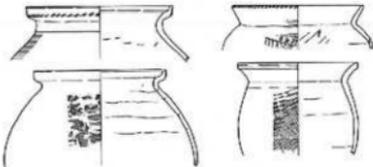
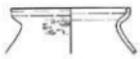
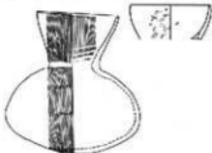
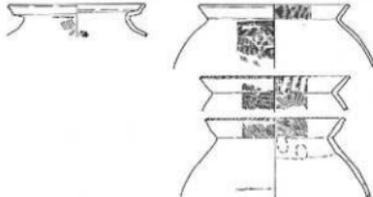
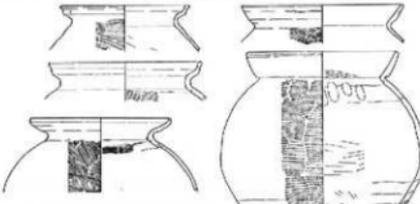
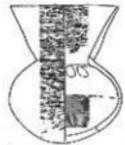
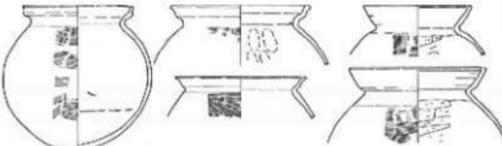
態が本格的に解明されるならば、今回の調査はその端初となるものとなろう。

註

- (1) 「かすみ堤」とは、鯉川の増水時に堤防からあふれた濁流の集落への直撃をそらさべく集落の外部に築かれた第2・第3の堤防というべきもので、今町では集落の南北に遺存し道・畑地として利用されていた。
- (2) 沢崎哲司「長浜市松塚遺跡」(滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」XV—1 1987年)
- (3) 田中勝弘「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書—Ⅰ—」滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協会 1988年。
- (4) 吉田秀則「一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協会 1987年
- (5) (2)に同じ。
- (6) 田中勝弘「湖北町伊部遺跡」(滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」VI—3 1980年)
- (7) (3)に同じ。
- (8) 大野薫「壹飯遺跡発掘調査概要」I 大阪府教育委員会 1983年。
- (9) 田辺昭三「陶器古窯址群」I 平安学考古学クラブ 1966年。
- (10) 櫻崎彰一「猿投窯の編年について」(愛知県教育委員会「愛知県古窯跡分布調査報告」(Ⅲ) 1983年)
- (11) 宮成良佐・佐野誠一「長浜市越前塚遺跡略報」(『滋賀文化財だより』80 1983年)
- (12) 田中勝弘「後期古墳における副葬土師器の変化」(『滋賀考古学論叢』4 1988年)
- (13) (2)に同じ。
- (14) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』1986年所収)などを参照した。
- (15) (9)に同じ。
- (16) (3)に同じ。
- (17) 第9図にあげた他遺跡についての文献は以下の通り。
松塚遺跡：(2)に同じ。
伊部遺跡：(6)に同じ。
金剛寺遺跡：稻垣正宏「長浜市金剛寺遺跡」(滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」XV—3 1987年)
西火打遺跡：(4)に同じ。

	高 杯	器 台
1		
2	 	
3	 	
4	 	
5	 	

第9圖 森前・国友遺跡

壺	甕	
		森前・D・SX-1 森前・D・SH-4 松塚2区SD-1B SD- ³ / ₄
		松塚1区SD-2 松塚2区SD-5 伊都トレンチ溝
		松塚2区SD-1A 國次・G・SK-9 金剛寺SD-002 國次・H・SD-1 金剛寺SD-001
		國次・H・土器群 國次・G・SK-11 森前・D・SD- ¹² / ₁₃ 金剛寺SE-001 西火打SK.1
		森前・E・溝 國次・G・沼下層

出土土器編年試案(弥生時代後期-古墳時代前期)

第II章 長浜市こさわ小沢城跡

1. はじめに

小沢城跡は、長浜市小沢町集落の北方約100mに所在し、従来城跡として周知されてきたところである。昭和62年度の県営ほ場整備事業はこの遺跡にかかるため、工事に先立つ発掘調査が行われることとなった。当報告はその調査成果をまとめたものである。

現地は、姉川左岸の標高92m前後の水田中に、1m余りの比高差をもった畑地として利用されており、地元の人々はこの畑地を「シロバタケ」と呼んでいた。畑地は、坂田郡の条里復元案による2条6里16坪の北辺中央に位置し、大略半町四方の土壇を成していた。地元には、当地がその昔「オオスミ」なる一族の居館であったとの伝えも残されていた。その周囲の水田は別名「マタ田」と呼ばれる泥田で、地盤の改良が望まれていた。

当地の南方400mには、福永商家かと考えられる新庄馬場遺跡、南東500mには宇多天皇創建の伝えのある神照寺があり、この地域が中世において福永庄の要地を占めていたことが知られる。

なお、現地の調査にあたっては、地元小沢町の方々をはじめ関係各方面から多大なる協力を得ることができた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

2. 調査の方法と経過

まず、遺跡の範囲とその地下深度について知る資料を得る目的で、工事による切土及び排水路計画箇所_に2×3mを基本とする試掘坑を設定した。その結果「シロバタケ」において、石列・集石等の遺構を検出したことから、当初予想されていたように中世の居館跡が存在する可能性が強まった。関係部局との協議により、さらに居館跡の遺存状況を把握する必要があると判断されたため、石列の検出地点を中心に南北20m×東西30mの調査区を設けて試掘調査を行った。その結果、土塁・建物跡などが検出され、当地が室町時代後半の有力者の居館であることが判明するとともに、その遺存状況が良好であることが知られた。県教委では、畑地全面の現状保存の方向で関係部局と協議を重ね、最終的には南辺土塁について発掘調査を行い記録の収集と保存を、館内部全域を含む南辺土塁以北については、遺構面+50cmでの整地により遺構の現状での保存をはかることとなった。

なお現地調査は、試掘調査を昭和62年5月と8～9月に、南辺土塁の発掘調査を同年11～12月に行った。

3. 調査の結果

調査の結果、土塁・堀及びその内部で建物跡・溝等が検出され、当地が室町時代後半の有力者の居館跡であることが判明した。堀は畑地外の水田部ではなく、畑地自体の縁辺部をめぐるため、その内側に築かれた土塁をもさし引いた残りの館内部は、旧状の畑地部分より二回りほど小さく一辺30m内外になるものとみられる。以下、検出された遺構と遺物について述べる。

(1) 遺構

A. 堀と土塁

堀 調査区南部において検出された幅2.5～5m以上の素掘溝で「シロバタケ」の縁辺をとりまくようにのびる。施工計画田面高との関係で平面検出のみ行った。堀底まで完掘した館跡東辺の南北溝の断面調査の結果によれば、

堀は断面V字形に近く、検出面からの深さは1.4m、土塁検出上面と堀底の比高差は2.4mを測る。堀は基本的には黒褐色の腐植土によって埋没するが、南辺の東西溝は埋土に青灰色に還元された粘上ブロックを多く含んでいた。東西溝は長さ30m以上を検出した。西側は幅が広く西辺の南北溝に続くが、そのコーナーで地山の灰色粗砂が一部帯状に露呈した。東西溝の東側は、東辺の南北溝には続かず、検出面で幅1.2mの灰色粗砂の掘り残しをみる。東端は、東辺の南北溝の東側の延長線より約3m東へのびた地点まで掘削が行われている。東西溝は、その検出区間の中程で南に張り出す。これは土塁の出入口部の張り出しに対応するものとみられる。

柵状遺構 東西溝の検出区間の中央よりやや東側で、柵状遺構を検出している(図版一〇・第4図)。施工田面高との関係から堀を完掘していないため下部の構造は明らかでないが、検出状況から判断して、堀に直交する二つの杭列の間に樹枝・樹皮・草木束等をはさみこんだものとみえる。杭は直径8cm前後の丸太杭を用い、検出時に折れて抜けてしまったものは長さ2m弱を測るため、本来の長さはより長く、堀底に打ちこまれたものと判断される。二つの杭列間は検出面で30cm前後の距離を測る。なお、杭の間には部分的にはあるが、厚さ1.5cm程度の木板があり、樹枝等の詰め物の押さえを果たしている様子がうかがえた。

土塁 調査前の旧状からは土塁の位置を推定することはできなかったが、調査の結果、調査前(図版一)に杉が植えられていた箇所土塁がめぐることが判明した。今回の調査地は館跡の南西部と南辺にあたるため、平面L字形に検出したことになる。幅は南辺で7.5m、南辺出入口部で13mを測る。遺存は西辺で高さ25~35cm、南辺は東部ほど高くなり、良好な状況を示す。土塁は検出区間のうち、西辺・南辺でそれぞれ一カ所ずつ途切れ、出入口となる。土塁はすべてよくしまった盛土で形成されており、盛土は粗砂混りの土を主とした層と黄白色粘土を主とした土層との2層に大別され、基本的に後者が前者の上を覆っている状況が看取された。盛土の下層に含まれる粗砂は当地周辺の床七下にもみられる灰色粗砂とみられ、より直接的には堀を掘削した際の上げ土を内側に積み上げたものと理解される。また、それを覆う層に顕著に含まれる粘土は灰色粗砂の下位に堆積する青灰色粘土に由来するものとみられる。粘土は、浸食されやすい粗砂混り土に対する化粧土の役割をになったものと考えられる。土塁外縁は南辺中央やや西寄りの出入口部で、堀と同様、南へ張り出す。また、内側の南西コーナーには石列により3×3m程度の平地地をもつ。なお、土塁上には掘り込み等の所作を認めることはできなかった。

出入口部 西辺土塁の検出区間中央と、南辺土塁の中央やや西寄りで土塁の途切れを認めている。これは出入口部と考えられる。西辺のものは未完開であるが検出幅2.5mを測り、その北基底に向かって館跡内部から溝1が流れることから、排水用の側溝を伴うものとみることができる。南辺のものは上面幅4mを測るもので、堀への落ち際に径5cmの丸材を横にわたして作られた階段状の施設と集石を伴う(図版九・第3図)。階段状施設は出入口部の向かって右側のみ遺存し、三段分が検出された。それぞれ横木が径3cm程度の材によって止められている。集石は出入口部の左右で認められた。左方のものはやや疎で土塁から離れた状態で検出されたのに対し、右側で検出されたものは密であり、特に階段状施設のすぐ左(から下にかけて)で検出された部分は土塁に貼りついて出土している。これらの施設は本来一体となって橋板状の構造物を受ける基礎となっていたものかと考えられるが、上部構造を示すものの検出はない。

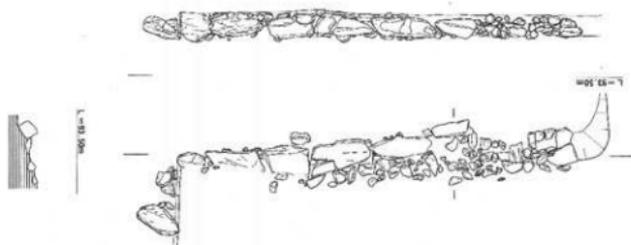
B. 館跡内部(第1図)

土塁に囲まれた内側では建物跡・溝・石列・石溜り等を検出している。

石列 西辺七畝内側の基底部で石列を2カ所検出している。南側のものを石列(1)、北側のものを石列2と呼ぶ。石列1は西辺土塁の内側南端の基底を整えるもので長さ3.1mにわたって検出された(第2図)。基底に掌大の割石をひいた後、人頭大の河原石を積んで形成されている。積石はすべて館内に向かって面をそろえて置かれ



第 1 図 竈跡内部遺構平面図



第 2 図 石列 1 断面図

ている。6個の積石が位置を保って検出されたが、基底にひかれた割石の状況から南側にあと2個程度の積石があったものとみられる。また、石列前面の検出状況(図版三)より推して、元来もう1~2段程度の積石が行われていたものと考えることができる。なお、南側基底の割石面には火を受けた痕跡がある。石列1の前面直下からは石製品(23)が上方からの転落を思わせる状況で出土している。

石列2は西辺土塁の内側基底を整えるもので、土塁下を走る溝1の側壁を兼ねる。人頭大の河原石数個が遺存するのみであったが、溝内への石の転落状況から、本来さらに長い石列が施されていたものとみられる。

石溜り 館跡内部の調査区北西部、土塁と溝3にはさまれた範囲で拳大~人頭大の石が集中して検出された。これは遺構面上を数百のつぶてが覆ったもので、特に敷きならした様子はない。石は溝1・3を覆ってひろがり、南限はほぼ溝4の西延長上にある。検出時に北部を中心に石の上下で焼土・炭化物を多量にみている。

建物跡 館跡内部の調査区東部で検出している。南北5間(9.0m)×東西4間(7.65m)を数える。柱跡は拳大の河原石が径60~100cmの範囲に集積したものと検出された。集石内に柱根跡として認められる箇所はなく、これらの集石があるいは根石的な機能を果たしていた可能性がある。建物跡の中心にあたる南北2.3m×東西4.0mの範囲で館外部と同様の灰色粗砂の堆積を認めている。建物跡は南端の東西柱列の西から2つめの位置及び中央の灰色粗砂と重なる位置で3カ所、それぞれ集石を欠いている。前者は出入口口中軸線の延長上にあたる箇所である。

また、調査区東方あるいは北方へのびるとみられる掘立柱穴(径25cm)を調査区北東隅で4ヶ所検出している。

溝 8条程度を検出している。いずれも直線的に走るものである。ここでは主なものに限って述べる。

溝1は西辺土塁北部の直下を南北に走るもので幅30~40cm、深さ20cmを測り、南部で溝2と合流して西に折れる。館内部の排水溝的な役割を果たしていたものとみられる。埋土に多量の焼土を含む。

溝2は建物西辺を平行して走る溝で、溝1と合流して外に出る。幅30cm、深さ15cmを測る。溝内の上・中位はほとんど焼土・炭で埋没したような状況を示す。

溝5は調査区東部で検出されたもので、南北方向の溝がL字形に屈折して東方へのびる。南北溝部分は溝4との接続部以北が幅広で80cmを測る。他は東西溝も含め幅30~40cmを測る。深さは35cmを測り、今回の調査で検出された溝のうち最も大きい溝である。最下層に細砂が堆積する。東西溝部分の埋土上位から天日碗(10)が出土している。

その他 館跡内部の出入口部右手には、厚さ5cm程度の黄白色粘土の堆積があり、その直上を多量の焼土・炭化物が覆っていた。この焼土層は土塁にも一部かかっていた。焼土層中からは鉄釘・土師器皿(1)等が検出されている。

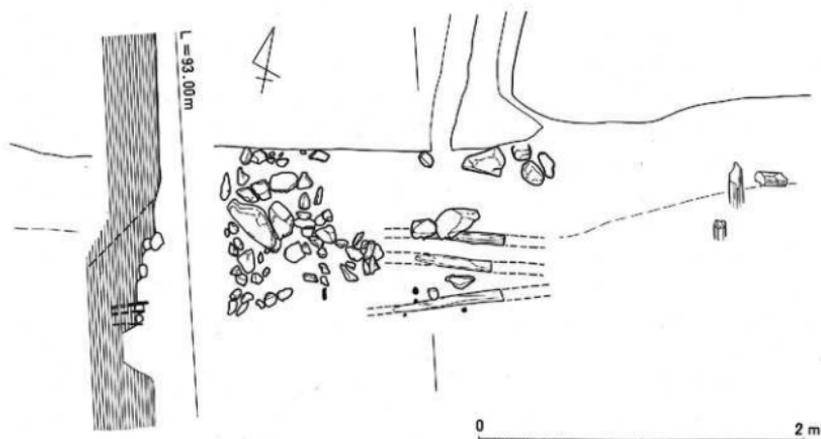
また、建物跡北方から石溜り北部にかけても多量の焼土の堆積が認められた。遺構面上の焼土には、スサ入りで堅く焼け締まったものもあり、館内の建物が焼け落ちた可能性を強く示していた。

(2) 遺物

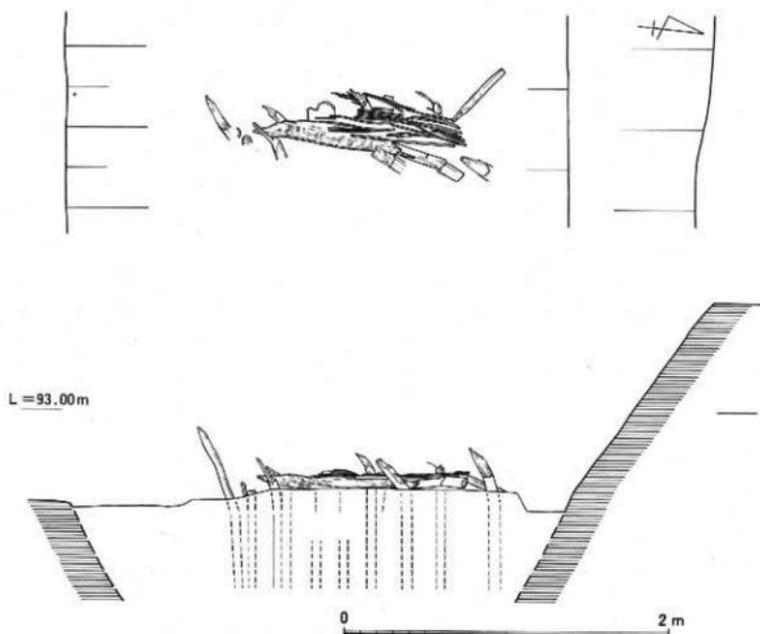
今回の調査で出土した遺物はほとんどが館跡内部からの出土で、量的には土器類で収納用コンテナ5箱程度あり、他に少量の鉄製品・石製品がある。ここでは図化できたものを中心に記述する。

土器類 出土した土器には、土師器皿(1~6)、陶磁器(7~22)などがあり、量的には土師器皿が多く、全体の3/5以上を占める。

土師器皿には口径8~10cmに復原される小形品(1~4)と口径13cm前後になる大形品(5・6)がある。小形品の1は館内部の入口右手の焼土層出土で口径8.0cm、器高1.6cmを測る。底部から屈曲して開く口縁部は端部



第3図 南辺出入口部検出状況図



第4図 堀内構状遺構検出状況図

を外反させる。口縁部に煤が付着する。胎土精良で淡灰茶色を呈する。2～4は口径9～10cm、器高2cm前後に復原されるもので、館内の遺構検出面で発見されたものである。底部から屈曲してのびる直線的な口縁部をもち、端部内面にわずかに段をつくる。2・4の端部には煤が付着する。胎土精良で乳白色～淡灰茶色を呈する。大形品の5・6は直線的にのびる口縁部で、口径13cm前後、器高2cm強に復原される。5は館内北西部の石溜り中から、6は建物跡の西の遺構検出面でそれぞれ検出された。

陶磁器には青磁類(14～18)と围産陶器がある。7は須恵質で、外全面と内面の縁部に暗赤茶色の釉を施す。8は口径13.3cmを測る碗の口縁部で、残存部全面に黄灰色の釉が認められる。胎土精良で灰白色を呈する。9は口径16cm程度の碗形品の口縁部で8より器壁が厚い。内外面とも残存部下位までに淡緑灰色の釉を施す。10は溝5の埋土に含まれていた天目碗で、内湾気味に開く体部から口縁部が上方に立ち上り、端部をわずかに外反させ丸く収める。口径12.5cmを測り、内全面と外面の腰部までに濃黄緑色の釉が施される。11は天日碗の底部で、高台径4.5cmを測る。外面をロクロズリし断面角形の高台をつくる。12は須恵質の壺の口頸部で外面に降灰をみる。胎土に黒色粒を多く含む暗青灰色を呈す。13は八の字状に開く須恵質の脚台部で、裾を短く外に折り曲げる。外面の残存部上位に段をもつ。釉は黒褐色を呈し外面に厚く施す。19・20は壺の口頸部である。19は明橙灰色を呈し硬質。胎土に砂粒が目立つ。口縁部は断面N字状をなす。20は口縁部外面に幅広い緋帯をもつものである。須恵質で外面に降灰が認められる。21・22は擂鉢である。21は淡橙灰色を呈し硬質。口縁部内面に一条の沈線が走り、すり目は10条。石列2の上位より出土した。22は須恵質で口縁端を面取る。すり目は10条。青磁類には碗皿形品の他に香炉とみられる破片もある。14～16は碗あるいは皿の口縁部で端部を外反させ丸く収めている。胎土は淡灰色、釉は淡青緑色を呈する。17は口径13.3cmを測る碗で、腰に丸味をもち口縁部は丸く収める。外面の口縁下に連続する弧線を刻み、その谷の部分から縦に線刻を施すが乱れもみられる。胎土は密で灰黒色を呈し、釉は淡緑灰色を呈する。18は香炉とみられる。屈曲部外面の体部側に脚の剝落痕がある。体部には白釉が施されるが意匠は不明。施釉は内底面と剝落部を除く外全面に認められる。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は明青灰色を呈する。青磁類では他に、外面に雷文帯をもつ破片の出土もみている(図版一)。

鉄製品 24は出入口部の館跡内部寄りで検出されたもので幅1.6cm・厚さ0.6cmの鉄材の端を曲げて鉤形に加工したものである。25は形状から楔とみられ、長さ5.7cm・幅1.7cm・厚さ0.6cmを測る。27～29は釘である。断面形は一辺0.5～0.8cmの方形を呈する。

遺物の年代 今回出土した土師器皿は、平安京における横山洋三氏の編年のB₃タイプに相当するものが主体を占めるといえる。これは16世紀前半の主体型式である。また、陶磁器類では青磁碗(17)が亀井明徳氏の示す蓮弁文碗B-2類に、壺(20)が赤羽一郎氏の示す常滑窯V期前半の資料に、それぞれ一致する特徴をもつものといえる。以上の点から今回出土した遺物は、15世紀後半～16世紀前半の年代幅に収まると考えられる。

4. おわりに

今回の調査では、湖北地方における平地の居館の一端を初めてうかがい知ることができた。室町時代後半期に当地方は幾多の戦乱の舞台となったことから、当遺跡についてもその歴史の流れに位置付けることが必要である。事実、今回の調査結果は当居館の焼亡を強く示唆するものである。また、今回の調査では居館跡の遺存が予想以上に良好であることから、多くの関係者の理解と協力の下、遺跡の大半が破壊を免れることとなった。このことは破壊を前提とした発掘調査が日常化していく中で、特筆に値する成果であったといえよう。

第三章 近江町正恩寺遺跡

第1節 はじめに

本報告は、県営ほ場整備事業坂田郡天の川西部南地区にともなう昭和62年度の発掘調査の成果を取ったものである。

今回のほ場整備事業では、排水路部分の一部が遺跡内を通るため事前に発掘調査を実施することとした。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課調査三依技師稲垣正宏を担当者として、昭和62年12月4日から昭和63年1月22日まで現地調査をおこない、ひきつづき昭和63年3月31日まで整理調査を実施した。

第2節 位置と環境

正恩寺遺跡は、坂田郡近江町^{ウバ}飯に所在する。遺跡は、天の川により形成された沖積平野上に立地する。

天の川は湖国屈指の高峰である豊仙山の北麓に溢瀾を見る。北へ向って溪谷を流れ下り山東町柏原付近で開析平野に出て、西へ向きをかえ、山塊の縁辺を廻り込むようにして琵琶湖へ向う。山東町長岡において、伊吹山の扇状地を流下してきた弥高川を併呑し、米原町醒井で丹生川と合流し、沖積平野へ出るが、天野川の沖積平野はあまり発達していないので、すぐに琵琶湖に注ぎ込んでしまう。

正恩寺遺跡の現状は水田である。現況の条里は、坂田郡条里の15条⁽¹⁾にあたる。第2図を見ると現らかなように、正恩寺、地藏堂遺跡の北隣の田地までは、一町方角の条里遺構が残っているが、地藏堂、正恩寺の遺跡範囲内では坪並に傾きが見られ、さらに南では条里遺構は消滅し、自然堤防の跡とみられる塚状の高まりなどが見られる。

正恩寺、普明庵、地藏堂の二遺跡は飯庵⁽²⁾寺遺跡群とされ、山田寺式の単弁八葉蓮花文軒丸瓦が採集されていることから、白鳳寺院の存在が想定される。また灰釉陶器、山茶碗も大量に採集されることから、寺院跡群の下界を平安時代後期以降することができると見られる。

第3節 調査

(1) 発掘調査

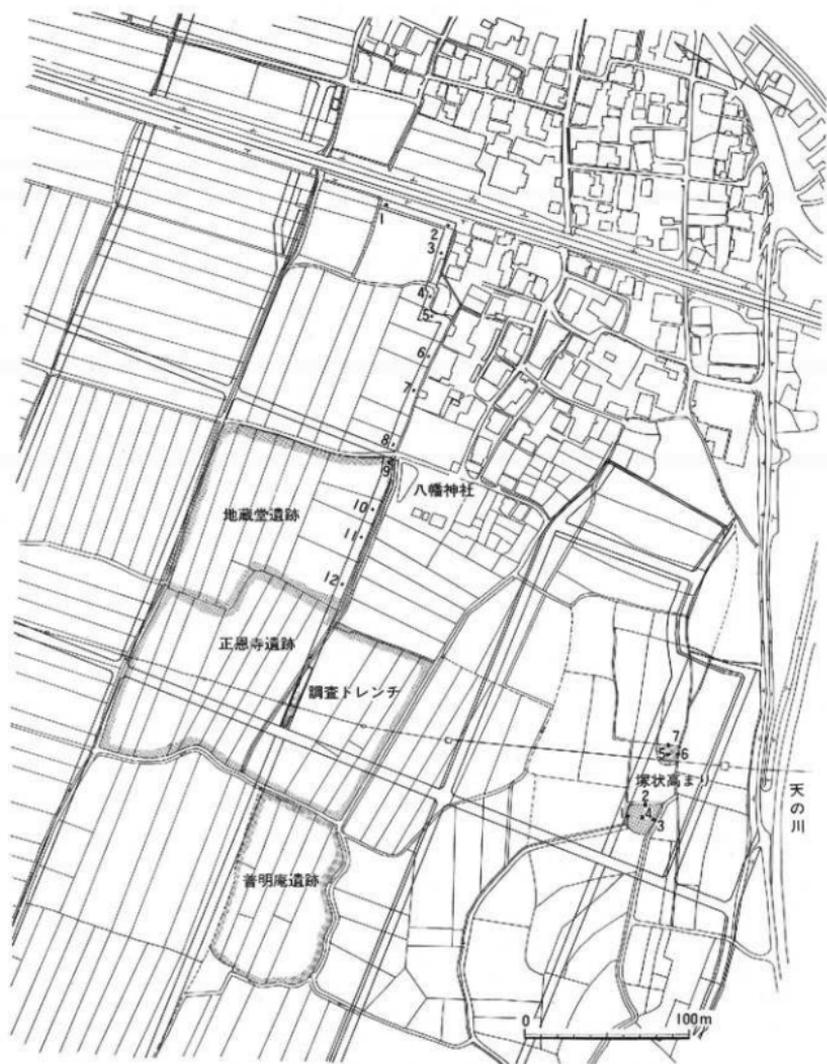
本調査は試掘調査により遺構が確認された部分約200㎡について行った。調査トレンチは正恩寺遺跡の中央部にあたり、幅2.2m～3.2m、長さ約84mの細長い形状である。

上層については、トレンチの南壁と東壁の土層図とS P 001、S P 004、S P 005の断割断面土層を観察し記録した。それによると、現地表面はトレンチ東端では、標高90.05m (T.P)を測り、西端では90.00mでほぼ平坦である。遺構面の標高は東端では88.60mで西端では88.54mとやはりほぼ平坦である。

遺構の埋土では、南壁土層に現れたS P 002の埋土とS P 001の埋土の状況がよく似ている。同じことは、やはり南壁土層に現れたS P 003とS P 004についても言える。

遺構については、農耕時のウネ跡、水路跡 (R P 001)、ピット (S P 001～005) があげられる。

S P 001は一辺が90cmの隅丸方形、S P 002は一辺が100cmの隅丸方形、S P 003は一辺が90cmの隅丸方形、S P 005は一辺が80cmの隅丸方形であるが、S P 004は長軸が110cm短軸が70cmの不正な楕円形を呈する。



第1図 遺跡位置図

本調査区出土遺物は、S P004から軒平瓦の破片が出土している。色調は灰褐色、焼成はあまく、磨耗著しく調整は判然としない(図版11-4)。また遺構面直上からは、丸瓦(ほぼ完形、図版12-33)の出土が見られる。色調は表面青灰色、内面褐色で、焼成は堅緻、内面に布目がそのまま残り、外面は縦方向にナアられている。

以上が、本調査区の発掘成果である。調査区が狭少であるため遺跡の性格等をつかみ得るだけの成果はあがらなかったが、遺構、遺物についてまとめておきたい。

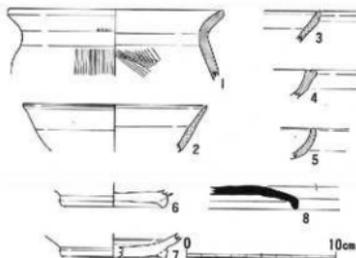
S P001とS P002は、埋土の状況が似ているから、同一の建物を構成するピットであろう。S P003とS P004についても同様のことが言える。しかし、これら4つが同一の建物のピットであるかについては、断定はしにくく、また離れて存在するS P005の成格についても現時点では不明である。

遺物については、瓦2点の出土しか見ていないが、7世紀後半から8世紀前半⁽⁹⁾の瓦であることから、このピット群が白鳳寺院跡とされる飯焼寺遺跡群の建物の一面を構成していたことはまちがいないと思われる。

(2) 試掘調査

試掘調査については、昭和63年度には場整備工事を行う地区において、特に影響のうける排水跡部分に計19カ所の試掘トレンチを設け遺物及び遺構の有無を調査した。その結果、排水路部分のトレンチ9では、地表下45cm(標高88.96m; T P)において、一辺60cmの隅丸方形のピットを検出した。トレンチ10では、地表下50cm(88.84m)において、不定形の土壌を検出した。土壌からは、瓦、須恵器、土師器などの出土が見られる。トレンチ11においては、地表下38cm(88.88m)において、直径25cmの円形のピット2カ所を検出した。トレンチ12においては、地表下60cmにおいて、直径25cmの円形のピット1カ所が検出された。

出土遺物が見られるのは、トレンチ10の土壌のみである。第2図-1(以下2-1と略)は土師器の壺である。焼成は良好であるが、胎土は砂粒を多く含み不良である。2-2は土師質の杯である。胎土は精良である。須恵器杯の焼成不良品の可能性がある。2-3、2-4は、土師器甕の口縁である。胎土は精良である。2-5は土師器甕である。胎土は精良である。2-1~4の色調はうすい茶色図四一五はにぶい橙色である。



第2図 出土遺物

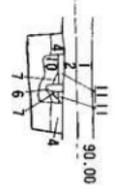
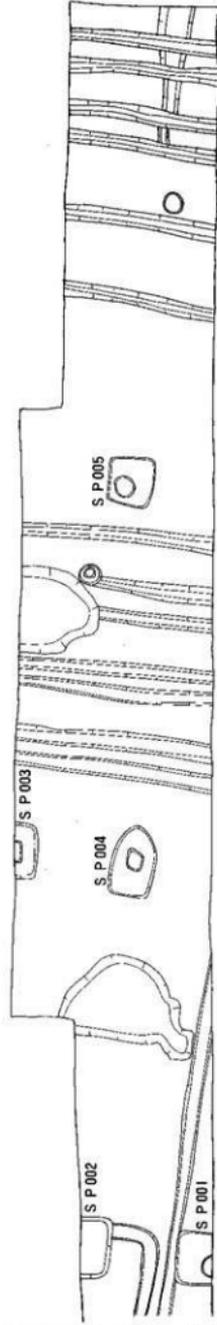
トレンチ10土壌からは瓦の出土も見られる図版9-7(以下版9-7と略)は凸面に斜格子の叩きめを残す平

瓦である。版9-9は凸面に縄目、凹面の布目を消去する平瓦である。版11-30は凸面は叩きしめの跡を残さず、凹面は布目をそのまま残す平瓦である。版12-36は、凸面は縦方向のヘラナデで凹面は布目を残す丸瓦である。

遺物の年代については、瓦はいずれも7世紀後半代から8世紀前半代⁽⁹⁾のものと推定されるが、土師器、須恵器は9世紀代⁽⁹⁾のもので灰軸陶器は、高台の退化の状況から、山茶碗への移行期の11世紀後半代⁽⁹⁾のものと思われ、出土遺物の一括性はあまりない。

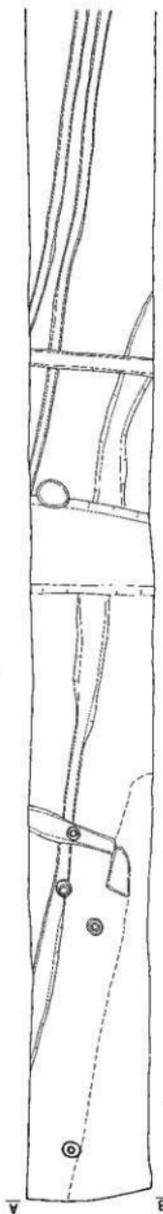
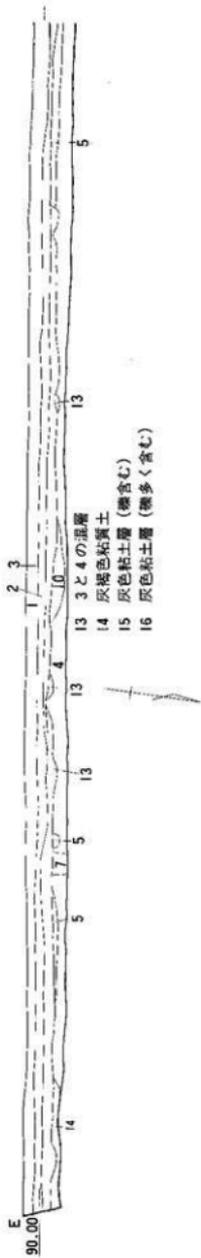
第4節 おわりに

瓦についてのくわしい分析は、付論で述べるので、それ以外の成果についてまとめてみたい。本調査区を設けたのは正恩寺遺跡の中心部にあたり、白鳳時代と思われるピット群が検出され、同時代の瓦の出土を見た。また



第 3 図 建築断層図(その1) — 30 —

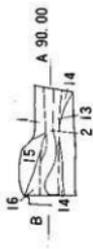
00'06



S P 005



- 17 青灰色シルト
- 18 黄褐色シルト
- 19 17と18の混層
- 20 青灰色砂質土



90.00

S P 004



第4図遺跡全体図(その2)

試掘調査をおこなった地点では、地藏堂遺跡の南の境界部において、土壌、ピット群を検出したが、一括遺物の出土を見なかったので遺構面の年代等は不明である。

そして、天の川に近接した塚状の高まりについては、試掘調査の結果、遺構も遺物も確認することができなかった。

註

- (1) 宮成良佐「北近江の遺跡」明文舎
- (2) 中川通士「近江町内遺跡分布調査報告書」(近江町教育委員会 1987.3)
- (3) 本報告「6. 付論」参照。
- (4) 本報告「6. 付論」参照。
- (5) 「平城宮発掘調査報告書」(奈良国立文化財研究所 1976)
- (6) 斎藤孝正「東海道地方諸窯における灰胎陶器の編年」(第4回 中世土器研究会資料 1985.12)

第5節 付論 正恩寺遺跡出土の瓦について

(1) 出土・採集瓦

本調査で出土した瓦は、約10片、ほとんどが小さく割れた平瓦、丸瓦片で、小型のコンテナに1箱程度の出土量であった。ここでは、以前不時に出土していたものも含めて報告しておく。

① 軒丸瓦 (図版8～9)

軒丸瓦は、採集品の1型式、2点が知られる。いずれも周縁に3重の重圏文をめぐらせる有子葉単弁8葉の蓮華文である。蓮弁は、花卉と間弁を輪郭線で面すことにより表現されており、そのため花卉、間弁は、ともに大きくよく発達したものとなっている。いわゆる「山田寺式」に属す。

1の中房蓮子は、「1+6」、接続丸瓦の凹面には、布の跡とじあわせ痕が認められる。瓦当部と丸瓦部の接続は、印籠継法の可能性が高い。

② 軒平瓦 (図版8、3～4)

軒平瓦も2点が知られる。3は採集品で、4は本調査区のSP003より出土した。いずれも破片で、かつ磨耗しているが、3は無頸式の3重孤文、4は同類軒平瓦の瓦当部下半が剝落したものとみられる。

③ 平瓦 (図版9～11)

平瓦は、最も数多く知られ、凸面調整を中心に、大きく5型式に分類される。

平瓦I類 (図版9、5～6)

本類は、凸面に長軸を側縁に平行させる斜格子叩きをまばらに施す。いずれも酸化炎焼成で褐色を呈し、凹面の布目は、そのまま残す。(図版15-6・8図)

平瓦II類 (図版9、7～8)

本類は、凸面に軸縁を側縁に平行させる正格子叩きをまばらに施す。いずれも還元炎で爐し焼き風に焼成され灰黒色を呈している。凹面の布目はそのまま残す。(図版15-8図)

平瓦III類 (図版9、9～14、図版10、15～19)

本類は、凸面に側縁に平行する長大なR型縄目叩きを施すが、諸特徴から3垂式に細分される。

III a類 (9～11)

本類は、凹面の布目を丁寧にナデ消すもので、凸面の縄目は細い。

III b類 (12～16)

本類は、凹面の布目をそのまま残すもので、凸面の縄目はやや粗い。

III c類 (17～19)

本類は、凸面の縄目が著しく粗く、しかも叩きしめ方がルーズである。

以上のように、III類は3垂式に細文されるが、全体としては、酸化炎焼成のものが多いこと、布目に粗いものが多いことなど共通点も多い。(図版15-6、15-9図)

平瓦IV類 (図版10、20～23)

本類は、凸面に側縁に平行する短小な縄目叩きをしたのち、それを横位のナデにより不完全ながら消去する。凹面の布目は、そのまま残し、しかも密によくまとまる。(図版15-6図)厚さについても、20が著しく薄いほかは、よくまとまっている。(図版15-10図)

平瓦V類(図版11, 24~32)

本類は、ヘラを使った横位のナデにより、凸面を完全に無文化するもので、叩きしめの痕跡は、まったく残さない。凹面の調整には、布目をそのまま残すものと、一部をナデ消すもの両方が認められるが、布目は全体として密なものが多く、(図版15-6図)厚さは、典型的な正規分布を示す。(図版15-11図)なお、Va類とVb類は、焼成の違いのみにより区別した。(Va類は、II類と同じく燻し焼き風に焼成される。)

以上の平瓦のうち、確実に桶巻き作りとわかるものは、IV類(20・粘土板あわせ目、23・布のとじあわせ等)とV類(凸面の回転を利用したヘラナデ等)のみで、III類(特にIIIc類)は、凸面の長大な縦位の縄目叩きや、側縁の断面形態などから、一枚作りになる可能性が高い。

④ 丸瓦(図版12, 33~39)

丸瓦には、行基葺式と玉縁式の両方が知られる。出土量は、平瓦に比して著しく少ない。

丸瓦I a類(33~35)

本類は、行基葺式の丸瓦であるが、凹面には横骨の痕跡が明瞭に観察される。布目は、そのまま残され、密によくまとまる。(図版15-7図)色調も、すべてが表面・青灰色、内部・褐色を呈し、堅緻に焼きしまっている。厚さも、ほぼ同じである。(図版15-12図)

丸瓦I b類(36~38)

本類は、I a類とは異なり、今のところ凹面に横骨の痕跡は一切認められない。布日は、そのまま残すが、I a類に比べ粗いものが多く、厚さもやや厚い。(図版15-7図、12図)

丸瓦II類(39)

本類は、玉縁式の丸瓦であるが、図示した玉縁部の破片1点のみが出土した。I b類同様、凹面に横骨痕は認められない。

以上より、軒丸瓦が典型的な「山田寺式」に属すること、軒丸瓦に重弧文がみられること、平瓦に桶巻き作りのものがあること、丸瓦に行基葺のものがあることなどから、少なくとも、正恩寺遺跡の瓦葺き建物は、白鳳期でも、そう新しくない段階で創建されたものとみられる。一方廃絶の時期については不明であるが、平瓦に、一枚作りのものがみられること、丸瓦に玉縁式のもののみがみられることなどから、少なくとも、奈良期の前半頃までは、存続していたものと想定される。

(2) 瓦からみた正恩寺遺跡の位置づけ

現在、湖北地方には、少なくとも36カ所以上の古代瓦山遺跡が知られる。そのうち、正恩寺遺跡の所在する天野川の流域には、10遺跡が存在し、そのうちのいくつかは、古くより、息長氏の氏寺として注目をあつめてきた⁽¹⁾。ここでは、湖北地方全体の状況をふまえつつ、正恩寺遺跡の位置づけについて考察する。

まず軒瓦についてであるが、正恩寺でみられる、蓮弁を輪郭線で表現するタイプの「山田寺式」軒丸瓦は、正恩寺のほかには、法勝寺遺跡(近江町高溝)と三大寺廃寺基壇跡(米原町枝折)で出土している。同じく、正恩寺でみられる無額式の3重弧文軒平瓦は、正恩寺のほかには、法勝寺と浅井寺廃寺(湖北町今西)で出土している。

しかし、三大寺出土の同タイプ軒丸瓦は、量比から明らかに補修用と想定され、かつ伴うと想定される3重弧文軒平瓦は出土していない。同じく、浅井寺廃寺出土の無額式3重弧文軒平瓦も、今のところ1点のみの出土で、しかも軒丸瓦には、いわゆる「山田寺式」に属するものは知られていない⁽²⁾。したがって、正恩寺と同じ軒瓦をセ

ットとして使用した遺跡は、湖北地方全体の中でみても、法勝寺遺跡のみとなり、尚遺跡が創建期において密接な関係をもっていたことがうかがえる。

そこで、両遺跡出土の軒丸瓦の瓦当文様を比較してみると、法勝寺では、蓮弁の輪郭線が花卉をほぼ全周するのに対し、正恩寺では、蓮弁の輪郭線が花卉をほぼ全周せず、弁の端部分が空白となっている。このことは、「法勝寺→正恩寺」という時間差による瓦当文様の退化として考えられるもので、創建の順序も、おそらくこうした過程をたどったものと想定される。また、三大寺出土の同軒丸瓦は、正恩寺出土例と全く同一で、同範になる可能性も高いことから、おそらく、正恩寺（関係の遺跡）から、ある時点で、搬入されたものと推定される。

次に平瓦であるが、正恩寺で出土する平瓦のうち、I類（＝B類）と全く同じ叩き板で作られた平瓦が、三大寺と法泉寺遺跡（山東町本郷）でも出土していることが確認された。同じ関係は、三大寺と法泉寺の間ではさらに多くの型式にわたって確認される。（図版13）また、大鹿遺跡（山東町山室）でも、法泉寺、三大寺との間で、共有する平瓦があるようだ。

以上のことから、平瓦の一部については、天野川の流域がひとつの流通圏となっていたことがわかる。ただし、B類（＝I類）～D類については、法泉寺で明らかに主体を占めるのに対し、正恩寺、三大寺（大鹿）では、ごく少量しか出土していない。逆に、A、F、G類については、いずれでも主体を占めるには至らないが、三大寺での出土量が目立つ。

したがって、B類（I類）～D類については、法泉寺もしくはその瓦屋から三大寺、正恩寺、（大鹿）遺跡等に搬入され、A、F、G類については、三大寺から法泉寺へ搬入されたものと想定される。

これらの瓦の移動は、発掘調査によって確認された三大寺の存続期間、飛鳥Ⅳ期から平城Ⅰ期の間におこなわれたことは疑いない。

以上のことから正恩寺は、白鳳期でもそう新しくない時期に法勝寺について創建され、かつ、天野川流域の諸遺跡とも瓦そのものの移動をとまなう密接な関係をもちながら運営・維持されていたことが明らかとなった。こうした天野川流域のほぼ全体をおおむねの寺院の運営、維持をなしたものは、おそらく当地最大の古代勢力、息長氏（とそれに従属する氏族）であった可能性は極めて高いといえよう。

〔追記〕 本文をまとめるにあたり以下の諸氏、諸機関より、多大なる御教示、御配慮を賜った。記して感謝の意を表したい。

木立雅朗、久保智康、粕淵辰二、吉田利光、春日神社、近江町、米原町、山東町をはじめ、湖北地方各市町教育委員会（敬称略）。

註

(1) 『改訂 近江国坂田郡志』第3巻上 坂田郡教育会 1941年。

(2) 周縁に鋸歯文をめぐらせる複弁蓮華文が多く出土する。

(3) 今のところ、確実に異范と判断される要素もない。

(4) 田中勝弘 奈良俊哉『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』p.6、図2 山東町教育委員会 御座賀県文化財保護協会 1986年。

(5) 田中勝弘『三大寺遺跡群』米原町教育委員会 1984年。

表1 正恩寺遺跡出土・採集瓦の種類表

番号	種別	型式	色調	焼成	厚味 (最大3cm)	凹面調整	柄 (3cm×3cm)	凸面調整	備考	出土位置等
1	軒丸瓦 (模範丸瓦)	I	灰色	あまい	●	1.0 (中厚部)				採集 (1912年 出土)
2	軒丸瓦	I	灰褐色	堅緻	○	?			布のじあわせ、 椀背痕なし	採集
3	軒平瓦	I		あまい	○	4.0				
4		?			○	?				本調査区 S P004
5	平瓦	I	褐色	堅緻	○	2.3	布目をその まま残す	17×22	まばらな 斜格子印 きをその まま残す。	酸化炭焼成
6				あまい	○	2.1				
7		II	灰黒色	堅緻	●	2.6			まばらな 正格子印 きをその まま残す。	紙摺トレンチ 壁土壁
8				ややあまい	●	2.7				焼し焼き風 採集
9		III a	灰褐色	堅緻	○	1.8	布目を消去 する	—		紙摺トレンチ 壁土壁
10			表面灰色 内部灰褐色		○	1.8		—		採集
11			褐色		○	2.0		—		
12		III b	灰褐色		○	1.6	布目をその まま残す	22×27		長人は縦目 (R)印きを そのまま残す。
13			青灰色		●	1.5				
14			灰褐色	あまい	○	1.5		16×14		
15				堅緻	○	2.4		17×26		
16			褐色	あまい	○	2.2				
17		III c	褐色	堅緻	○	2.8	布目を消去 する	—		
18			表面灰色 内部灰褐色	あまい	○	2.0			縦目印き が、やや まばら	焼し焼き風、布の 互 or つぎたし
19			灰褐色	堅緻	○	2.4				
20		IV	灰色	堅緻	●	1.4	布目をその まま残す	28×28		粘土版と じあわせ
21					●	2.7			短小な縦 目印きを 不完全消 去	凸面横 位のナ デ
22			褐色		○	2.5		27×26		
23			灰色		○	2.5		25×31		布とじあ わせ
24		V a	表面灰色 内部灰褐色	ややあまい	○	2.5				
25				堅緻	●	2.2				焼し焼き風凸面 横位のヘラナ デ
26		V b	灰色		●	1.5	老同の一部 をナデ消す			凸面横位のナ デ
27			青灰色		●	2.0		27×29	完全に無 文化し、 印きの痕 跡を残さ ない	凸面横位のヘラナ デ
28			灰色		●	2.3	布目をその まま残す	25×28		
29					●	2.0	布目の一部 をナデ消す			凸面横位のナ デ
30					●	2.2	布目をその まま残す	25×32		凸面横位のヘラナ デ
31					●	2.5		21×26		布のじあわせ凸 面横位のヘラナ デ
32		?	褐色	あまい	○	3.8				厚味が著しく厚い
33	丸瓦	I a	表面青灰色 内部褐色	堅緻	○	1.7	布目をその まま残す	29×36		布つぎたし 行基式
34					○	2.2		30×33		縦位のナ デ
35					○	1.5		28×28		
36		I b	灰褐色	ややあまい	○	2.0		23×25	縦位のヘラ ナデ?	粘土版と じあわせ 行基式
37			灰色	堅緻	●	2.0		27×23	横位のナ デ?	焼し焼き風 行基式?
38			灰黒色	ややあまい	●	2.1		18×17		布の互? 行基式
39		II	灰褐色	ややあまい	○	(1.8)				工練式

(焼成の●は還元、○は酸化、●は同一個体に還元部分と酸化部分の両方がある場合、もしくは中間色)

森前・国友遺跡図版



(1) 調査前状況



(2) 試掘調査 かすみ堤盛土状況



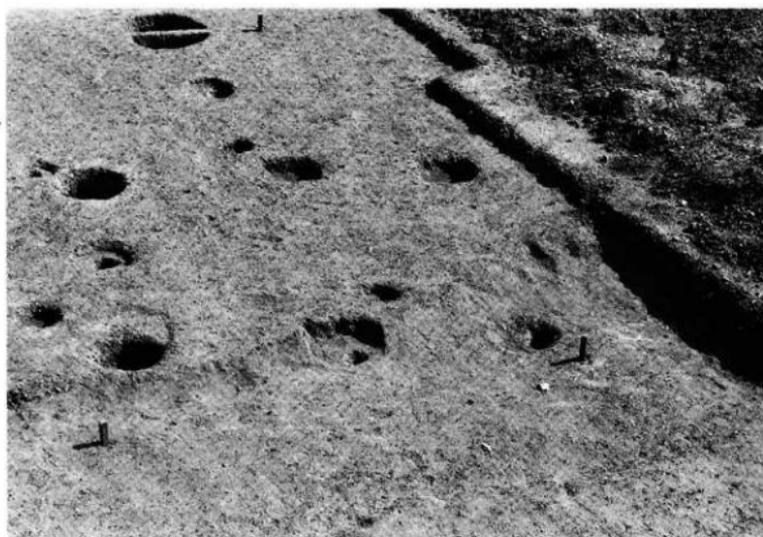
(1) A地区全景 (北から)



(2) 同上 (南から)



(1) B地区全景 (南から)



(2) B地区 SB-1



(1) C地区全景 (北西から)



(2) 同上 (南から)



(1) D地区全景 (西から)



(2) D地区東部上層 (東から)



(1) 作業状況 (D地区中部)



(2) D地区SD-1遺物出土状況



(1) D地区SD-1 (左) とSD-11 (右)



(2) D地区SD-2とSA-1



(1) D地区SD-4 (左) とSD-3 (上)



(2) D地区SD-8



(1) D地区全景 (東から)



(2) D地区東部下層 (東から)



(1) D地区SH-3



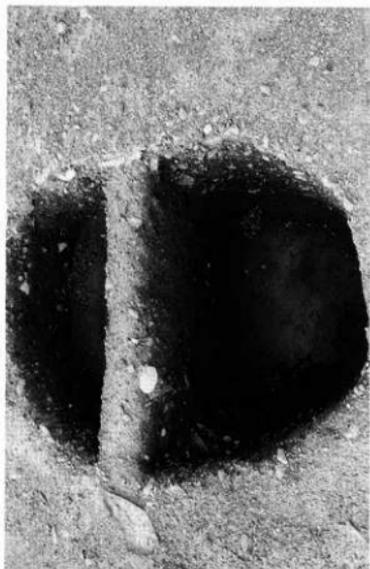
(2) D地区SH-4



(1) D地区SH-2



(2) D地区SX-1



(1) B地区SE-1



(2) C地区SK-3



(3) D地区SK-1



(4) D地区SD-1



(1) 調査前状況



(2) H地区全景 (西から)



(1) H地区SB-1・2と小溝群



(2) H地区SH-1



(1) H地区SH-1遺物出土状況



(2) H地区SH-4



(3) H地区土器群5



(4) H地区SD-1遺物出土状況

図版一五 国友遺跡 遺跡



(1) G地区全景 (北から)



(2) G地区中部 (南から)



(1) G地区沼沢地堆積状況



(2) G地区沼沢地遺物出土状況



(1) G地区沼沢地粗砂層遺物出土状況



(2) G地区沼沢地粗砂層遺物出土状況



(3) G地区沼沢地暗灰色細砂層遺物出土状況



(4) H地区SD-1

図版一八 国友遺跡 遺跡



(1) F地区全景 (北から)



(2) F地区南部 (東から)









83



86



90



88



250



89



189







231



230



232



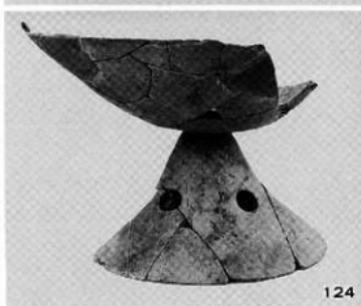
229



233



249

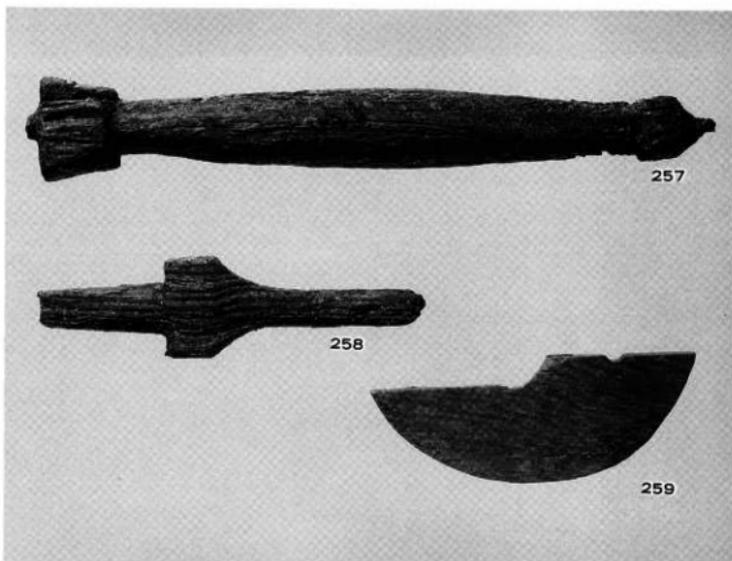
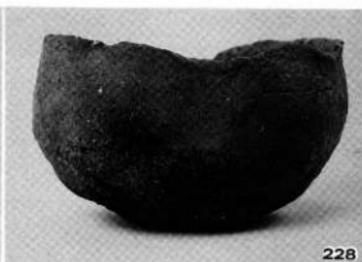


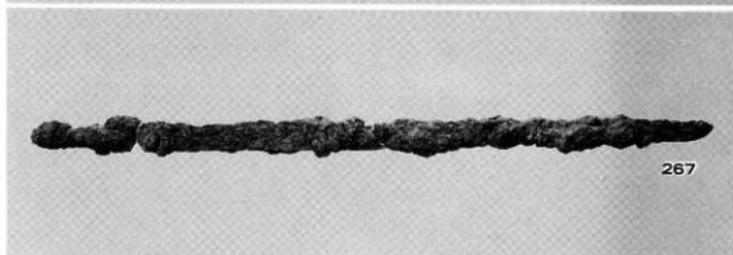
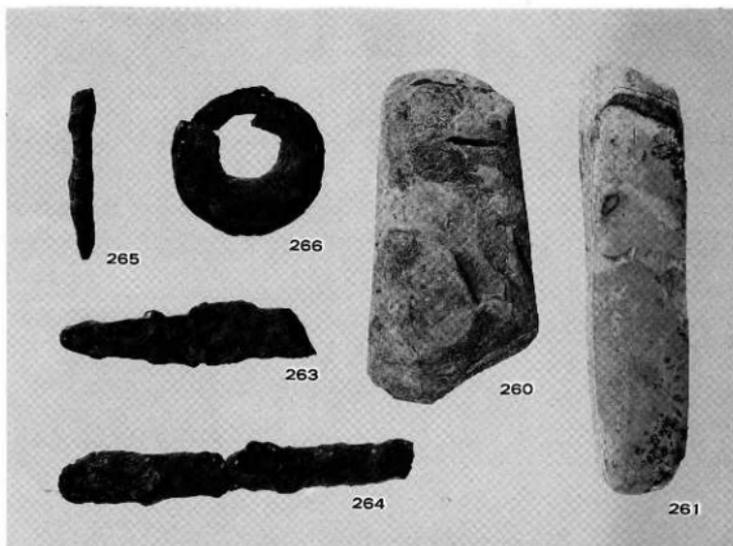
124



113



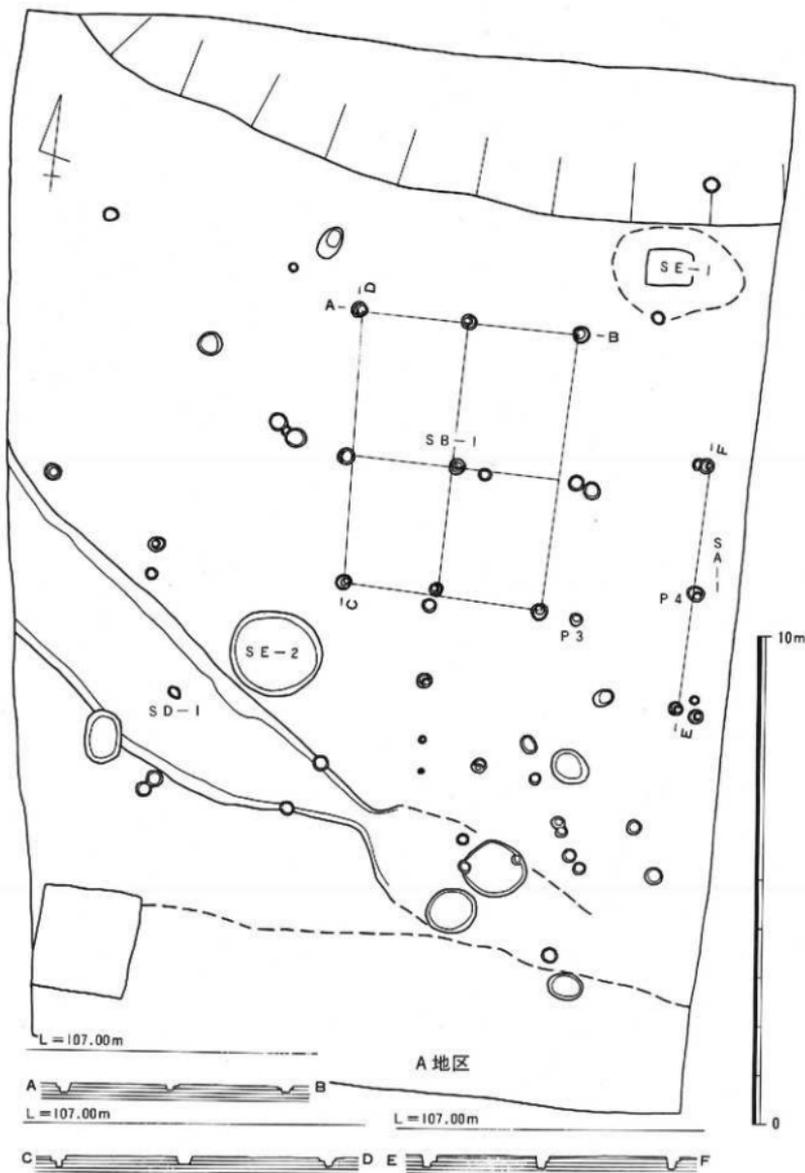


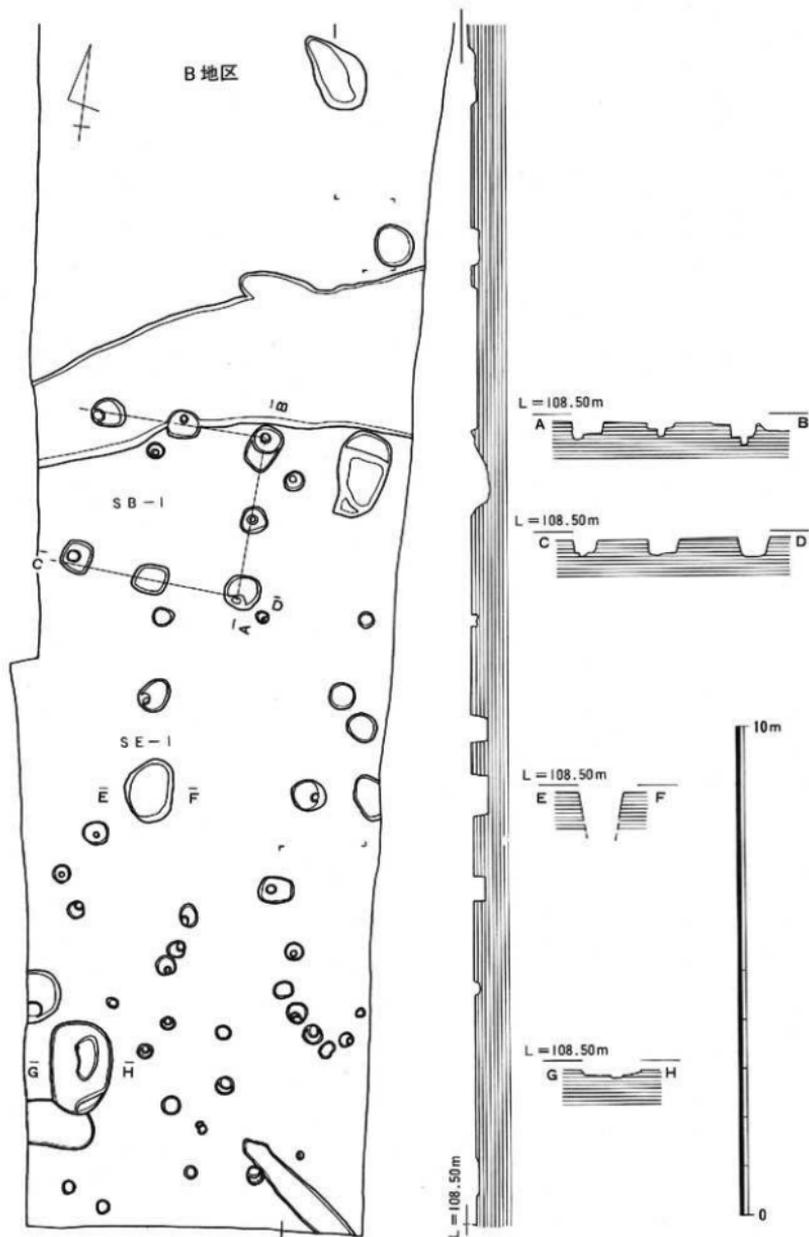


図版三〇 森前遺跡・国友遺跡 調査区

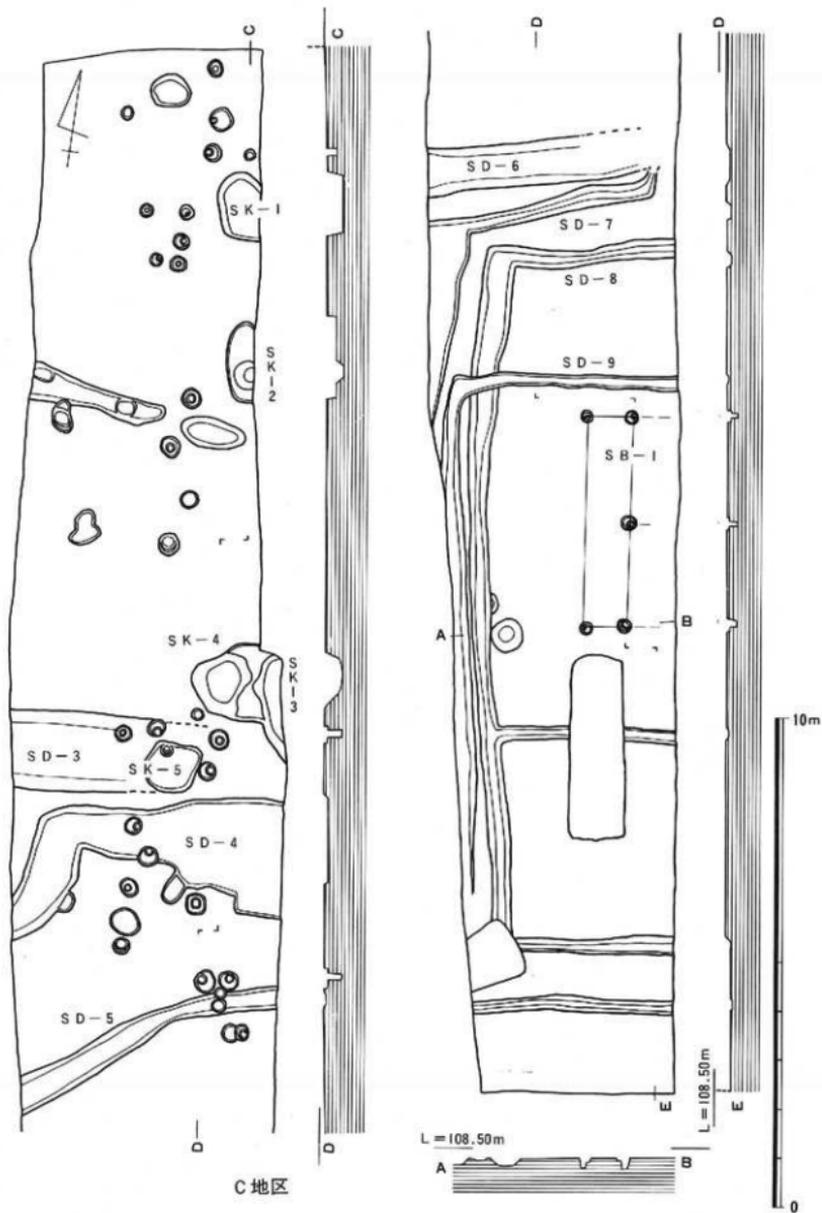


図版三一 森前遺跡 遺構





図版三三 森前遺跡 遺構



C地区

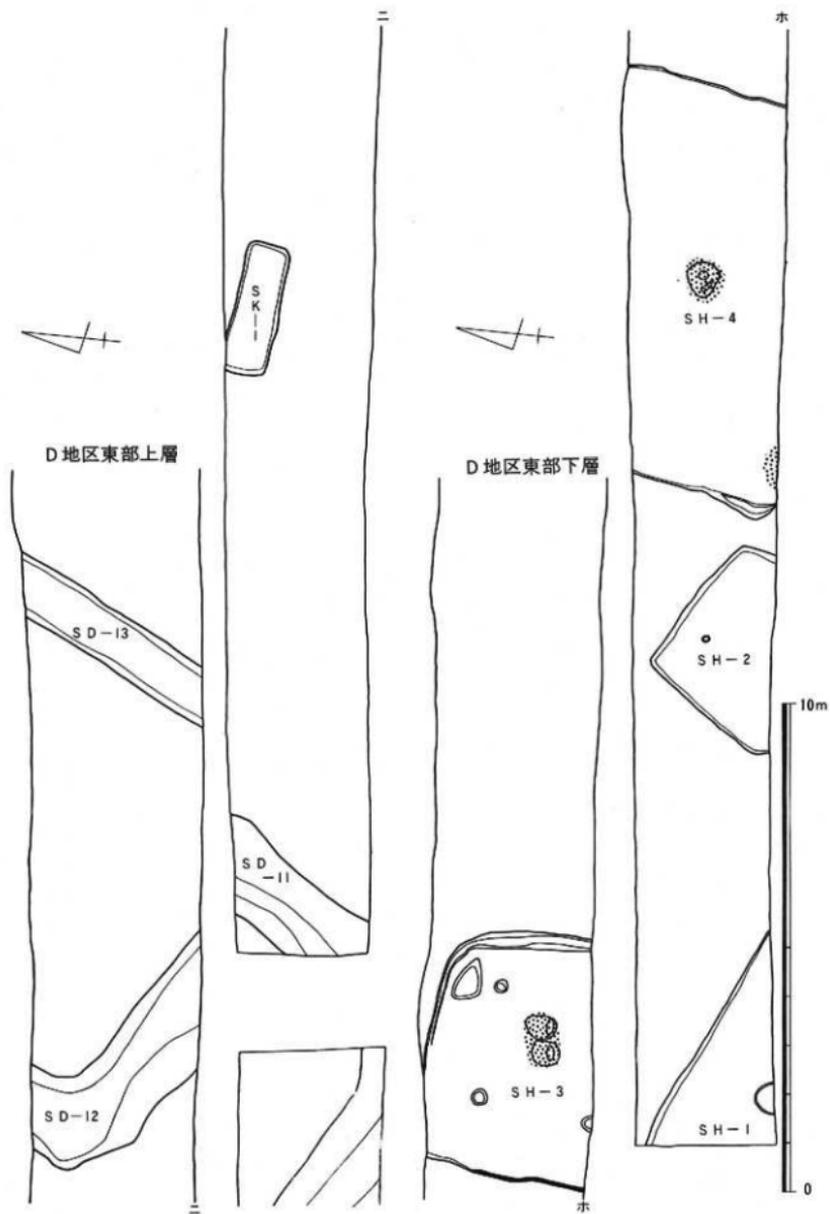
L = 108.50m

L = 108.50m

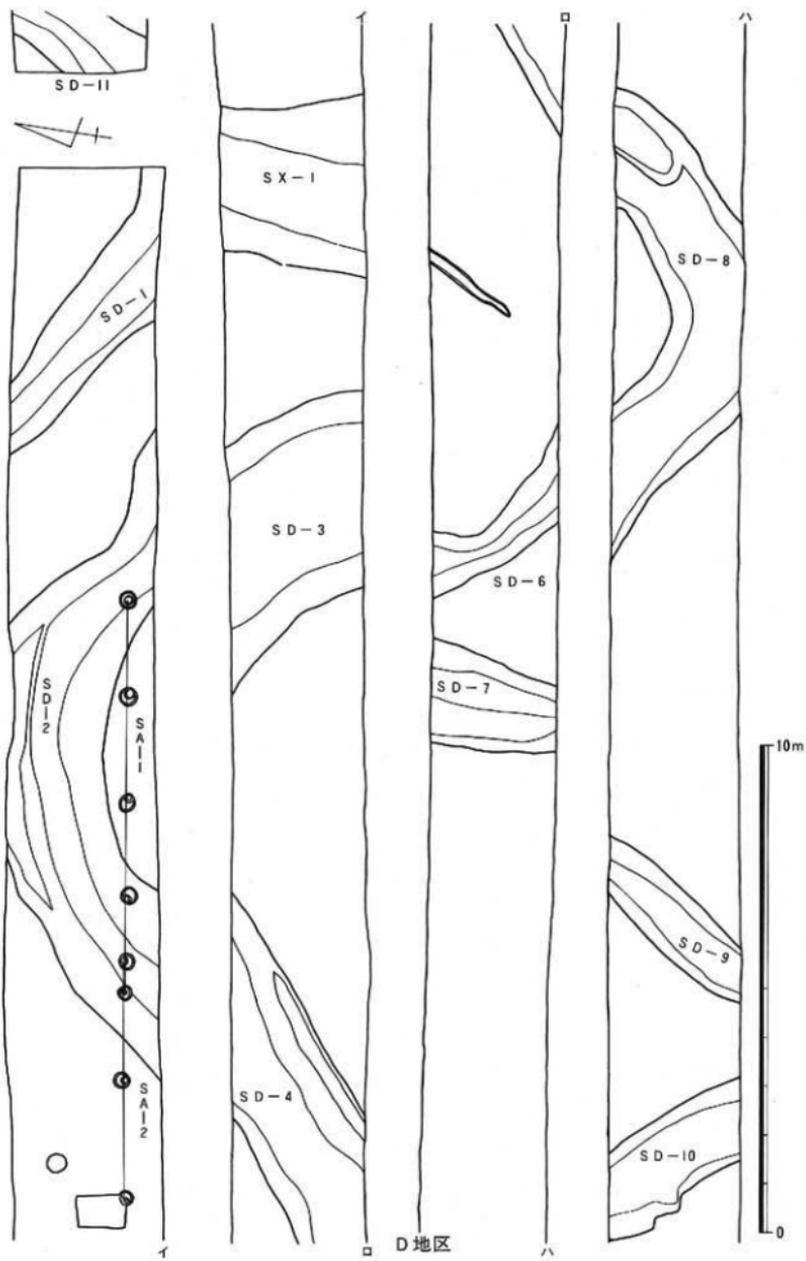
10m

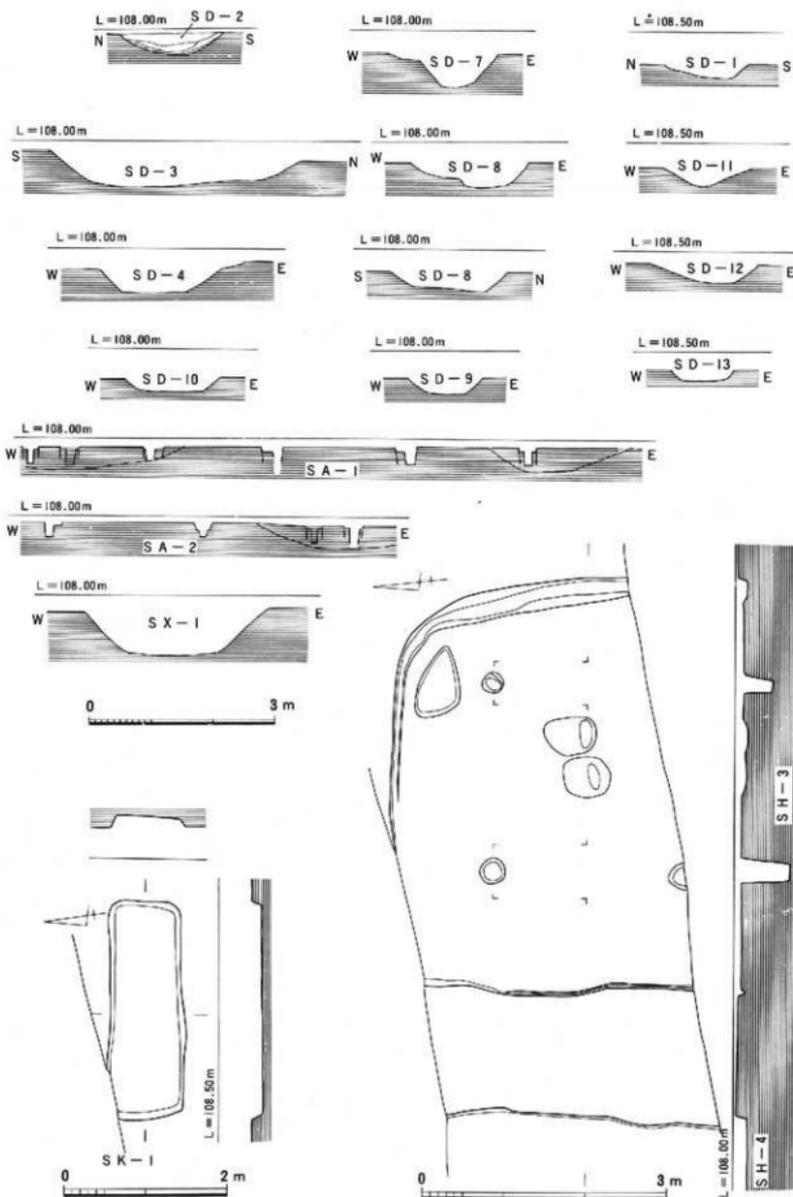
0

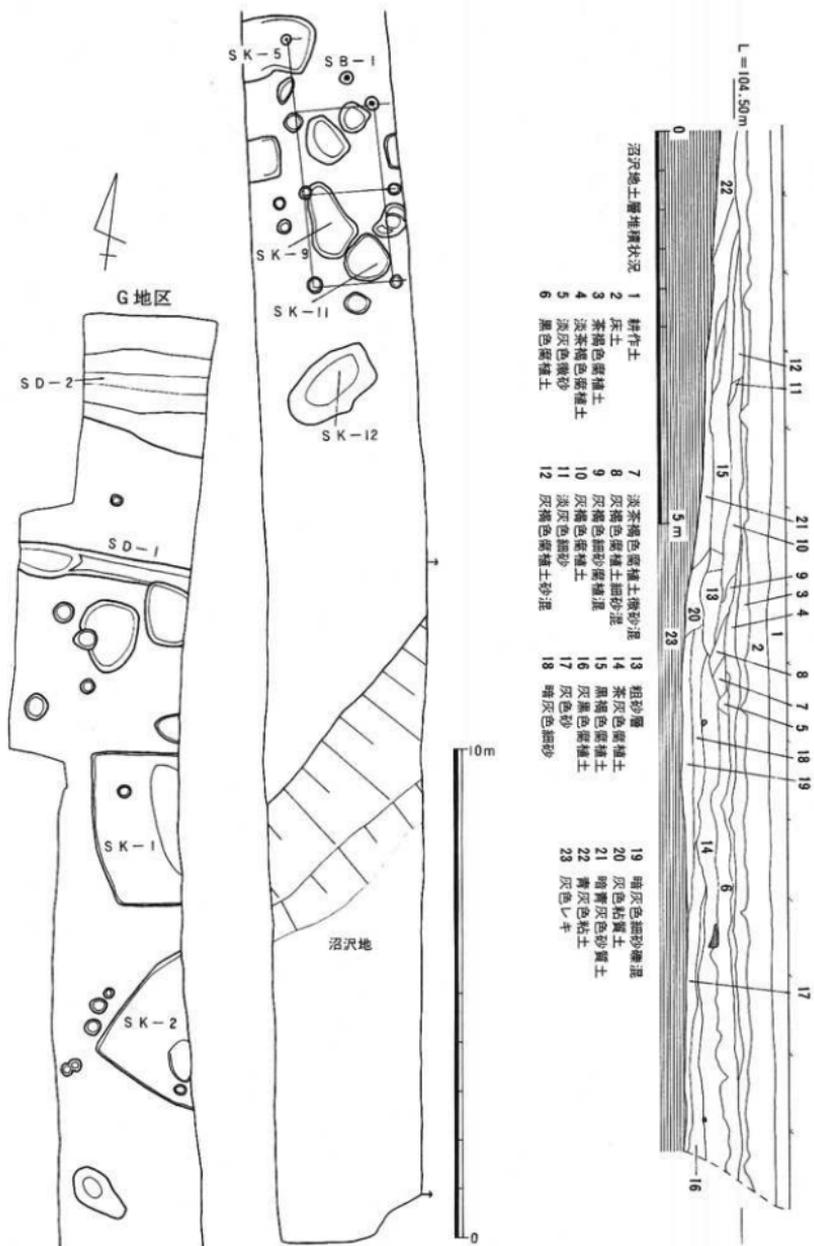
図版三四 森前遺跡 遺構

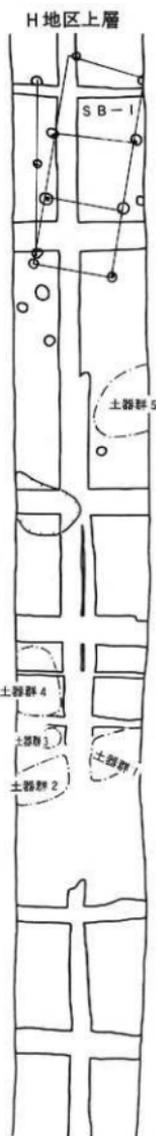
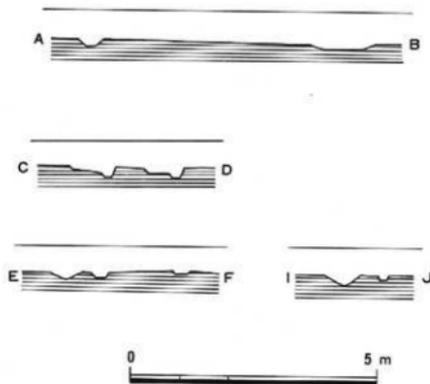
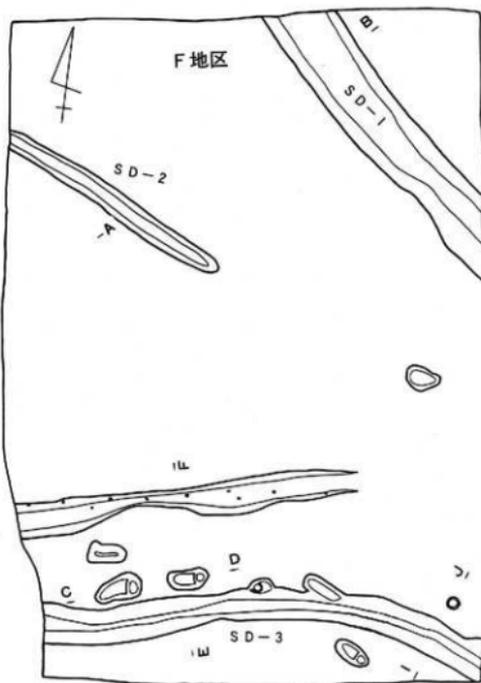


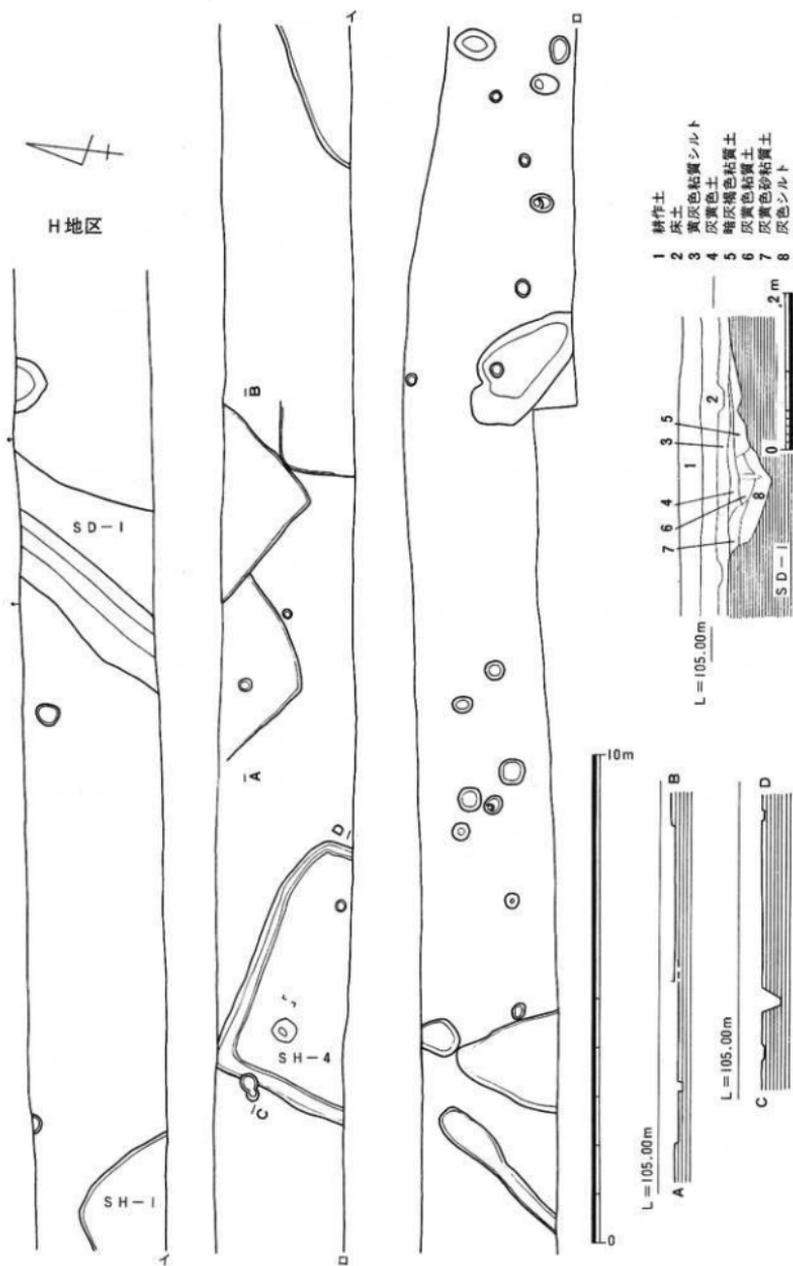
図版三五 森前遺跡 遺構



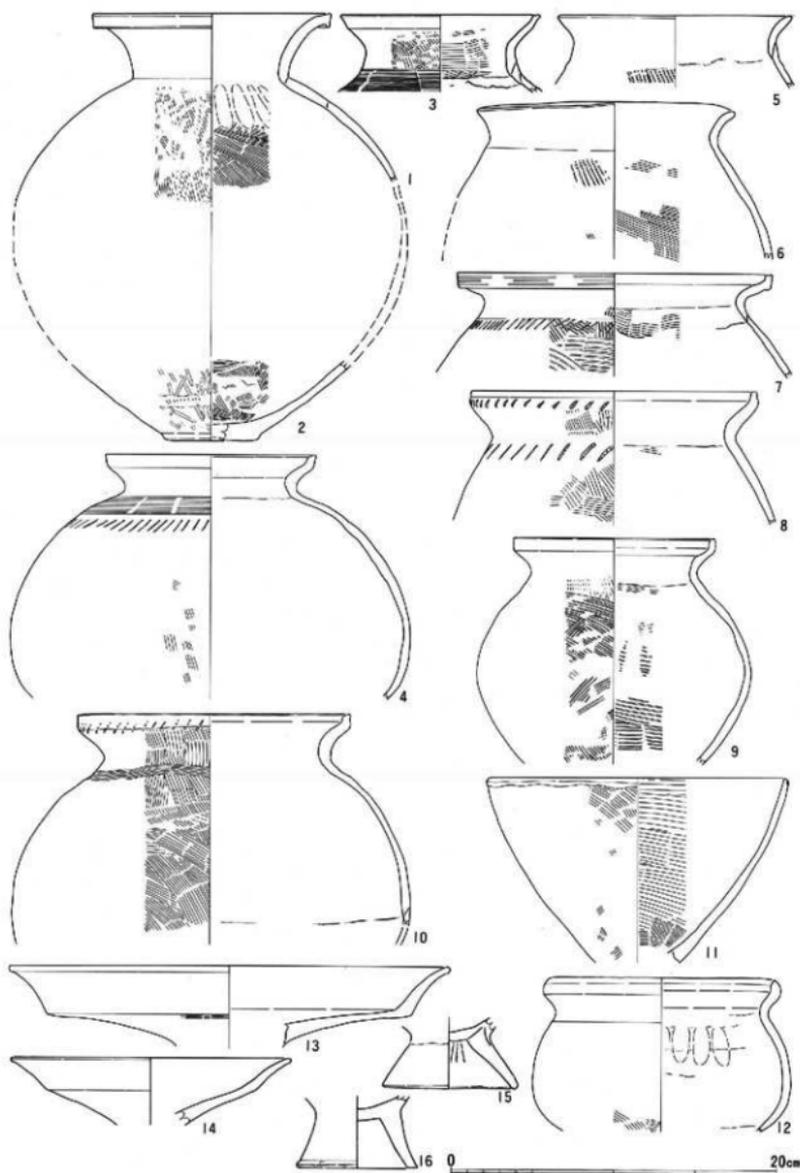






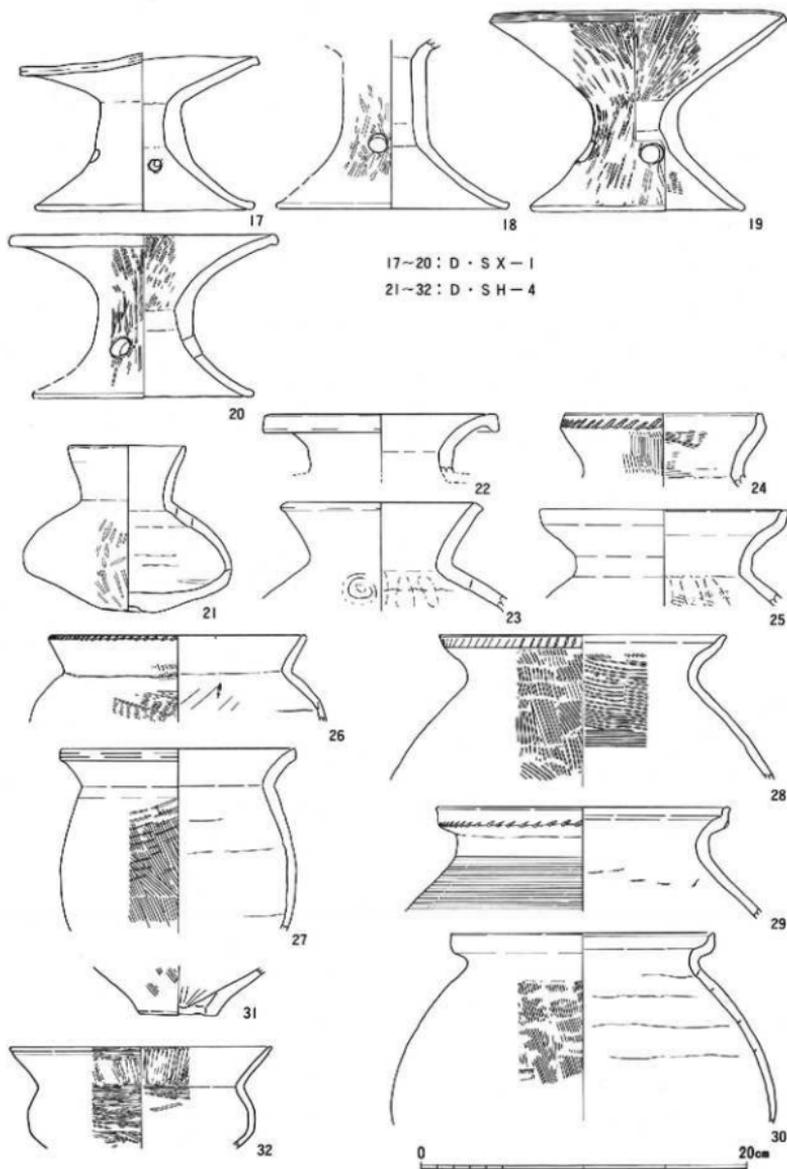


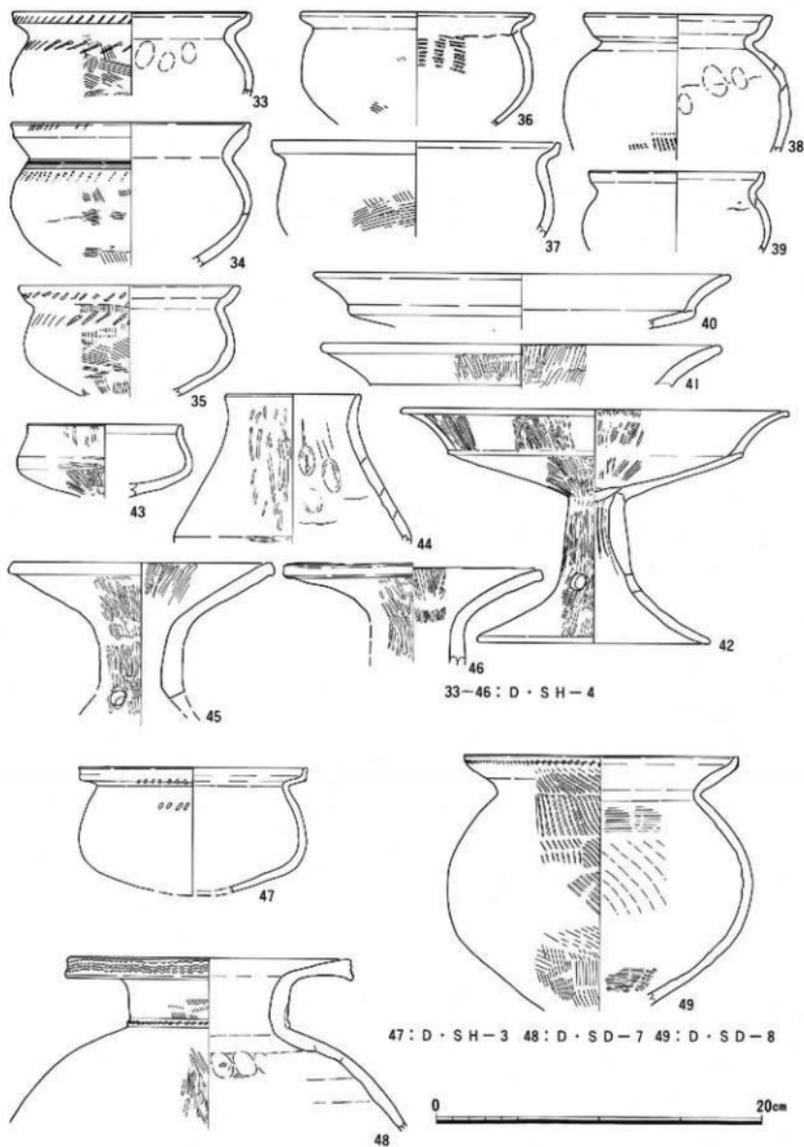
図版四〇 森前遺跡 遺物

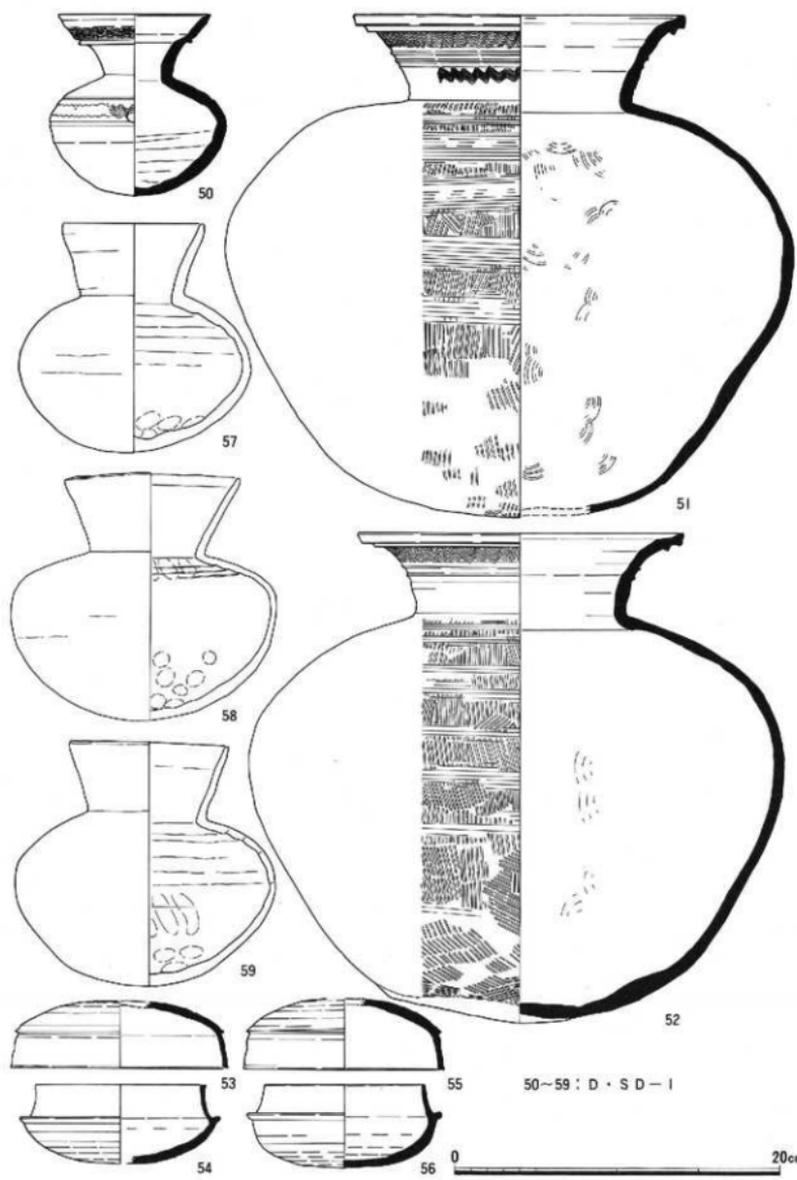


1-16: D・S X-1

0 20cm

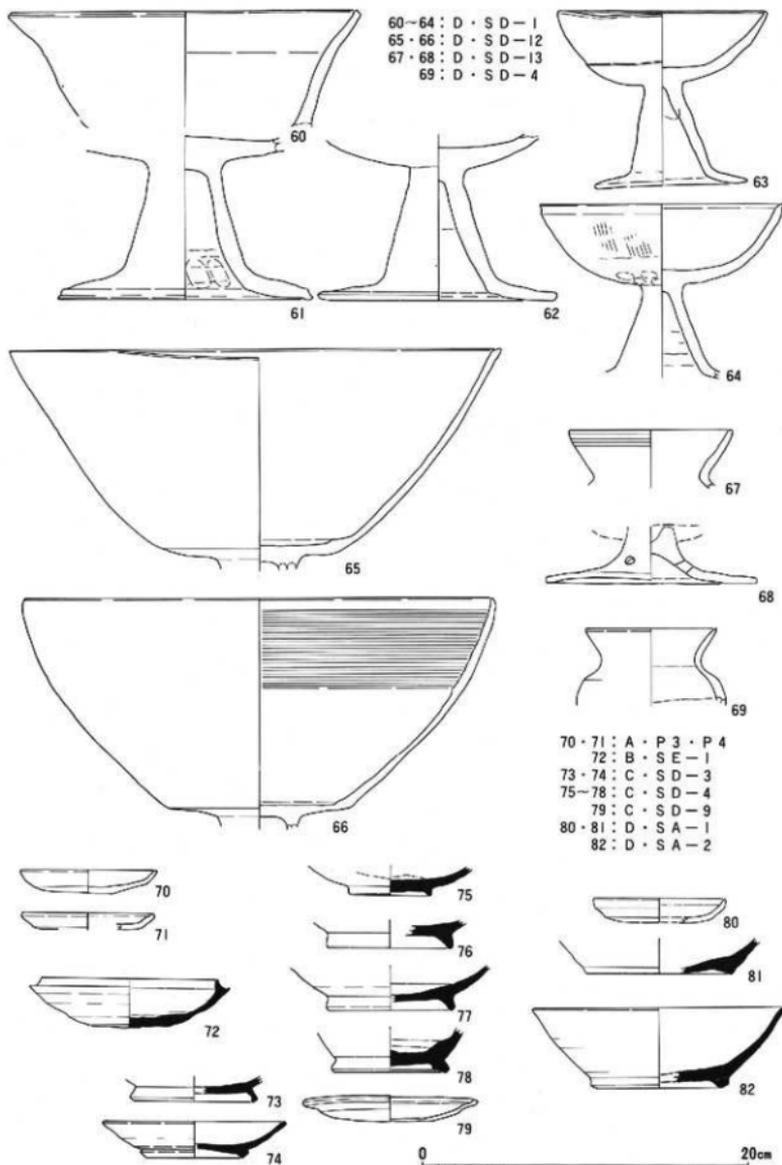


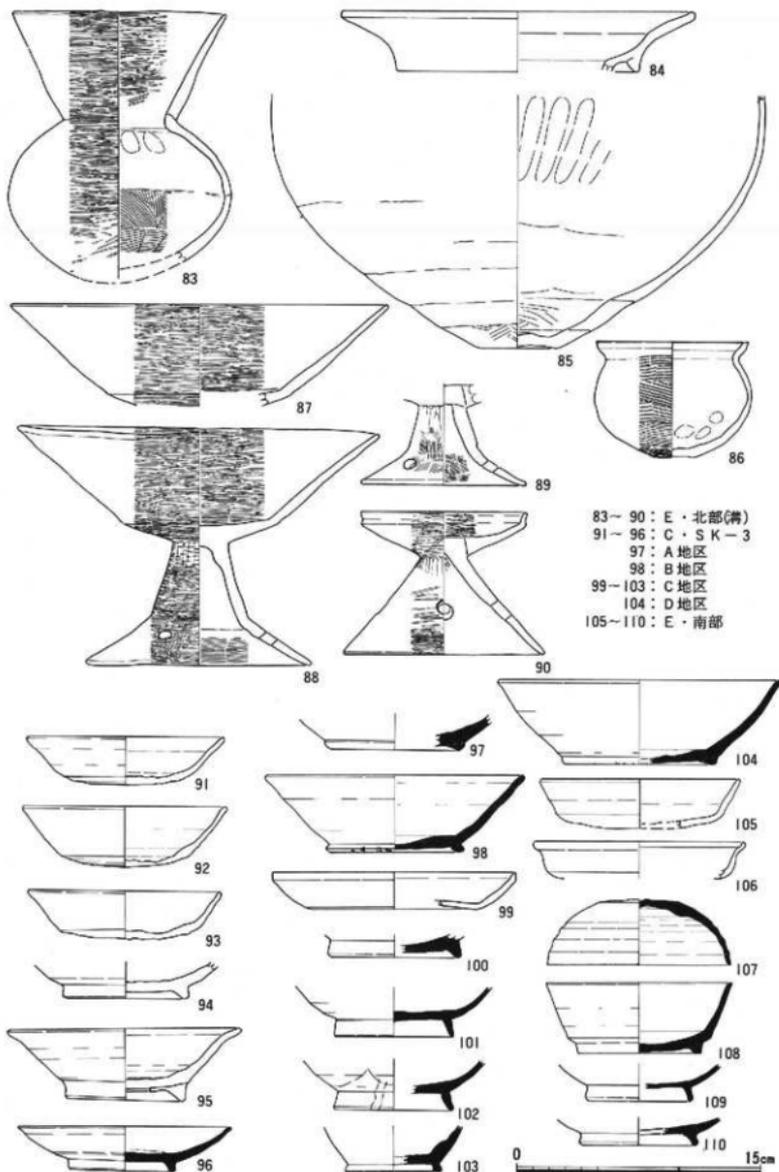




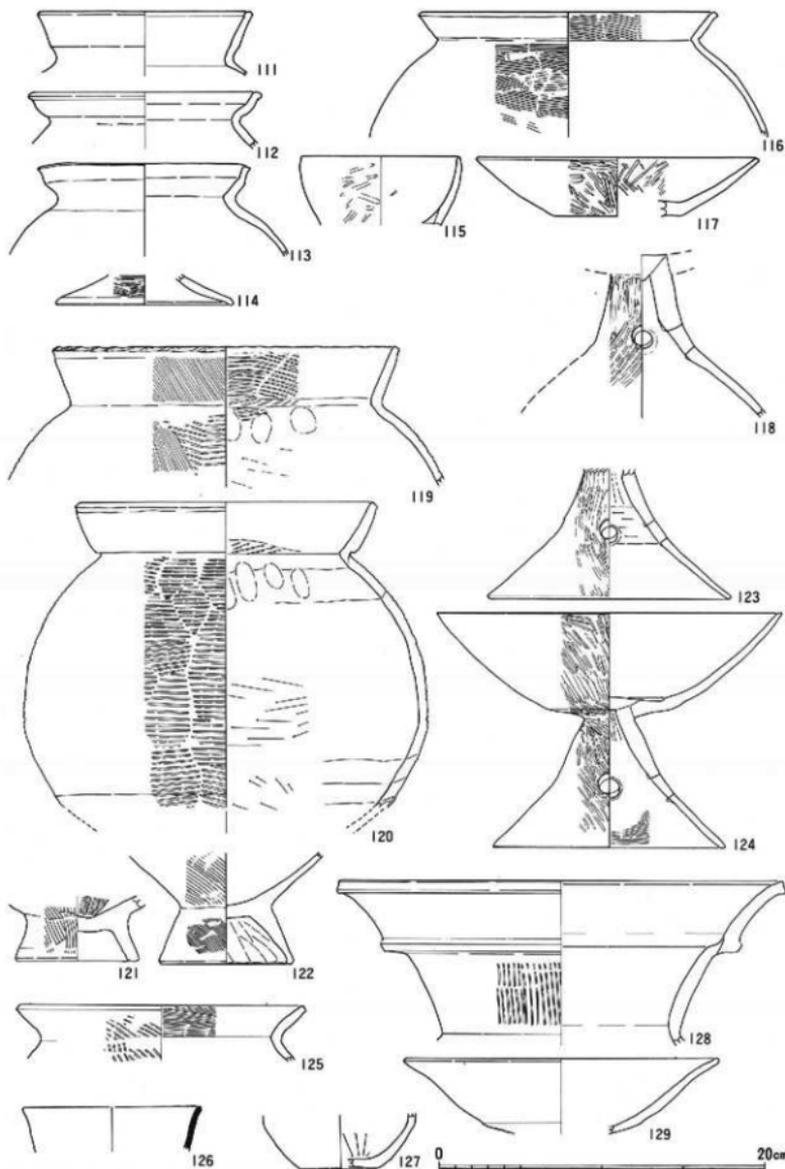
50-59: D・S D-I

20cm

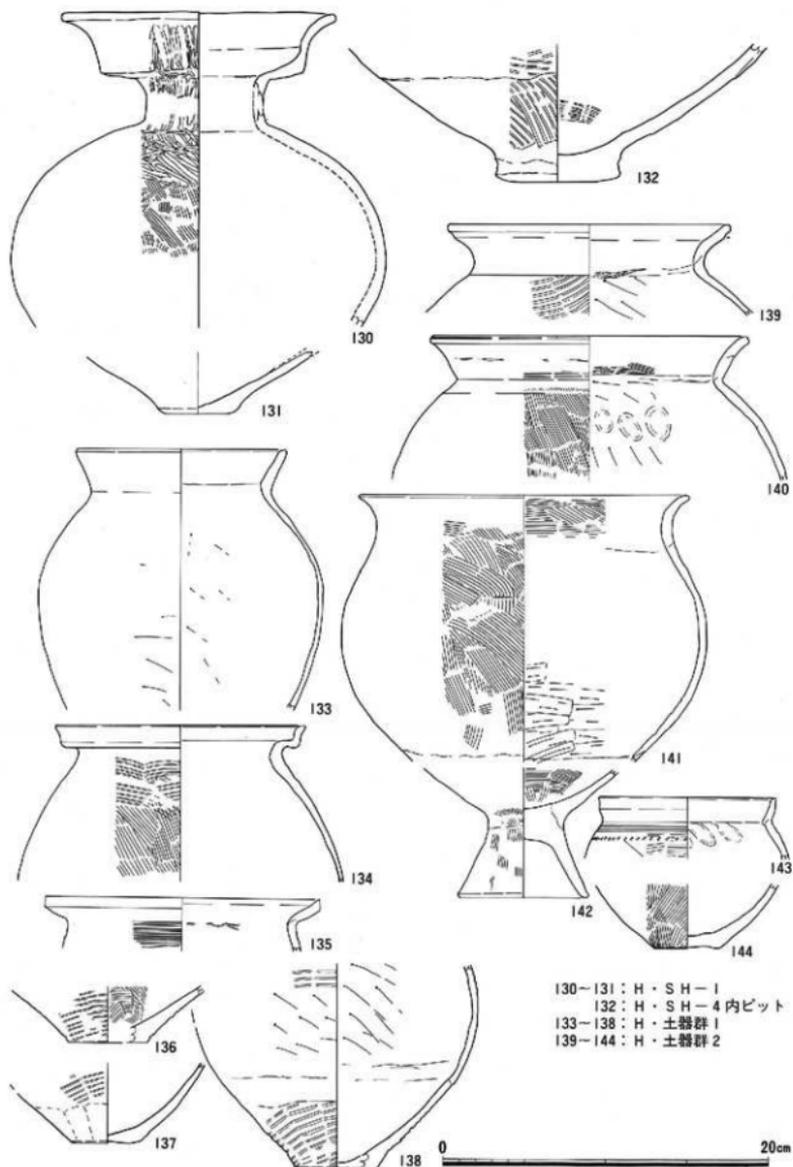


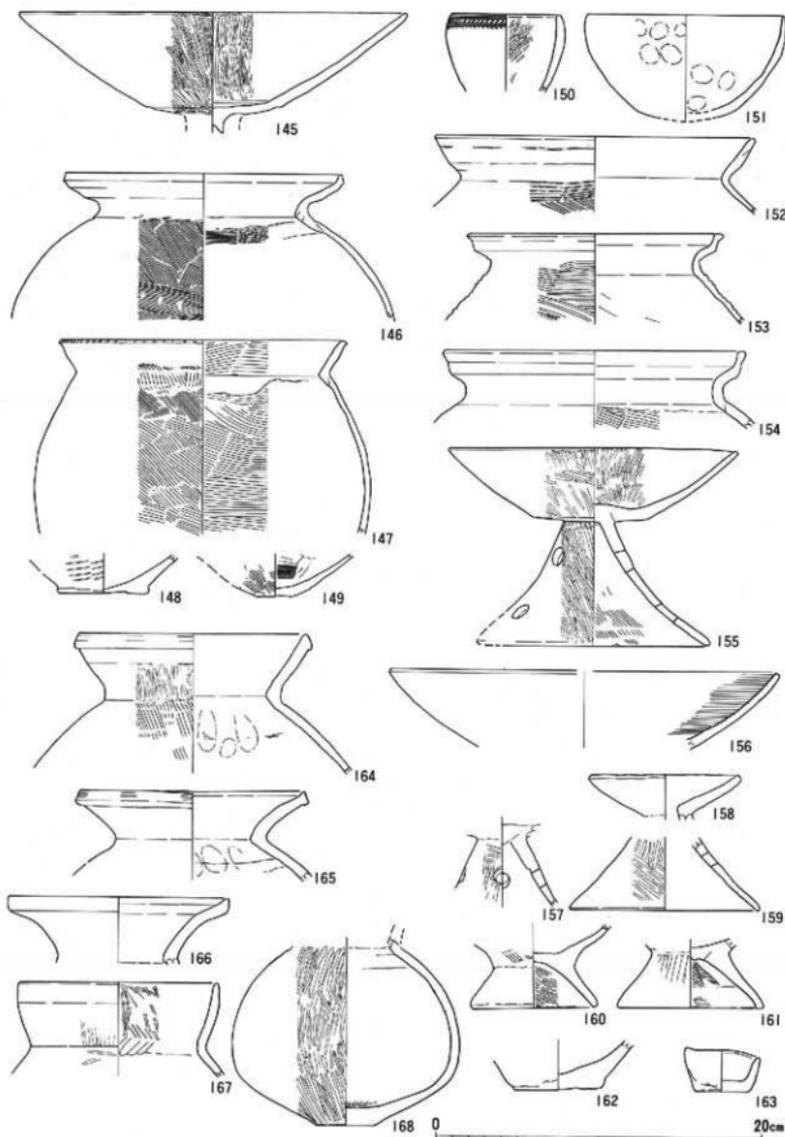


83~90: E・北部(溝)
 91~96: C・SK-3
 97: A地区
 98: B地区
 99~103: C地区
 104: D地区
 105~110: E・南部

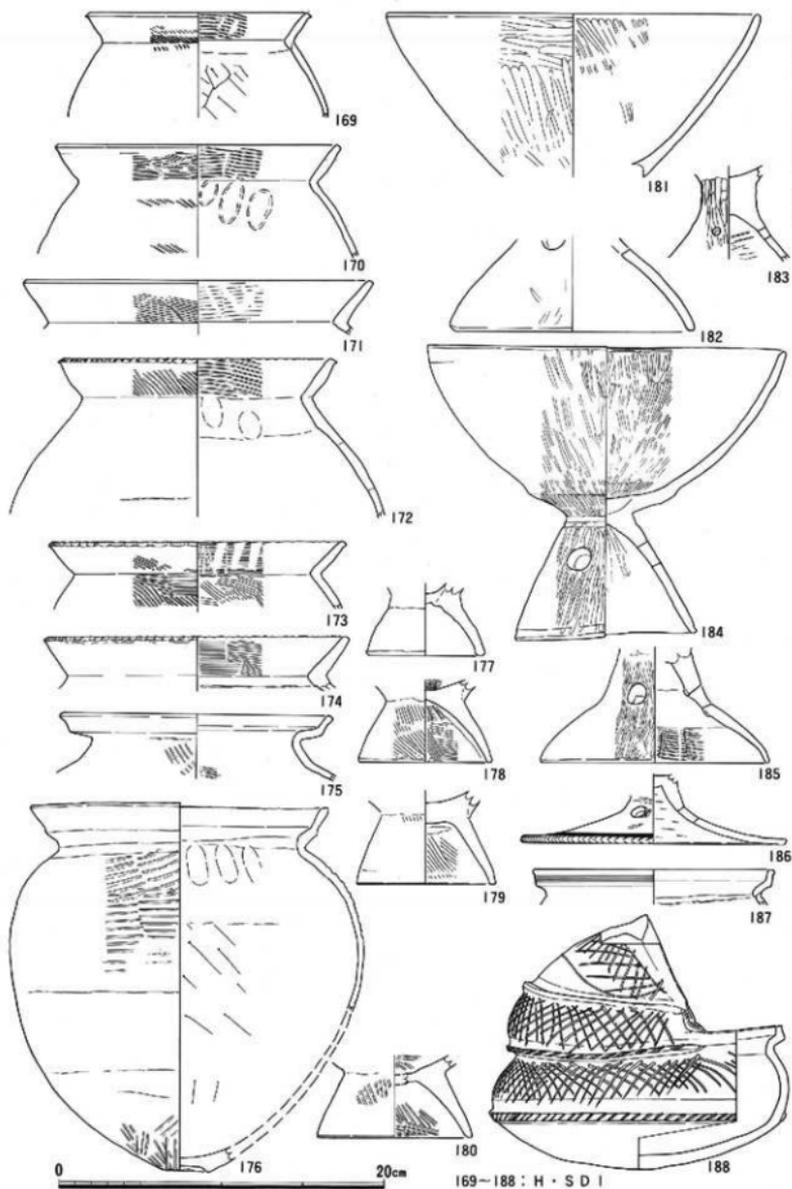


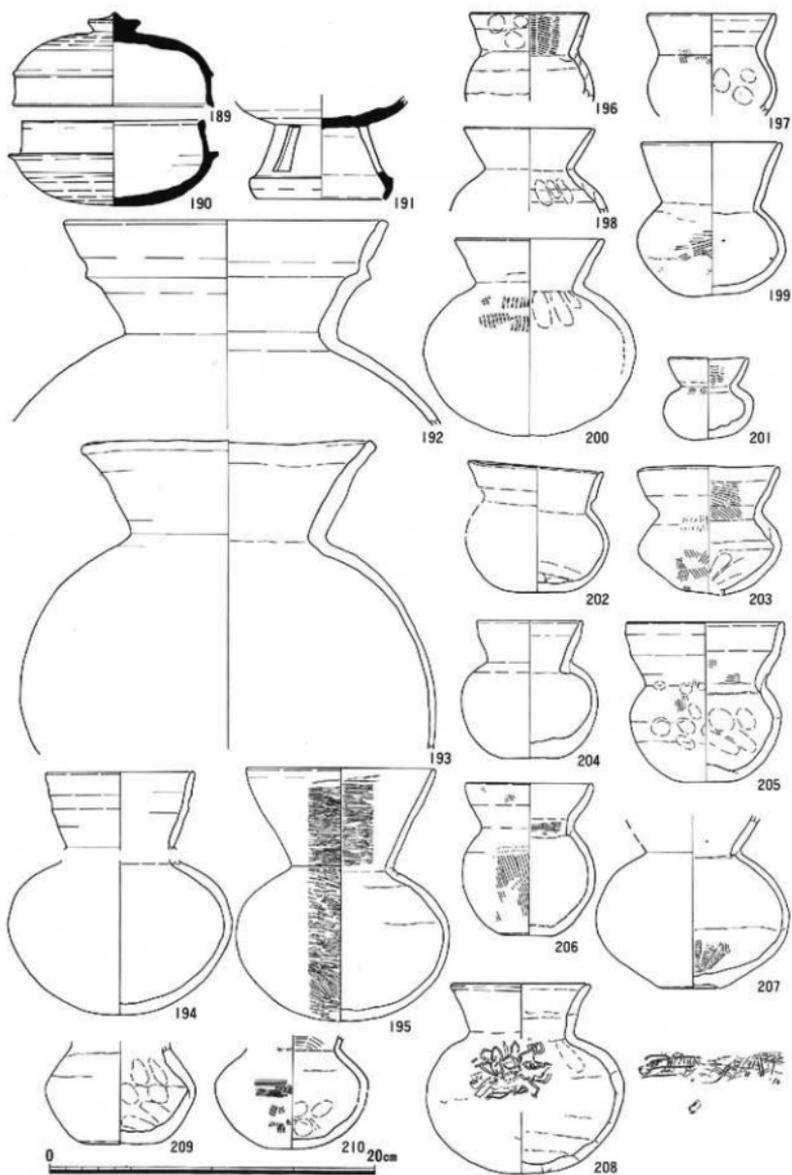
111-114: G・S H-1 115-117: G・S K-9 118: G・S K-5 119-124: G・S K-11 125: G・S D-1
 126-129: G・S D-2

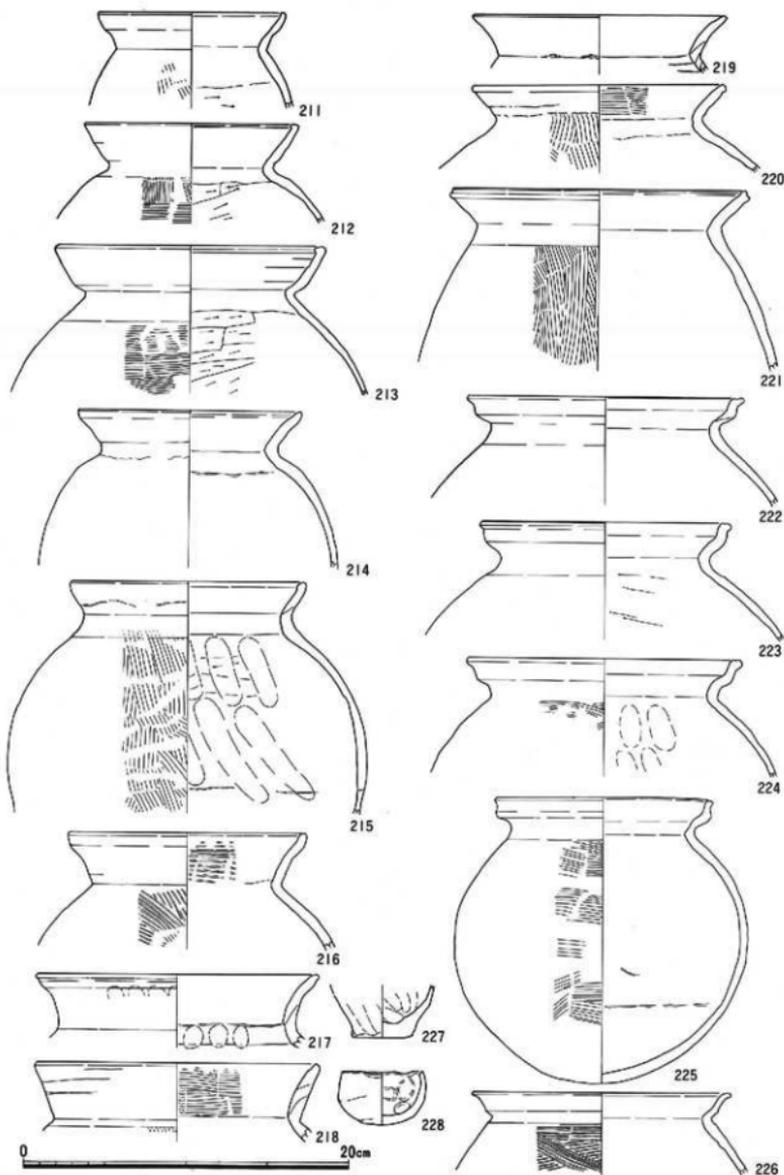




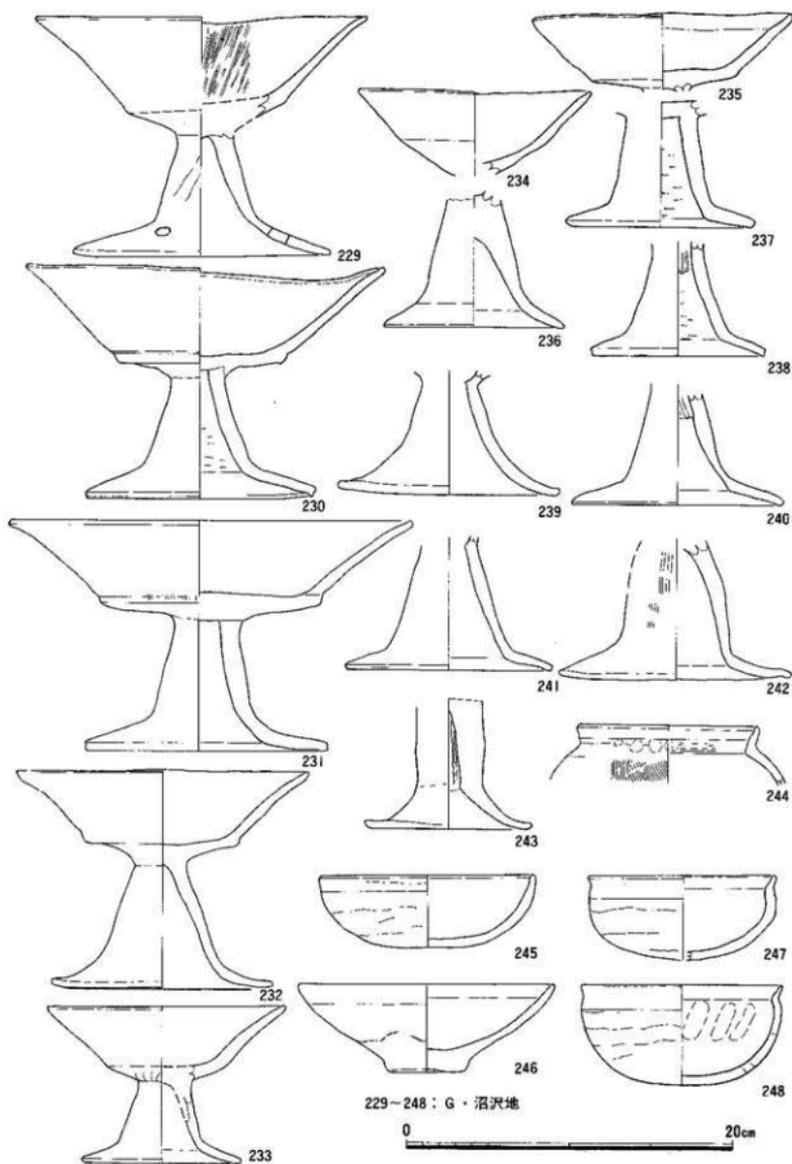
145 : H・土器群 3 146~149 : H・土器群 4 150~163 : H・土器群 5 164~168 : H・S D - I

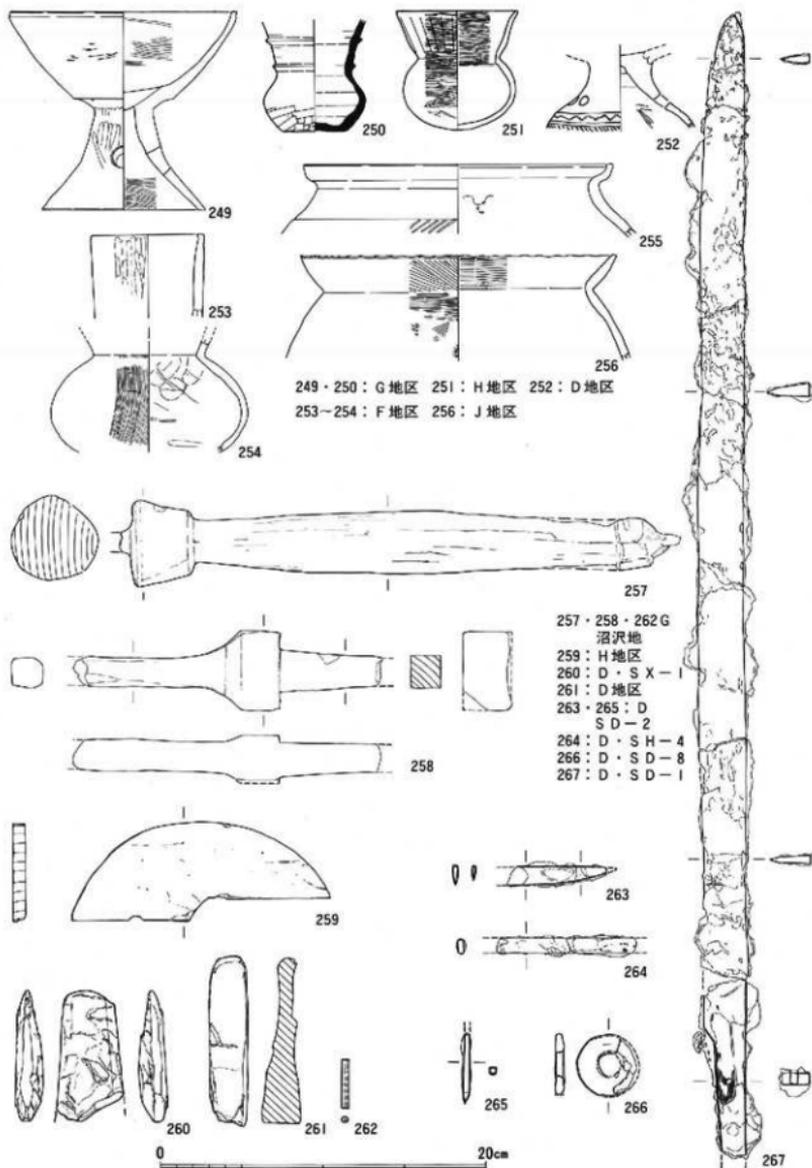






211~228 : G・沼沢地





小沢城跡遺跡図版



(1) 調査前状況 (東から)



(2) 調査前状況 (南から)



(1) 建物跡全景 (東から)



(2) 建物跡全景 (北から)



(1) 石列検出状況



(2) 石列全景



(1) 館跡内部土層堆積状況



(2) 石濶検出状況

圖版五 小沢城跡 遺跡



③ 瓦出土物遺跡



② 遺物出土状況

① 瓦出土状況





(1) 作業状況



(2) 館跡内部の埋戻し後



(1) 南辺全景 (西から)



(2) 南辺全景 (東から)



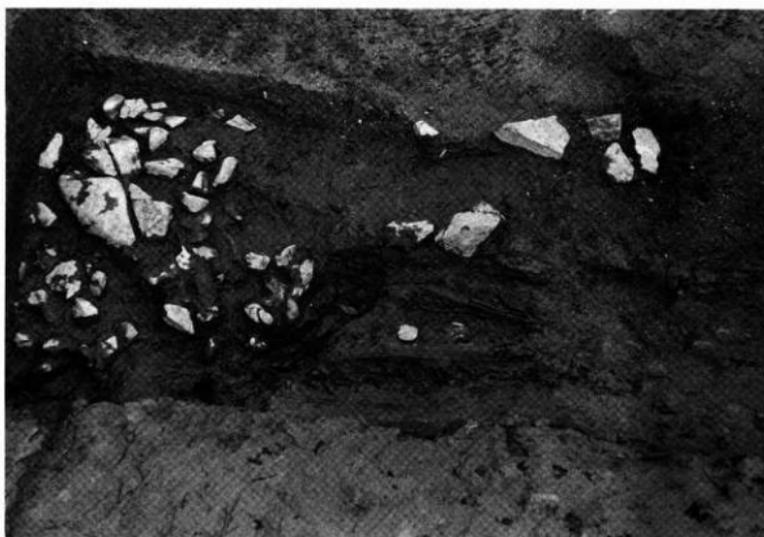
(1) 土塁盛土状況



(2) 濠内の堆積状況



(1) 入口部全景



(2) 入口細部



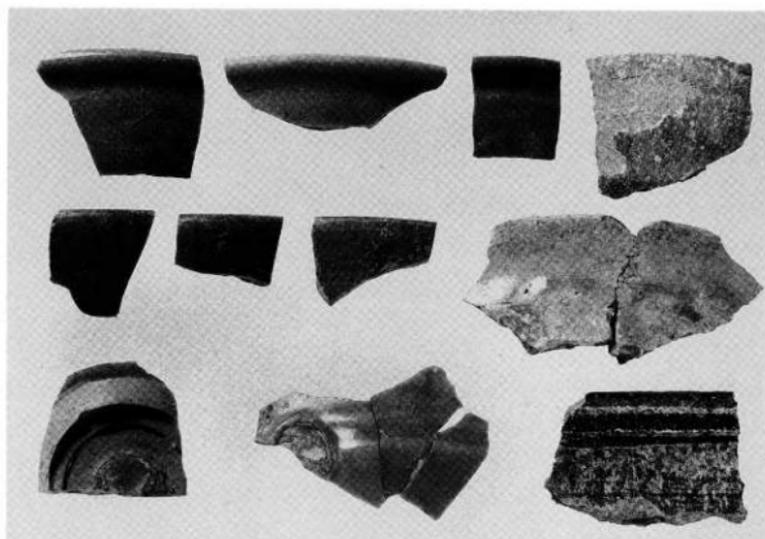
(1) 入口細部



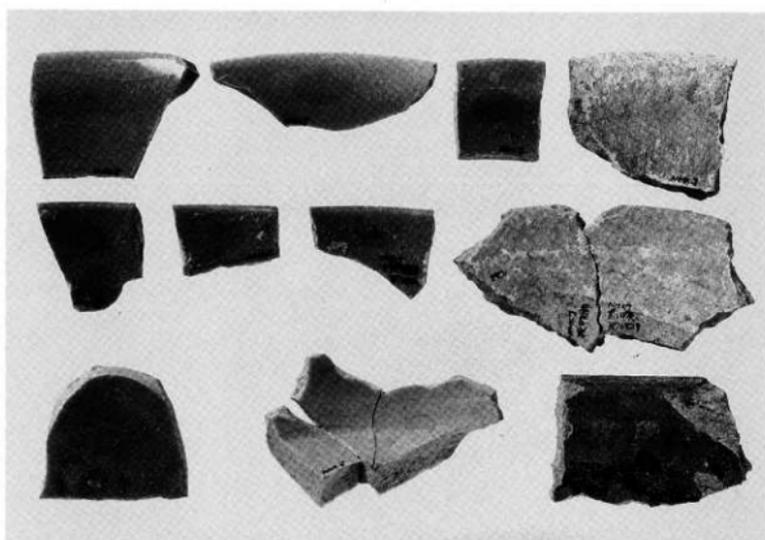
(2) 柵の検出状況



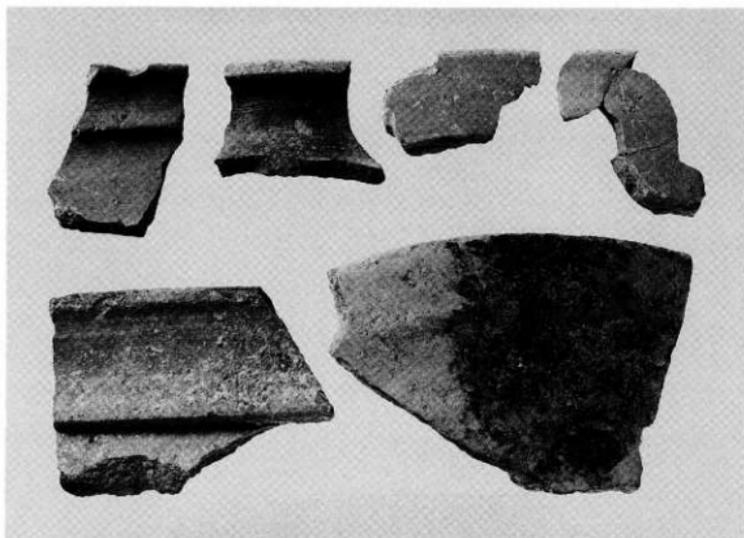
(3) 土塁下層の溝跡



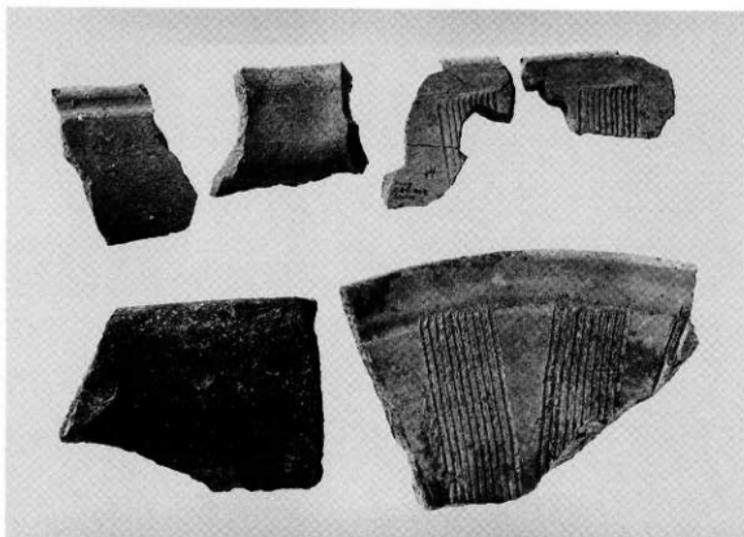
(1) 磁器・陶器 (外面)



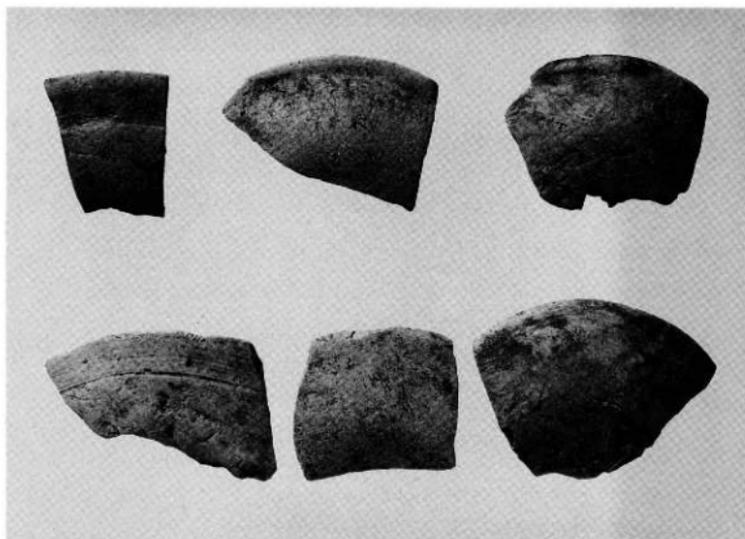
(2) 磁器・陶器 (内面)



(1) 陶器 (外面)



(2) 陶器 (内面)



(1) 土師器皿

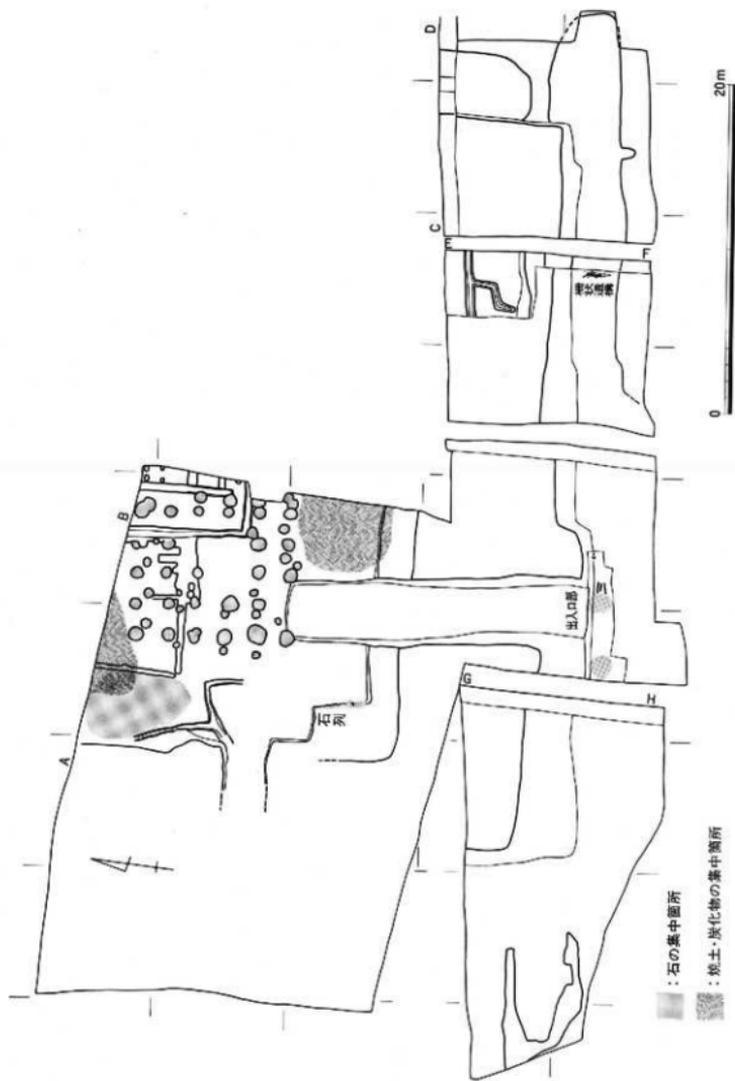


(2) 鉄製品

図版一四 小沢城跡 調査区

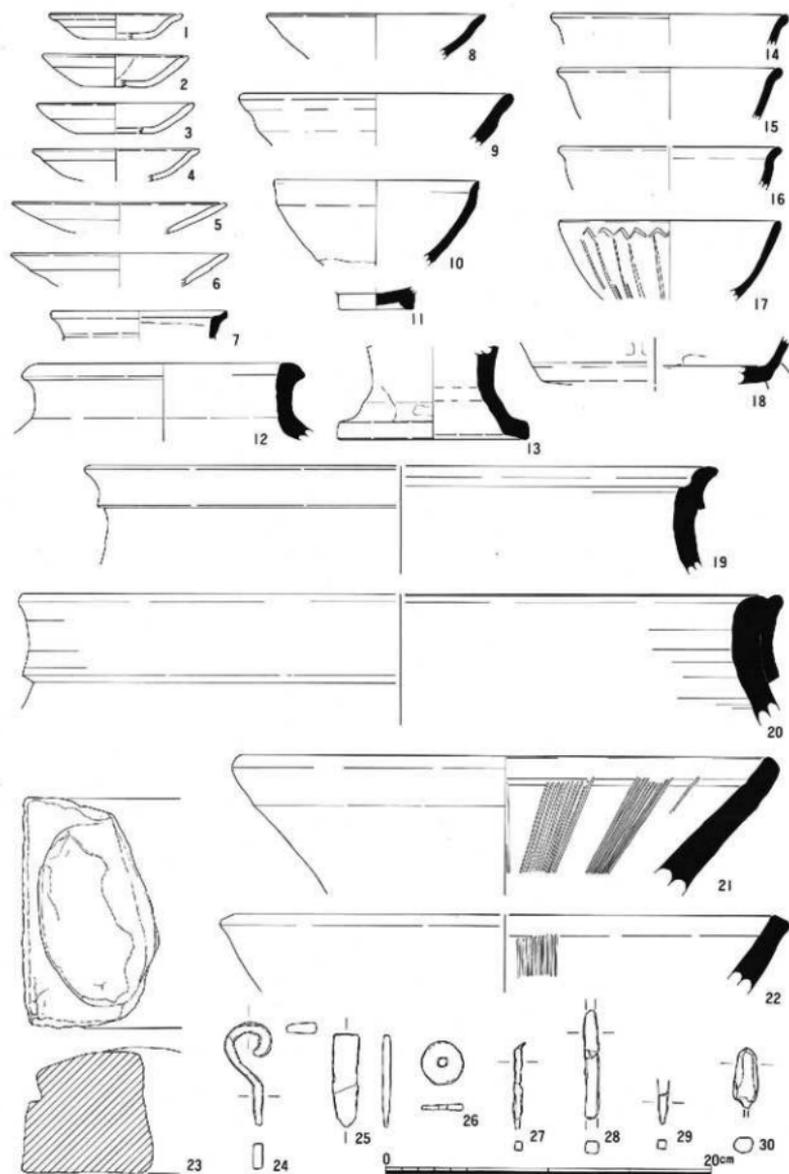


図版一五 小沢城跡 遺構



高麗中城C
 : 焼土・炭化物の集中箇所

0 20m



正恩寺遺跡図版



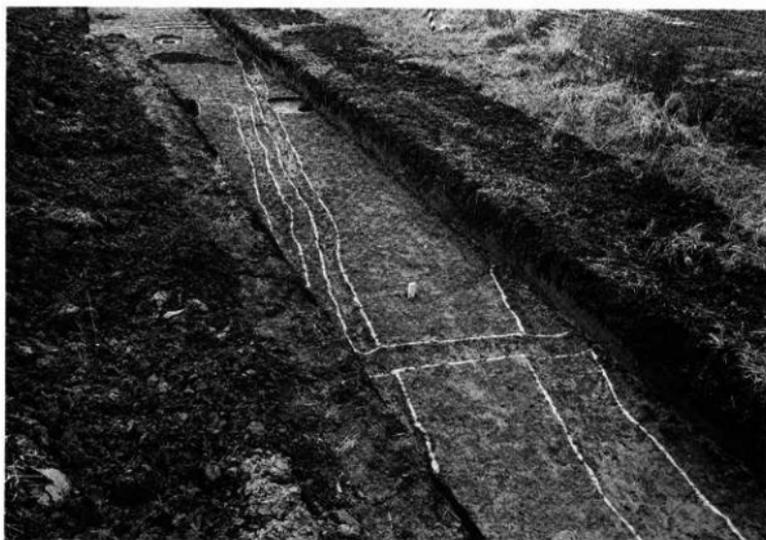
調査前風景（西から）



調査前風景（東から）



調査区（西から）



調査区（東から）



調査区西端部分 (南から)



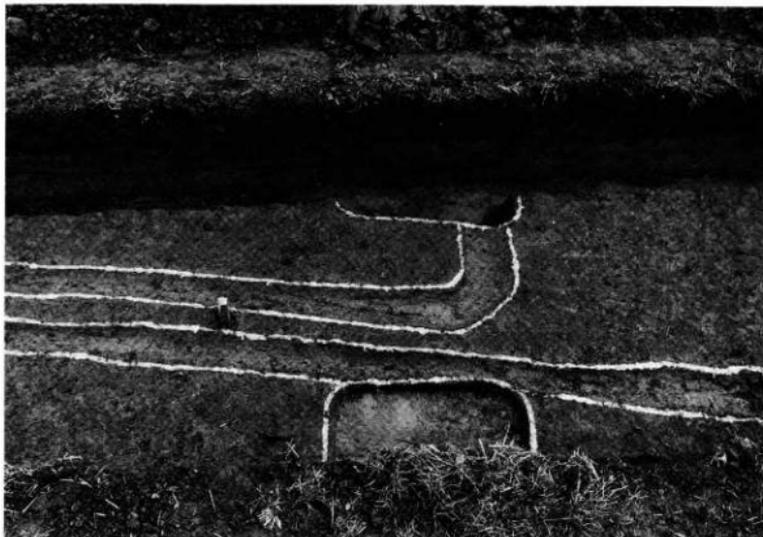
調査区中央部分 (西から)



SPO03、SPO04 (向う側) (北から)



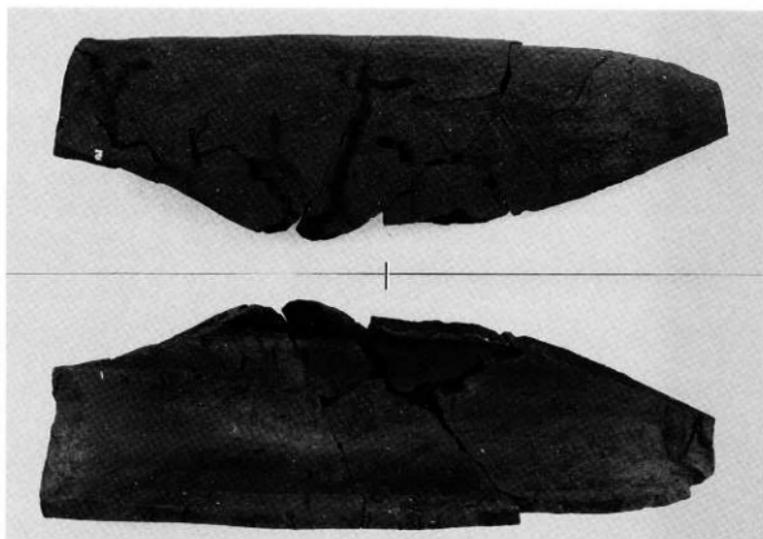
SPO04、SPO03 (向う側) (南から)



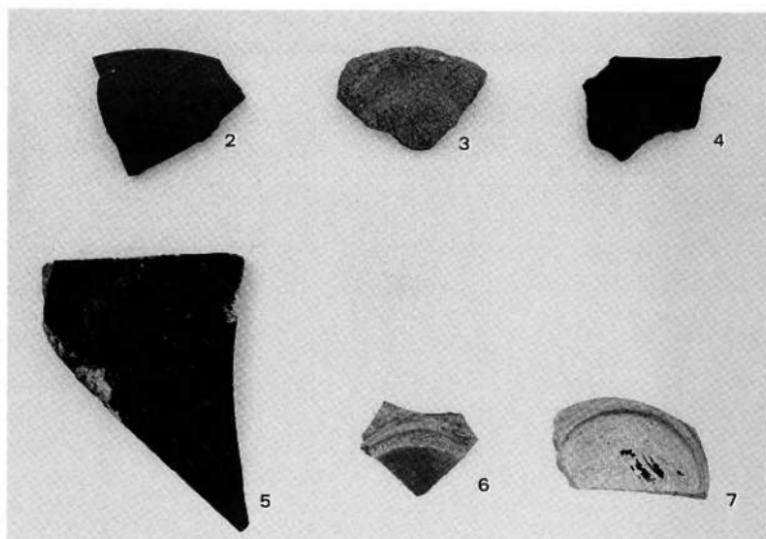
SP001、SP002 (向う側) (北から)



調査区中央部

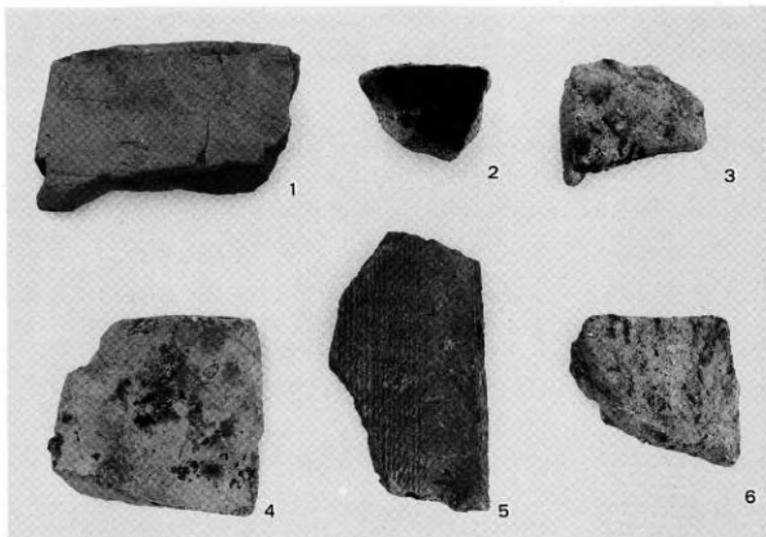


丸瓦

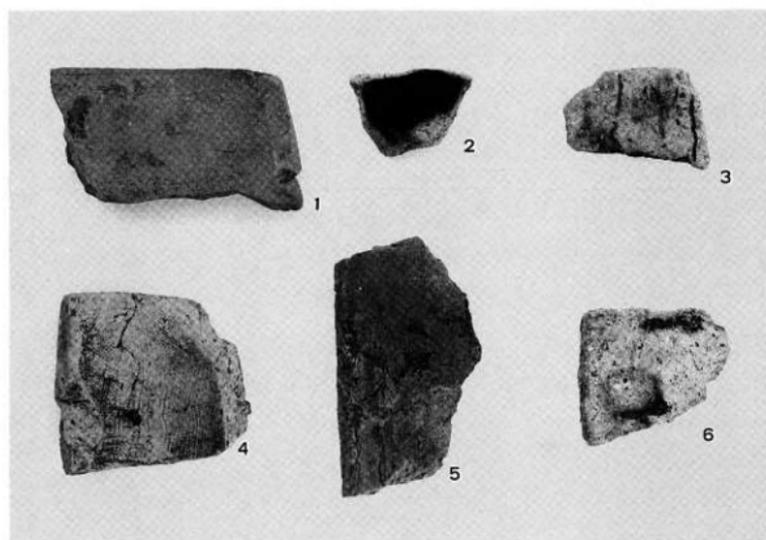


土器

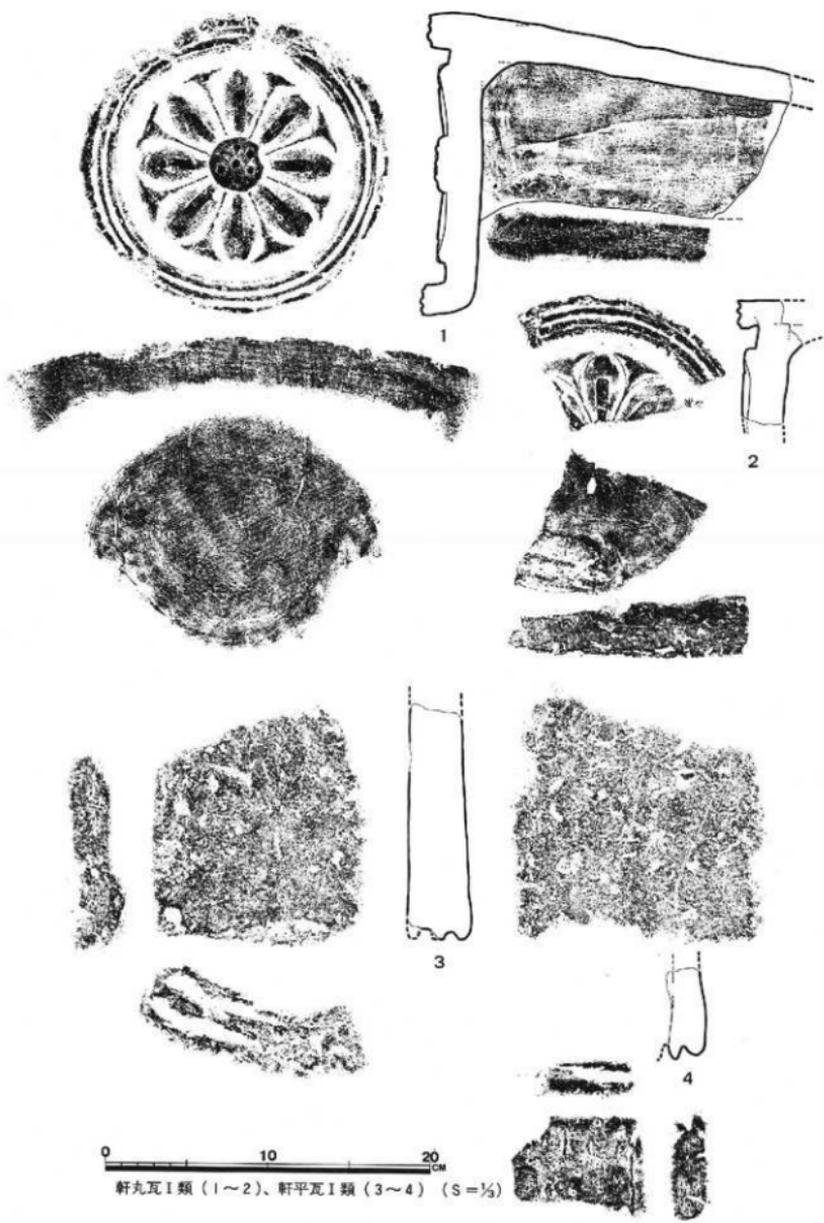
圖版七 正恩寺遺跡(出土遺物)



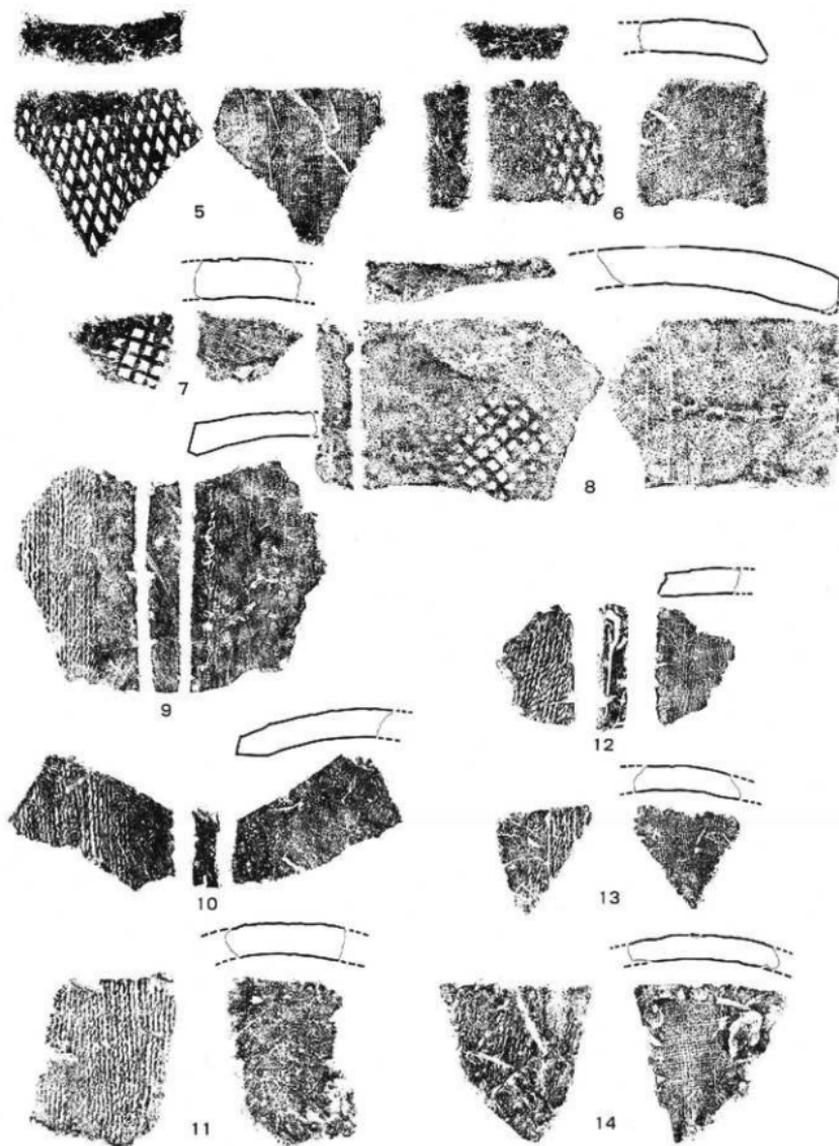
平瓦 (凸面)



(凹面)

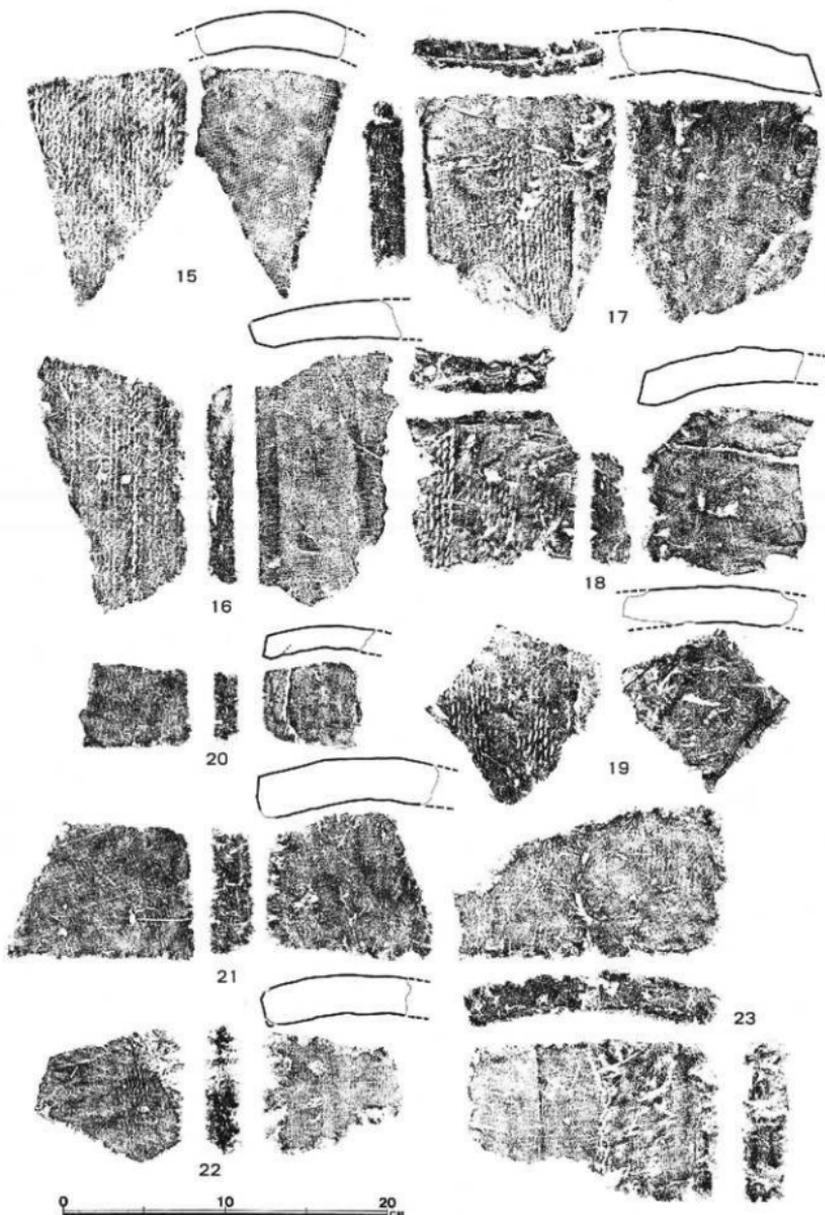


軒丸瓦I類(1~2)、軒平瓦I類(3~4) (S=1/2)

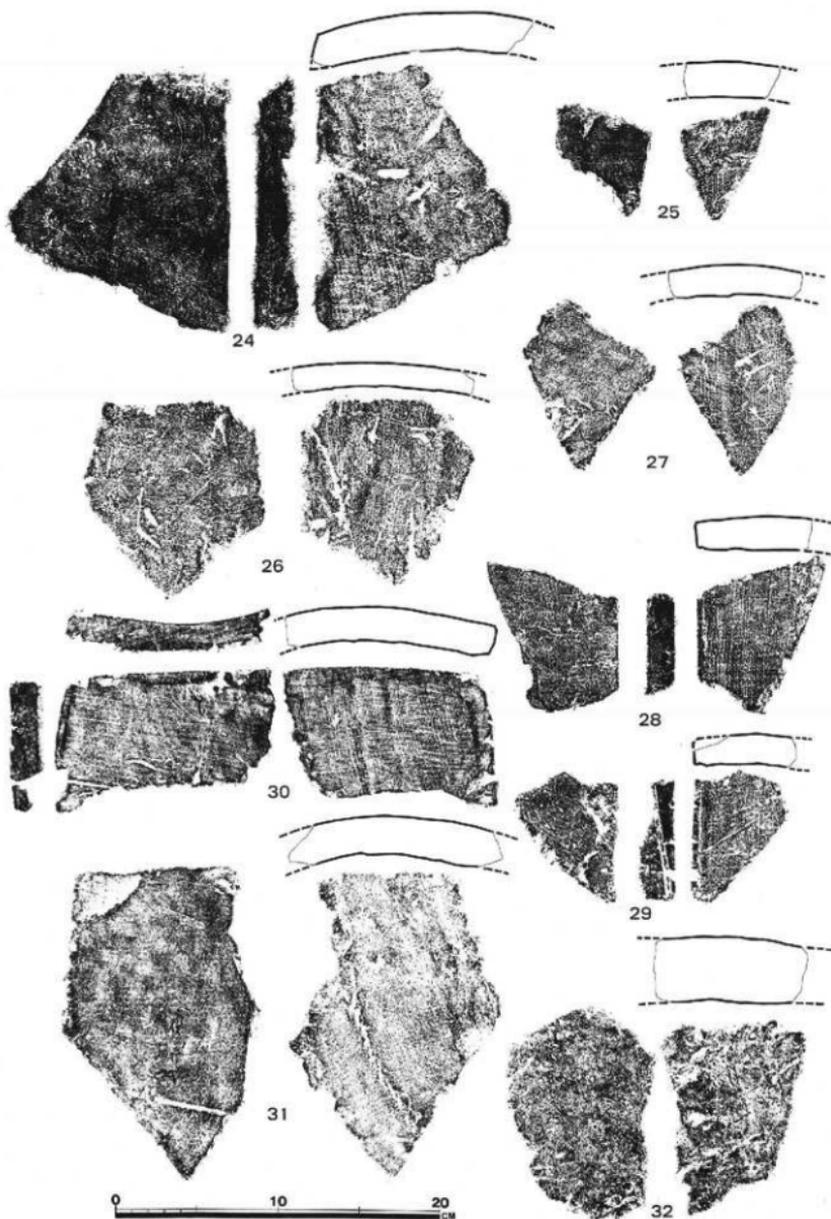


0 10 20
CM

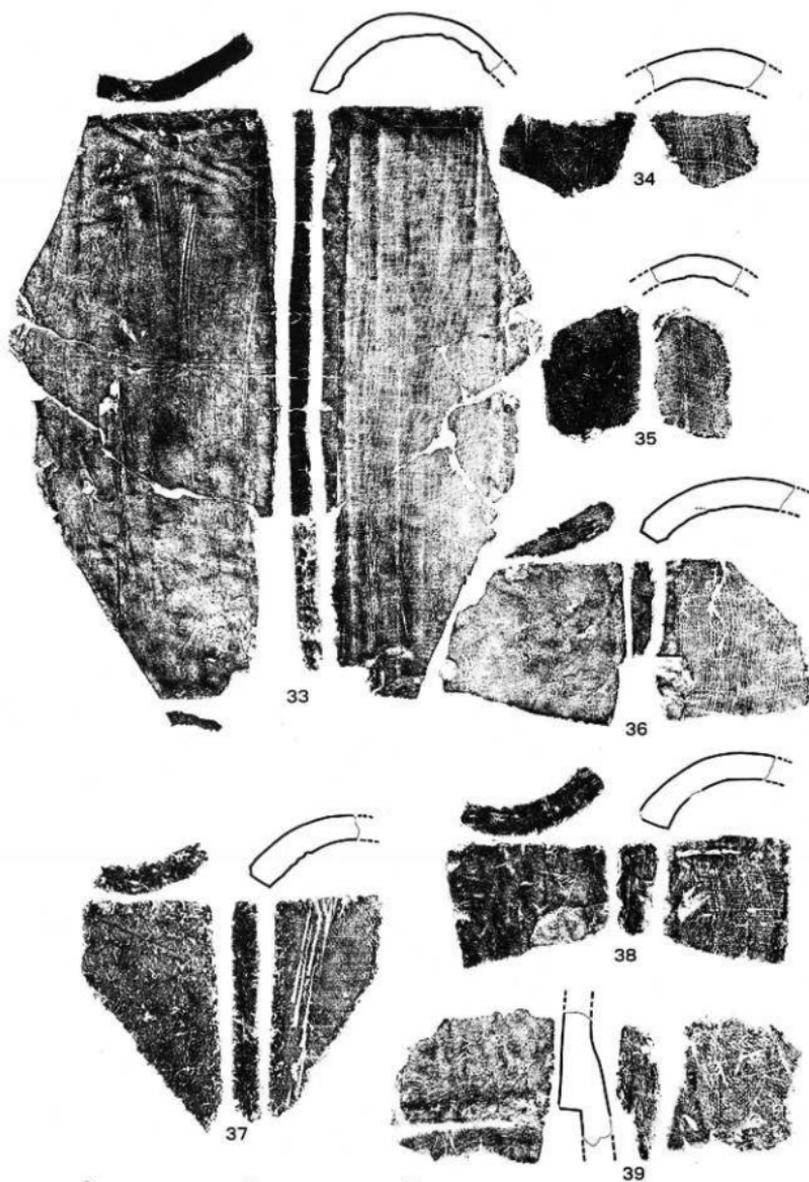
平瓦I類(5~6)、II類(7~8)、IIIa類(9~11)、IIIb類(12~16)(S=1/2)



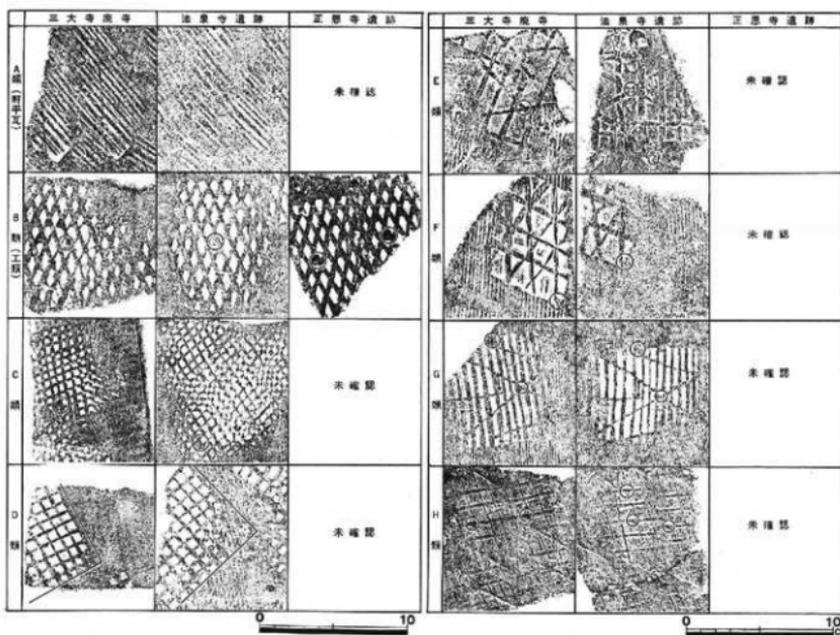
平瓦Ⅲb類(12~16)、Ⅲc類(17~19)、Ⅳ類(20~23) (S=1/2)



平瓦 V a 類 (24~25)、V b 類 (26~32) (S = 1/5)



0 10 20
CM
丸瓦 I a 類 (33~35)、I b 類 (36~38)、II 類 (39) (S=1/5)



(図4)

(図5)

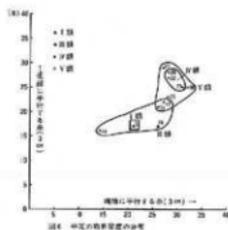


図4 中央の発掘位置の分布



図5 中央1層、2層の層別の分布

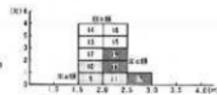


図6 中央2層以上の層別の分布

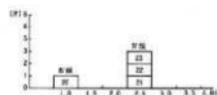


図7 中央3層以上の層別の分布

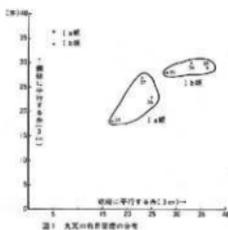


図8 東部の発掘位置の分布

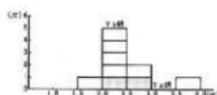


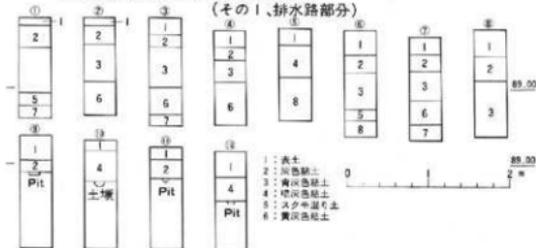
図9 東部1層以上の層別の分布



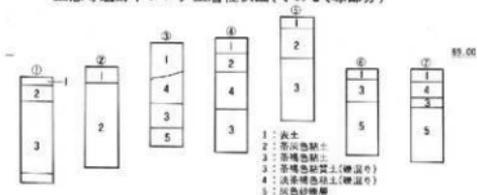
図10 東部2層以上の層別の分布

※図中、数字は、図1の発掘番号に対応

正恩寺遺跡試掘トレンチ土層柱状図 (その1、排水路部分)



正恩寺遺跡トレンチ土層柱状図(その2、塚部分)



昭和63年10月

沼場整備関係遺跡発掘調査報告 X V - 1

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大曾町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3-18